

真剣で私に恋しなさい  
!!S - 四神の王-

慶次

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

武士道プラン。それは過去の英雄たち（クローン）を現代に甦らせ、現代の人材不足を補い、又彼女たちと切磋琢磨させ一般の学生たちの能力向上も目的とされている

その中で一人新たにプランに参加するものがいた。

名前は「黄真 龍一（おうま りゅういち）」

彼の正体を知るのはわずかに二人。武士道プランを実行している九鬼財閥の長「九鬼

帝」

そしてその妻「九鬼 局」である。

一体彼の正体とは？彼はこれから先なにをしてくのか。それでは、彼の物語を見ていくとしよう。

# 目次

四神の王生誕

プロローグ

主人公設定

幼少期

成長期

64

原作突入

第壹話

第貳話

第参話

第肆話

第伍話

— 帰還 —	103
— 武士道プラン —	133
— 編入 —	201
— 編入初日 —	241
— 手合わせ —	283
— 『納豆小町』との出会い —	33
— 九鬼での1日 —	30
—	1

第陸話

第漆話

— 納豆小町再び —

387 332

# 四神の王生誕

## プロローグ

S i d e 九鬼地下研究所

ここはとある研究所の一室である。中には十数名の人がおり、彼らはその道のプロである。生物学者、物理学者、科学者、天文学者、医療学者など…、彼らは今ある計画のために動いている。

### 『武士道プラン』

これは、過去の英雄たちの細胞を研究し、その英雄のクローンを生み出し、現代の人材不足を補い、また彼女らと共に切磋琢磨させることで一般の学生たちの能力や

才能の向上を目的としている。

??? 「経過はどうなんだい？」

と、ふいに研究室の入り口から声がかかった。

主任 「はい、マーブル様。皆順調に育っています。バイタルも安定していますし

このままいけばあと数日で外に出すことができます。申し訳ありません、

わざわざご足労いただいて。」

と、入り口からかけられた声に対し応えたのはこの『武士道プラン』に必要な過去の英雄たちを生み出す研究をしている責任者だ。研究者らしく白のワイシャツに紺色のネクタイ、黒いスラックス。その上から白衣を着ている。

マーブル「そうかい。それはなによりさね。」

マーブルと呼ばれた女性は満足そうに主任の方へ歩み寄りながら頷く。彼女はこの『武士道プラン』を提唱した人物で、彼女が所属している世界的に有名な大企業九鬼財閥の従者部隊で序列二位の人物でもある。黒い服を身にまといどこか喪服のようなイメージである。そして二人は室内を回り、一つのリアクターの前で足を止める。

マーブル「この子ともうひとりが義経と弁慶、与一より早く生まれそうだね。この子は誰のクローンなんだい？」

主任「申し訳ありません。この子に関しては全て帝様により情報の公開が禁止されています。そしてなにより私たちも知らされてはいないのです。この子の素性を知るのは帝様と局様の御二人だけと聞いております。」

マーブルの質問に主任はそう答えた。その答えにマーブルは一瞬顔を歪ませるとすぐに元の表情に戻った。

マーブル「まあ、帝様が公開しないってんならしようがないねえ。時期が来たら教えてくれるだろうし。この子にはそれだけのものがあるってことだし、今はこの子が無事に生まれるのを待とうじゃないか。」

そう言い目の前のリアクターに目を戻した。主任は「そうですね。」と言いマーブルに倣いリアクターに目を移した。目の前のリアクターの中には透き通った緑色の培養液の中に約50cmほどの赤ん坊が、目を閉じて気持ちよさそうに眠っている。



しばらく眺めた後二人は各更新データのチェックをしながらリアクターの前を歩いていったときその音は響いた。

『ドツクン！、ドツクン！』

その音は部屋中に響いた。

マーブル「(なんだい、この音は?)」

マーブルは周りを見ながら内心そう呟く。現在も『ドツクン！、ドツクン！』と言う

音は部屋中に響いている。

学者「主任!!音は87番のリアクターからです!!」

主任「わかった。すぐに調べろ。それから従者部隊に連絡を。何が起こるかわからんからな。…申し訳ありませんマーブル様、念のため安全な上の管理室までお下がりにください。先ほども言いましたが、何が起こるかわかりません故」

報告に来た学者に指示を出した後、主任はマーブルにそう言った。

マーブル「仕方ないね。上で見てるから、しっかりおしよ。ヒューム、クラウドイオココは任せたよ。」

そうやってマープルは上の部屋に行ってしまう。代わりに現れたのは二人の男性だった。一人は殺伐とした雰囲気をもたせており、もう一人は穏やかな雰囲気をもたせている印象だ。

ヒューム「ふん、マープルめ人使いの荒い。」

そう毒つく男は殺伐とした雰囲気をもとわせる方だ。彼の名をヒューム・ヘルシング。九鬼家従者部隊の序列零位で九鬼家に使える有能な執事である。しかし、戦闘力に特化しているためやや好戦的でプライドも高い。足技が主体。

クラウドイオ「まあ、いいではありませんかヒューム。」

そう言つて嗜めるのは穏やかな雰囲気をもつた男、クラウディオ・ネエロである。彼も九鬼家に使えており、序列は第三位である。非常に優秀な執事で、英才教育を受け執事学校を主席で卒業。その優秀さから『万能執事』『ミスターパーフェクト』ともよばれる。戦闘力もとても高く鋼の糸で相手を拘束したり、短刀で戦つたりする。

ヒューム「ふん、まあいい。しかしなんだこの赤子は。部屋に響く心臓のような音に呼応するかのように、赤子の纏う氣がとてつもなく増大している。

ふ、これは将来が楽しみかもしれないな。」

そう言い、ヒュームは口の端をつりあげる。

クラウディオ「ヒューム氣がもれていますよ。抑えてください。…しかし、私も氣になります。生まれて間もない状態でこの氣の内包量、確かに将来

が楽しみです。」

ヒュームを嗜めるとクラウドデイオはリアクターに目を向け、笑いながらそう言った。周りでは学者たちがデータのチェックやバイタルの確認を行っている。そのとき、一際大きな心音があったと思っただけでリアクターの方から『ビーー！、ビーー！』という高い警戒音が鳴り響いた。

ヒューム「どうした!? 状況を報告しろ!!」

主任「はい!! データは全て高い数値を出しています! 簡単に言うとな現在進行形で運動をしている状態になります。そしてこれは妊婦の陣痛と酷似しています。これらから考えられることは、恐らくですが自分から外に出ようとしていると思われま。」



ヒューム「俺とクラウディオ以外は全員この部屋から出る。主任と数名は上の管理室へ行け。迅速に動け。」

ヒュームの指示のとおり、研究者たちは一部のものを管理室に残し非難した。管理室ではマーブルと研究者たちが固唾を呑んで見守っている。そんな中ヒュームはとうとうと……

ヒューム「さて、鬼が出るか蛇がでるか。どちらにしても赤子でないことを祈るばかりだ。」

クラウディオ「ふふ、楽しそうですねヒューム。また氣がもれていますよ。」

ヒューム「ふん。そういうお前こそ、なにやら嬉しそうだな。」

クラウドディオ「当然ですよヒューム。命が生まれることはとても素晴らしいことで  
す。それが将来有望そうならなおさらです。」

ヒューム「ふ、確かにな。」

その会話が終わった直後、**!!!**ビビが入ったりアクターについて限界が来た。

『バリーイイイイイイイイン!!!』

という音と共にリアクター**山**のガラスが内側から外側にはじけとんだ。しかしヒュームとクラウドディオは他のリアクターやデータの入ったスーパーコンピューターを氣で包んだり、拳や足で捌いていく。破片が飛んでこなくなつたのをかくにんしながら二人はリアクターを見た。ガラスは割れ、透き通つた緑色の培養液が回りに流れ出ていた。しかし驚くべきはそこではない。



ヒューム「ふ、なかなか楽しませてくれるな。」

クラウディオ「ええ、本当に。これからが楽しみです。」

二人の執事は楽しそうに、しかしとても嬉しそうに頷きあつた。その赤ん坊はリアクターの上に寝転がるでもなく、その膨大な氣で宙に浮いていたのだ。二人はリアクターに近づき、クラウディオが抱きかかえようとした瞬間：

「!?」

二人に強烈な殺氣が叩き込まれた。しかし、それでもクラウディオは抱きかかえよ

うとする。愛おしそうに満面の笑顔を向けながら。その殺気は一瞬で今は二人を受け入れたのかクラウドデイトに抱きかかえられようとしている。ヒュームはそれを警戒しながら見ていた。今ではクラウドデイトに抱かれ体を預けている。どうやら男の子のようだ。

ヒューム「クラウド、殺気の中てられた時お前には何が見えた？」

クラウドデイト「私には、この子の後ろに龍が見えましたよ。」

ヒューム「そうか。ふ、やはり帝様が情報を公開しないのもなにやら訳がありそうだな。」

クラウドデイト「そのようですね。しかしそれは私たちではどうすることもできません

ん。それは帝様か局様から教えていただけなのでしょう。それはそうと名前を考えてあげませんか。いつまでも『この子』では可愛そうですからね。」

マープル『そのことについてなんだが、それは帝様と局様に任せたらいいんじゃないのかい？ あたしたちやその子が誰のクローンか知らないんだし、その子も生まれにちなんだ名前のほうがいいだろうさ。』

そうやってマイクで会話に混ぜてきたのは管理室で一部始終を見ていたマープルだった。マープル自身も知らないため、知っている人物に任せようがよいと考えたのだ。

ヒューム「好きにしろ。俺は周辺の警戒にあたる。」 シュンツ!!

ヒュームは一言言ってその場から消えてしまった（正確にはものすごく早く移動しただけ）。

クラウディオ「それではマーブル様この子をそちらに預けに参ります。その後のこ

とはお願いします。今日は帝様も局様もこちらにご在宅です。先ほ

ど連絡はいたしました。すぐにお会いになるそうです。私はここの

片付けがありますので。」シユンツ!!

言うが早いかクラウディオは管理室にいた。

マーブル「ありがとうよ。クラウ。それじゃ片付け頑張っておくれ。」

クラウディオ「簡単な事でございます。」 シュン!!

お決まりのセリフをはいてクラウディオは片付けに戻っていき、マールプルはその場を研究者に任せ管理室を後にした。

S i d e O u t

S i d e 九鬼 帝

ひさびさに家に帰って局と揚羽、家族水入らずで過ごしてたらクラウから87番リアクターから子供が自力で出たと報告があった。いや、聞いたときねマジで思った

よ。さすが——だなんて。んで、マーブルが子供つれてくるから名前つけてくれだつて。こりや局と一緒に考えなきやな。

局「帝様先ほどの連絡はクラウからですか？」

帝「そ。ほら例のプランの87番リアクターの子の話。」

局「87番と言うと例のあの？」

帝「そ。なんかリアクターぶっ壊して自力で出てきたみたい。」

局「自力で!?…いやしかしそれくらい出きるのかもしれないね。」

は  
そう言うとは一人考えだしてしまった。今九鬼 帝が話している女性「九鬼 局」

帝の妻である。一代で世界有数の大企業になった九鬼財閥であるが、その躍進の裏には彼女がいたからだと言っても過言ではない。現在は長女揚羽を儲け幸せではあるが、帝が忙しく世界中を飛び回っているため子育てに帝の穴埋めとこちらも忙しくも充実した毎日を送っている。

揚羽「ははうえ？どうかしましたか？」

局「ん？いやなんでもないぞ揚羽。」

舌足らずな声で呼ぶのは娘の揚羽である。まだまだ話したばかりであるが

『ははうえ』と呼ばれるのは嬉しいものである。

帝「でよ、マープルがその子つれてこつちに向かつてんだけど、正体知ってんの俺達だけだし名前決めてほしいんだってさ。それで局なんかいい名前ない？」

局「？我が決めてよろしいんですか？」

帝「いいよ。」

局「でしたら…。そうですね、あの子は——でしたからそれからとって

『黄眞 龍一（おうま りゅういち）』というのはどうでしょう？」



帝「ふむ、なるほど…。いいな！よし、それにしよう！」

局「本当によろしいんですか？」

帝「いいんだよ。こういうのはファイリングだ。もう決めちゃったし、それ以外だともう違和感あるぐらいいまできちやつてるから決定だな。」

局「ふふ、ありがとうございます帝様。」

するとそこへ、『コンコン』とドアをノックする音が響く。

局「なにようじや?。」

執事「マープル様がお出でです。」

局「連絡は来ておる。通せ。」

そして『どうぞ』という声のあとドアが開き、赤ん坊を抱いたマープルが入室してくる。

マープル「すまないねえ帝様、局様。家族の団欒の時間を邪魔しちゃって。」

帝「気にすんなよ。仕方ないさ。それに邪魔だなんて誰も思っていないさ。なく揚羽。」

揚羽「うん！おばあちゃんまたおはなしきかせて！」

マーブル「そうかい。ありがとうよ帝様、揚羽様。」

そう言つてマーブルは礼を述べる。

局「マーブルよ。その子が件の？」

マーブル「ああそうさ。クラウから聞いてるだろうけど、この子の名前を決めてほしくてね。とうかこの子、一体誰のクローンなんだい？教えてはもら

えないのかい？」

と尋ねるが

帝「ん、その子自身には早いうちに教えるつもりでいる。自分の力に振り回されることもないだろうし。そうだなあ、確か項羽のは年が二十五歳になったとき教えるんだっけ？じゃあその時にそいつのことも教えてやるよ。」

と言われ少し気落ちしているマーブル

マーブル「そうかい。ならその時を待つとするかね。それでこの子の名前は決まってるのかい？」

帝「ああ。それならもう決まってる。局が考えたんだがいい名前だぜ。それはな『黄眞 龍一』ってんだ。いい名前だろ。」

マーブル「『黄眞 龍一』…。まあ、いいんじゃないかい。というかそれが前の名前なのかい？」

帝「いや正直なところわからねえ。『いた』っていう事実はあるんだが名前が何なのか、性別とか詳しいことはほとんどわかってねえんだ。わかってんのがその正体くらいなものさ。」

マーブル「ふう、まあそれならしょうがないね。…帝様、局様このk、いや龍一を抱いてやってはどうかねえ。」

帝「そうだな。局抱いてやれ。」

局「我が先でよろしいのですか？」

帝「いいから。ほらマーブル。」

俺がそういうとマーブルが局に龍一を抱かせる。龍一を抱いた局は愛おしそうに、そして優しく微笑んでいる。いや、局その笑顔は反則でしょ。揚羽のときも同じような顔してましたよ。もうね慈母神だよねホント。拝み倒してよかったわマジで。揚羽もキラキラした目で見てるし、まったく誰に似たんだか。

局「帝様も、御抱きになりませんか？」

帝「ん？なんでもういいのか？」

局「いえ、なんだかこちらを見て微笑んでらしたので…。」

帝「そっか。そうだな。じゃあ抱かせてもらおうかな。」

そうやって局のもとに歩いていく。そして局から龍一を渡される。そのとき暖かい風が通り過ぎたような気がした。春に新芽が芽吹くがごとく、広大な草原に寝転がり大地の暖かさを感じるかのような。そんな風に思っていると三人が注目していた。どうやら少し呆けてしまったようだ。

マーブル「それじゃあ、あたしや行くとしますかね。帝様ちよつと龍一を見ていて

もらえませんかね。準備ができたなら迎えに来るんで。」

帝「ん。わかった。頼んだぞ。」

マーブルは『はいよ』と言って部屋を出て行った。俺はマーブルを見送り、スヤスヤと眠っている龍一に視線を移した。

帝「よく眠っているな。」

局「寝る子は育つと申しますし、元気に育ってほしいものです。」

帝「そうだな。なにやらヒュームもクラウディオも龍一には期待しているみたいだ



しな。」

そう言って会話を切った後、俺たちは家族の時間を過ごすのだった。

S  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

# 主人公設定

主人公設定（原作開始時）

名前 黄真 龍一

年齢 18才

誕生日 4月9日

身長 183cm

体重 74kg

一人称 俺

髪型	セミロング
髪の色	ブラウン
目の色	赤
容姿	FINAL FANTASY VIIIのスコール・レオンハートと瓜 二つ（傷はないよ）
血液型	AB型
スリーサイズ	unknown
体格	普通だが筋肉質
服装	カジュアル系

趣味

鍛錬 食べ歩き ギター バスケツトボール

習得資格

普通自動車 大型二輪 危険物全種 e t c

特技

完全記憶能力

備考

『武士道プラン』により生み出されたある人物のクロージン。

その生まれ持った才能ゆえ、幼少の頃より、九鬼家に莫大な利益をあげる。戦闘面でも僅から才にして、ヒュームの蹴りを回避するほど。原作開始時では、九鬼家の仕事を週二日バイト感覚で手伝っているため、お金には不自由していない。

戦闘力はヒュームや川神鉄心よりも、遥かに高みにいるが今の生活に満足しているため、腐ることなく学園生活を満喫している。将来は、世界中を旅した後九鬼財閥に就職するつもり。



顔を洗い、うがいをしてタオルで拭いた後あくびをかみ締め一言呟いた。そして朝の鍛錬に行くためP O m a のジャージに着替え部屋を出た。

集合場所に行く前にいつもすることがある。それは一つ年下の男「那須 与一」を起こすことだ。ちなみに与一が11才で、俺こと「黄真 龍一」が12才だ。俺と与一、他にも三人ほどいるが俺達はただの人じゃない。世界有数の大企業九鬼財閥の推進プラン『武士道プラン』により生み出された過去の英雄のクローンだ。現在の人材不足を補い、また若い世代の能力向上が目的らしい。

## 『那須 与一』

彼は平安時代末期の武将「那須 与一（なすの よいち）」のクローンである。1185年の屋島の戦いで、平氏方に掲げられた扇の的を射落とすなどの功績を挙げている武将で、日本でも有名である。と考えているうちに、部屋の前に着いていた。「コンコ



部屋に響く俺の声と共に与一は「ビクウツ!？」としながら、ベッドから起き上がった。そして、おそろおそろ俺の方へ顔を向ける。

与一「お、おはよう兄貴。…もしかしてまた?」

龍一「おはよう与一。兄貴分に毎朝起こされていいご身分ですね? (ニコツ)」

俺は少し怒った風を装いながら、ニツコリと笑いかける。与一いわく「死の微笑み(デス・スマイル)」らしい。ネーミングセンスが中二病だぞ。大丈夫かこいつ?

龍一「ほれ、さっさと準備しろ。弁慶に怒られたくないだろ。お、そうだ。あと5分でグ

ラウンドにこなかったら、俺と弁慶でキン〇バスターな。あれ、やってみたかつ



た

んだよな〜」

与一「ゲツ!?マジかよ!?勘弁してくれよ兄貴〜」

龍一「ならとつとと準備しろ。ほら、あと4分30秒しかないぞ。つてことで先行くぜ

〜、あとでな〜」

そう言って俺は与一の部屋を後にした。後ろの方ではバタバタと慌しく音がしている。少し駆け足でグラウンドへと向かった。グラウンドに着くとそこには6人の人物がいた。一人は執事服を身に纏い、ジャージだったたり、道着だったたり動きやすそうな服をきている。

??? 「む、来たか龍一」

龍一「おはよう。ヒュームのおっさん」

ヒューム「ふ、柔軟でもしておけ」

龍一「はいよ」

最初に俺に気づいたのは執事服を着た男、名を「ヒューム・ヘルシング」

九鬼家従者部隊序列零位であり部隊のトップで、俺の武術の衣装でもある。武術は5才からやっており、武術を教えると言われ、オッサンに紹介され挨拶を交わした後、左側から横薙ぎの蹴りが飛んできたので、俺はそれに左手を合わせ勢いを殺さず、それを軸に飛び上がり一瞬足の上で左手だけで倒立したあと手を離し着地した。つまり大人の蹴りをただの5才児が避けてしまったのだ。これには一人を除き驚愕した。ヒュームはにやりと笑ったあと俺に武術の指導をした。それはもうハンパじゃない熱の入れようだった。それは…うん。思い出すのはやめよう。トリップから戻ると、俺は5人の

近くにいた。そのうちの二人がこっちに気づいた。

???・??? 「フハハハハハハ!! 龍一よ、おはよう!!」

龍一 「おはよう。揚羽、英雄」

揚羽 「うむ、龍一よ。今日も元気そうでなによりだ」

龍一 「おかげさまで。いいもん食ってるからな」

俺に挨拶してきたのは九鬼家の跡取り「九鬼 揚羽」と「九鬼 英雄」の姉弟だ。

本来なら「様」をつけ敬語で話さなければならぬのだが、公的な場所や九鬼の人間、または本人が許可した場合において、こうしてフランクに話しかけている。

揚羽については二つ年上ということもあり「さん」づけで呼んだが「しつくりこないから呼び捨てでいい」と言われ、いろいろ言いあつたが結局いうとおりにした。

「九鬼 揚羽」は九鬼家の長女で現在中学二年の14才だ。額にはバツ印の傷がある。何か九鬼家のしきたりらしい。髪型はセミロングで、綺麗な銀色をしていてカチューシャで前髪を上げている。顔も小さくパーツも整っているので美人といわれる部類だろう。道着を着ているが身に纏う覇気が野暮ったさを感じさせることなく、凜とした印象を見る人にあたえる。

英雄 「うむうむ。九鬼家の料理人の腕は最高クラスだからな。フハハハハ!!」

龍一 「わかってんよ。朝っぱらからテンションたけーなオイ」

英雄 「それは我が健康である証拠よ。我は王になるもの。健康管理も万全なのだ」

龍一 「さすがだな英雄。んじや柔軟すつか。英雄、一緒にやろうぜ」

英雄 「うむ。我の友の頼みならば是否もなし。手伝おう」

龍一「サンキュー」

柔軟を手伝ってくれるのは「九鬼 英雄」揚羽の弟で俺の一つ下で小学五年の11才。揚羽と同じく額に傷がある。髪は短めで逆立てていて、銀髪。容姿も整っている。揚羽と同じく道着。姉ほど武術に才はないが一般レベルでは高い。代わりに知略、政治面に強く九鬼家の仕事にたまに口を出している。柔軟を終えると三人の女の子が歩いてくる。

??? 「おはよう、龍兄」

龍一「ん？おお、おはよう義経」

??? 「おはよう、龍」

龍一「弁慶もおはよう。いつも通りダラツとしてんな」

弁慶「それが私の持ち味じゃん。あゝ早く川神水が飲みたい」

義経「こら弁慶。飲みすぎるのはよくないぞ。これか」 「ダキツ！」 うわわ!？」

弁慶「いいじゃん主。やることやってるし、浴びるほど飲むわけじゃないからさ」

義経「それはそうだけど…うゝ、龍兄からも言ってくれ」

龍一「え？別に分量間違えなければいんじゃないやね？」

義経「まさかの期待の援護無し!？」

弁慶「さすがは龍。わかってるゝ」

義経「うー、自分の部下も説き伏せられないなんて」

龍一「ハハ！そんなに深刻になるなつて。俺も弁慶もちよつとした冗談だからさ」

それを聞いて義経はパツと笑顔になる。弁慶は主のころころ変わる表情をニコニコしながら見ている。

話しかけてきたのは『源 義経』と『武蔵坊 弁慶』のクローンで名前もそのまま。

### 『源 義経』

性別は女性で、すべてが過去の英雄と一緒にという訳ではない。11才。

平安時代末期の武将で『源 頼朝』の弟。頼朝が伊豆で挙兵すると、幕下に加わり、「治承・寿永の乱」を皮切りに、一ノ谷、屋島、壇ノ浦の合戦を経て平氏を滅ぼした。最大の功労者であり、まさに甦った英雄としてふさわしいのだ。

長い髪を高い位置で一つにまとめポニーテールにしている。髪の色は黒。クリツとした大きな目特徴で、かわいらしい印象を持つ。

### 『武蔵坊 弁慶』

義経と同じく性別は女性。11才。

平安時代末期の僧衆（僧兵）で義経に仕えた家来である。五条の大橋で義経に出会い最後まで仕えた。義経と共に頼朝の挙兵に参加し、平氏討伐で功名をたてた。頼朝に主が朝敵であるとされたが、義経の京入りに同行した。その後奥州入りし藤原秀衡のもとへ身を寄せるが、秀衡が死ぬと、子の藤原泰衡は頼朝の威を恐れて、父の遺言を破り、義経主従を衣川館に襲った。多数の敵勢を相手に弁慶は、義経を守って堂の入口に立って薙刀を振るって戦い、雨の様な敵の矢を受けて立ったまま死んだとされ、「弁慶の立往生」と後世に語り継がれており、彼女も英雄と呼ぶにふさわしい血をひいている。

髪は黒く長さは腰までありウェーブがかかっている。切れ長の目でキツイ感じがするが、飄々とした佇まいがそれを感じさせない。ちなみに川神水とは川神市で手に入る



清涼飲料水で飲むと酔った気分を味わえる。だがアルコールではないので未成年でも飲める神秘の水だ。

??? 「おはよう、龍君。」

龍一 「おはよう、清楚」

清楚 「あんまり義経ちゃん、いじめたらだめだよ」

龍一 「いや、義経があんまり可愛いからさ。ついな」

嗜めてきたのは『葉桜 清楚』性別は女。俺と同じ12才。

彼女については九鬼家でも一部の人間しか知らない。俺は知っているが…今は秘密だ。

義経「可愛い／＼／＼／＼／」

義経は頬を赤くして俯いてしまった。垂れた頭を撫でていると

弁慶「えゝ私はゝ？」

龍一「もちろん弁慶だって可愛いよ」

弁慶「／＼／＼／＼／」

そう言ってやると弁慶は頬を赤くしながら左腕に抱きついた。なに気に弁慶はスキ  
ンシップを求めてくるのだ。すると

揚羽・清楚 「「じゃあ我・私は？」」

龍一 「揚羽は可愛いし、年上だから綺麗つてのもあるかな。清楚は…チクシヨウ！  
可愛いじゃね えか！」

揚羽 「むう／＼／＼／＼／」

清楚 「もう／＼／＼／＼／」

揚羽は頬を赤くし顔を逸らしながら俺の頭を撫で、清楚は俺の背中に顔を埋めてい  
る。

何でみんな顔を赤くしてるんだろう？…とは疑問に思わない。俺はどこぞの『女性し  
か乗れないパワードスーツ』に乗れた男や『科学と魔術を打ち消す右手』を持った男の  
ように天然でも鈍感でもないつもりだ。

ぶっちゃけ女のアピールにも問題あるし、気づかなかつたら暴力や電撃つてなに？

いくら可愛くても「こりやないわ〜」しか言えねえ。  
そうして和んでいると、不意に義経が

義経「なあ龍兄、与一はどうしたんだ？起きてなかったのか？」

龍一「あゝ、俺がいつも通り叩き起こしてやったよ」

義経「うっ、いつもすまない龍兄。義経が言っても全然直らないから」

龍一「お前のせいじゃねえよ。気にすんな。起きないあいつが悪い。それにあと一分でここに来な　　かつたら罰を与えると言ってある」

弁慶「罰？」

龍一「そ、罰。俺と弁慶でキン〇バスター。やってみたいから、できれば遅れて来てほしい。むし　　ろ遅れろ！」

弁慶「へく、それは面白そうだ」

義経「二人とも笑顔が怖いぞ。義経がもう一回言ってみるからちよつと待ってくれな  
いか」

弁慶「何度も主に言われてるのに直さない与一が悪いのさ。主も部下を褒めるだけ  
じゃなく、締め るところは締めないと」

義経「いや…だけど」

弁慶「主」

義経「うっ…わかった。でもちゃんと加減はするんだぞ。龍兄も」

龍一「まかせな」

俺と弁慶はともいもい笑顔で義経に返した。そして、それから待つこと5分。ようやく与一が姿を見せた。

龍一「遅えぞ与一」

与一「勘弁してくれよ兄貴。いくらなんでも5分は無茶だつて」

龍一「オメーがちゃんと起きりやあいんだよ。あ、遅れたから罰ゲームね。朝いつたやつ。弁慶　にも話してあるから」

与一「え？」

弁慶の方に視線をやるとものすごくいい笑顔をしていた。義経に助けを求めるが「これも与一のためだ」といつて聞いてもらえず、ちよつと青ざめていた。

全員そろったので鍛錬を開始した。まずはランニング。400mのトラックを20周。俺と揚羽以外は。俺と揚羽は九鬼家の外周を20周。俺は20kgのウエイトを、揚羽は10kgのウエイトをそれぞれ両手足に着けたまま。

ランニングのあとは場所をトレーニングルームに移して筋トレ。さすがは九鬼、あらゆるトレーニング機があるぜ。使うの初めてじゃないけど。

筋トレはクラウディオ（通称クラウ）が作ってくれたメニューをすることになっている。

クラウはその人ができる量を計って組まれているため、非常に効率がいい。

ん？なにに腕立て1000回、腹筋1000回、背筋1000回、スクワット、ベンチプレス、etc

おいおいクラウさん。なんか昨日より増えてるんですけど。あく飯ちゃんと食べっかな。

筋トレの後は各々の分野に分かれる、義経は剣術、弁慶は錫杖なので棒術、与一は弓術。俺、揚羽、英雄の三人は拳の武術になる。清楚は筋トレで終わり。今頃シャワーでも浴びてるころだろう。俺も含め、英雄や才能のあるやつばかりで実力の伸びがハンパじゃない。ま、俺も負けてやる気はないんだけど。

今は揚羽と組み手をしている。だいたい15分くらいたっている。拳の応酬をし、お

互い間合いを離し距離をとっている。だいたい3〜4mくらいだ。

揚羽「やはり強いな龍一よ。今までおまえからは一本も取っておらんからな。今日こそ一本取らせ　　てもらおうぞ！」

龍一「ハツ！そう簡単にいくかよ。男が女に負ける訳にやあいかねーだろ。守られんのは性に合わ　　ねえしな！」

揚羽「なんだ、いざとなったら我のところにすればよい。全力で守ってやるぞ？」

龍一「そりゃあ、ありがたい提案だ。けどま、遠慮しとくわ。好きになった女を守るのが男つても　　んだろ？」

揚羽「それは我のことか？／／／／／」

龍一「アホか。お前『ら』だよ」



揚羽・義経・弁慶 「二／＼／＼／＼／＼／＼／」

聞いていたのか、義経と弁慶も顔が赤い。あれ？今のでフラグたつた？でもまあみんなのこと好きだし、嘘は言っていない。おっと、勘違いすんなよ。友人としての『好き』じゃなく、女としての『好き』だからな。どつかのへたれイマ○ンブレイカーとは違うのですよ。ま、ここにいない清楚含めて守れるように強くなればいいか。

龍一 「おしやべりはここまです。構えろ、揚羽」

言いながら構え、少し強めに殺気を放つ。

揚羽 「ツ!?うむ、これでラストにしよう」

龍一「フツ!!」

揚羽「ハアツ!!」

掛け声と共にお互いの距離が一瞬でなくなり拳が衝突した。一瞬の拮抗の後、揚羽はすぐに左の拳をくりだした。龍一は右手でそれをつかみ、前に出ている揚羽の右足を、左足で踏み固定した後、揚羽の顎に肘打ちをくりだした。しかし揚羽は固定されていた足を強引に振りほどき、肘打ちを回避した。が、無理やり振り払ったためバランスを崩してしまう。龍一は揚羽の腹に蹴りをいれ吹き飛ばす。すぐさま揚羽のうしろに回り込み背中に右ストレートをぶち当てる。それで今回の組み手は終了した。

揚羽「むう、今回も取れなかったか。やはり強いなお前は」

龍一「いやいや揚羽も強くなってんぜ。背後に回ったときはちよつと真剣だったし」

揚羽「そうか！なに我もまだまだこれからよ！お前からは必ず一本取ってやるからな  
フハハハハハハ                      ハ!!」

龍一「おう！期待して待つてるぜ！」

そうして朝の鍛錬が終わった。ちなみに与一には鍛錬で疲れているところを弁慶と共に強襲し、俺と弁慶の合体技『プレミアム・キン○バスター（仮）』をおみまいした。ピクピク震えている与一がすげー面白かった。

S i d e   o u t

S i d e   九鬼   揚羽   〽シャワールーム〽

揚羽「今朝も一撃も当てられなかった」

少し温めのシャワーを浴びながら昔を思い出す。

龍一とはじめて会ったのは今から二年前。私の鍛錬中にヒュームが一人の少年を連れてきた。茶色の髪に整った顔立ち、しかしなによりその赤い瞳が印象的だった。深い……まるでこちらの全てを見透かすような瞳。しかし不快ではなく、その瞳はとても澄んでいた。

ヒューム「鍛錬中失礼します。揚羽様こちらは『武士道プラン』の一人。名を『黄眞龍一』と言います。ほら、挨拶をしろ」

龍一「紹介に預かりました、黄眞 龍一と申します。お目にかかり光栄です。揚羽様」

揚羽「うむ。知っているとは思うがこちらも挨拶せねばな。我が九鬼 揚羽だ。…してヒューム よ。なぜ龍一を連れてきた？」

ヒューム「はい。実は揚羽様と龍一とで、手合わせをお願いしたいのです」

揚羽「なに!?!…我の實力は知っておろう。半端な力ではケガをするぞ」

ヒューム「その点に関しては、俺が直々に計りました。」

揚羽「ならばよし。我はすぐに始めても構わんぞ」

ヒューム「わかりました。この場は俺が立ち会います。龍一すぐにいけるな?」

龍一「ああ、いつでもいいぜ」

武道場の中央に5 mほど離れて構える。

揚羽「ヒュームが認めるほどだ。全力で行くぞ！」

龍一「もちろんです。手加減なんてしたら許しませんから」

揚羽「フハハ!!言うではないか!それでこそ『漢(おとこ)』よ!」

ヒューム「それでは両者…始め!!」

---

揚羽「(あの時は一瞬で気絶させられたんだったな)」

昔を思い出し、苦笑する。それから龍一を目で追うようになった。なぜあんなにも強いのか? 試合を振り返ると、対峙したときの目には強い意志があり、それを成そうと

する心の強さも感じられた。だがそれを聞こうとは思わない。それは、龍一の強さであり、自分の強さではなく、聞いて実践しても偽りでしかないからだ。『強さ』とは人によつて千差万別。まだ自分は足を踏み入れたばかり。これ以上は…と  
 思い思考を止める。その時になっていつも気づく。

揚羽「(龍一を想うだけでこうも胸が高鳴るか。龍一よ、この代償高くつくぞ)」

赤くなった頬を誤魔化すようにシャワーを浴び、シャワールームを後にした。

S i d e o u t

S i d e 黄真 龍一

鍛錬を終え、シャワーを浴びみんなで朝食を食べた後、俺は揚羽・英雄・清楚・義経・

弁慶・与一の6人を学校に送り出した。本来12才である俺は、学校に通っているはずだが、これには理由がある。それは俺が持っている、ある能力による。

### 『完全記憶能力』

概要を簡単に説明すると

「今まで見聞きしたものを瞬時に記憶し、自身が死ぬまで忘れることなく、いつでも思い出せる」というものである。

この能力により現在の俺の知力はトップクラスの大学卒業レベルだ。そんなわけで「学校行つてもしょうがないんじゃないネ？」という事で自室で知識を詰め込んでいる。

ちなみに今いる場所は、九鬼家が所有する島で、そこに住居兼仕事場のビル、ヘリポート。そして義経達の状態のデータを取る研究施設がある。義経達が行く学校とはこの研究施設のことで、理科室のような部屋で勉強している。ここに来た当初は俺も通っていた。

義経達はリムジン、揚羽たちはヘリで学校へ向かった。

揚羽と英雄は自分達も九鬼で仕事を手伝っており、忙しい中時間を作って会いに来てくれるのだ。揚羽にいたっては、俺との勝負を楽しみにしている節がある。



そんなこんなで文学書やら哲学書やらを読み耽っていると、お腹の虫が鳴った。時計を見ると昼の12時25分を指していた。腹も鳴るわなと思いつながら、部屋を後にし食堂へ向かった。

食事を終え、部屋で紅茶を飲み、一息ついた後午後からの予定の九鬼の仕事に取り掛かる。なぜ俺が九鬼の仕事をしているのかというと、去年の五月ごろある研究チームが食堂でうんうん唸っているのを見つけ、話を聞いてみると、大容量のハードディスクを作っているようだった。大容量のハードディスクを作ることにはさほど難しくない。しかし、彼らが目指していたのは携帯電話にも使えるような薄くコンパクトなものを目指していたのだ。マッドな研究員が1cm以下のものを作りたいと言い出しそれに乗って上司に報告したため後に引けないのだ。

話してくれるかは半々だったので、今はさうとう切羽詰っているのだろうと思い、研究資料を見せてもらい、流し読みした後、こうしたらいいんじゃないか？という自分のアドバイスをすると、資料と俺を交互にみて、先ほどの落ち込みっぷりが嘘のように歓喜していた。研究チームはやや興奮気味でその場を後にした。俺も口を出した

上中途半端はいやなので、手伝いを申し出た。それから半年後に

薄さ0.5mm 大きさ5mm 容量10TB（テラバイト）というチートくさいハードディスクができあがったのだ。

それ以来技術屋や研究者方面からの仕事がやってくるようになった。

龍一「あゝこれは軍需部門に渡したほうがスムーズになるな。…宇宙に伸ばす軌道工レベーターの設計はこれでいいな。農産のほうは…お、新しく作った肥料がいい感じ。野菜も甘みが増し 　たと。んで、次はと…」

声に出しながらテキパキと机の上の資料やら報告書やらを片付けていく。

机の上の仕事は3時半過ぎに終わり、義経たちが帰って来るまで、読書書をして時間を潰し、5時過ぎに帰ってきた義経たちを迎えに行った。揚羽と英雄は、本島の極東支部に帰るようだ。

義経達と共に食事をし、弁慶の部屋で大富豪や麻雀をやり、10時を過ぎたところで

解散となった。そのとき与一に、朝ちやんと起きるように釘を刺す。

部屋に戻り、入浴後コーヒー牛乳を飲み、歯を磨いた後ベッドに入った。

龍一「(ああ、明日は休みだったな。なにすつか？あいつらに会いに行くか)」

目を閉じ明日の予定を考えながら、夢の中に堕ちて言った。

S i d e o u t

## 成長期 — 『納豆小町』との出会い—

Side 黄眞 龍一

雲ひとつない快晴の空の下、俺とヒュームはお互いを見据えて相対していた。ここは九鬼のビルから5kmほど離れたところにある縦・横10kmほどの広大な広場で、武術家の中でも『壁を越えたもの』と呼ばれる人たちは、一撃一撃が致命傷になりかねないし、拳を突き出しただけで車を吹き飛ばす衝撃波を生み出す。

そんな人外スペックを持つ俺。そして対戦相手で師であるヒュームにとってはこの程度では思い切り戦えず狭く感じるのだ。

なぜこんなことになったかというと、俺の言葉が発端だった。

回想

鍛錬の休憩中、前々から思っていたことを口にした。

龍一「なあヒューム、俺さこれから日本を含め世界中を回ってみたいんだ」

ヒューム「なんだいきなり」

龍一「驚くのはしようがなさ。初めて人に話したし。でもさ、これは前から思ってたんだ。今俺は 日本という国で暮らしている。だけど日本と一言で言っても全てがわかる訳じゃない。方々 の地方によつて主義主張も変わってくる。そのところどころでたくさんものを見て聞いて 学んでいきたいんだ。まずは日本。その後世界にでる!!」

ヒューム「なるほど。それが理由の半分か」

龍一「あり? やっぱわかつちやう?」

ヒューム「当然だ。俺を誰だと思っている。もう半分はまだ見ぬ強者、ついでに人材

の発掘。ダイ

ヤの原石探しといたところか」

龍一「正解。強者うんぬんはぶつちやけ二の次だね。いい人材は早いうちに睡付けとかないとすぐ　いなくなるからね。強者に関しては揚羽やヒュームクラスじゃないと満足できないからな　。あ、でも将来有望そうなのは引つ張ってくるよ」

ヒューム「なにが『満足できないだ』今まで一度も全力などだしたことないだろう」

龍一「まあね。いつでも万全の状態で戦えるわけじゃないし、鍛錬中肉体にリミッターをかけて試　行錯誤してたんだよ。俺の正体（オリジナル）に引つ張られたのか、いくつか技も思い出して　試したし」

ヒューム「そうか。旅の件は帝様と局様の判断を仰ぐことになる。そんな時間に時間はないからと思う　がな。それよりも『正体（オリジナル）の技』と言っていたな。面白い。死合いで見せて　みる」

龍一「いいの？俺としては願ったり叶ったりだけど」

ヒューム「たった今クラウから連絡が入った。帝様と局様はお前の旅を許可したそう  
だ。お前なら 心配いららないだろうが、まあ願掛けだ」

クラウディオ「ではその死合い、私が立ち会いましょう。よろしいですかヒューム？」

そうやって音もなく現れたのは『クラウディオ・ネエロ』九鬼家従者部隊序列三位の人物だ。俺もクラウにはよく世話になったし、今もこうして見守ってくれる。ありがたいことです。

ヒューム「わかった」

龍一「ありがとうクラウ。それから帝様と局様への連絡も」

クラウディオ「ふふ、簡単なことでございます」

龍一「じゃあ立会いよろしく」

クラウディオ「畏まりました。龍一様」

---

そういうわけで俺はヒュームと死合うことになったのだ。俺も男だ。自分の力を試したいという思いはある。

ヒューム「龍一、全力で来い！」

龍一「わかってるよ！ヒューム！」



声と同時に互いが氣を開放させる。そしてクラウディオの開始の声が上がる。

クラウディオ「それでは…はじめ!!」

声と同時にお互いの距離がなくなる。最初に攻撃を仕掛けたのはヒュームだ。ヒュームは右足で袈裟懸けに首を狙ってくる。俺はそれを左腕で受け止めすぐに腕を返し右足を掴み自分に引き寄せつつ、右膝蹴りを放つ。しかし、それはヒュームの左手に遮られる。俺は曲げていた脚を伸ばし、腹に前蹴りを喰らわそうとするが、ヒュームは膝の上に乗せていた左手に力を込め飛び上がり、左足で俺の右側頭部を狙ってきた。俺は左手に力を込め、掴んでいたヒュームの右足を上に振り上げた。そのとき、迫ってきていたヒュームの左足は俺の頭上を通過した。そして足を持ったまま体を捻り

ヒューム「ムッ!!」

龍一「ダラアツ!!」

勢いよく後ろに投げ飛ばし、追い討ちをかけるように右手から氣弾を数十発撃ち込んだ。その衝撃であたりには砂埃が俵っている。不意に後ろから氣配を感じ、無意識に屈みさつきまで頭のあつた位置をヒュームの右拳が通過する。

ヒューム「チツ!!」

龍一「つぶね!!んなろ!!」

俺は屈んだままヒュームの腹に肘打ちを三発決めた。



ヒューム「ああ、見せてみる……お前の根源を」

龍一「蒼龍氣功、光・龍・弾!!」

ヒューム「ガハッ!?!」

龍一の掛け声と共に、白く光る四つの玉が龍一を囲むように現れ、そのうちの 하나가輝き一瞬で4 mほどの青龍の姿になり、ヒュームをその身に貫いた。

ヒュームが力なく落下していくのを、クラウドディオが目に見えないくらい細かい糸で絡めとり、ゆっくりと降下させていく。

龍一「ありがとう、クラウド」

クラウドディオ「簡単なことでございます。龍一様、いかがでしたか？ヒュームの全力

は？」

龍一「ああ。やっぱスゲーわ、一瞬のキレに氣のコントロール、そして隠密。俺も見習うところは　　たくさん在った」

クラウディオ「それはなによりでございます」

龍一「戦闘中にギアが上がっていくんじや甘いと思うしね」

俺はまだまだ自分に伸びしろがあることに内心喜びながら、クラウをみた。するとクラウの後ろの方から着地したヒュームがこちらに歩いてきた。ヒュームの執事服はどこもボロボロである。

ヒューム「俺の目に狂いはなかったな。……やはりお前は俺より強い」

龍一「ありがとヒューム。けど、だからって俺は油断も慢心もしないよ？」（バシ！）

ヒュームは喋りながら拳を放ってきたので、俺はそれを難なく掴む。

ヒューム「俺に勝つたのだからもしやと思つたが……。ふ、安心した。それに簡単に負けてもらつては俺も立つ瀬がないからな。……。それであればどれくらいだ？」

龍一「最終的には5割程度かな。てかよくわかつたね？全力出してないの」

ヒューム「俺を誰だと思つている……と言いたいが、はつきり言つて『勘』だな」

龍一「勘かよ。なんですか？どこぞのマファイアの跡取りですか？まったく。ま、いつか。そんじゃあ先戻るわ」

そう言つて俺はその場を後にした。あ、みんなに旅にでること言わないとなく。まあ泣いたりほしくないよな？そんなことを考えながら九鬼のビルに向かつていった。

S i d e o u t

S i d e ヒューム・ヘルシング

奴を見送つた後、クラウの準備した新しい執事服に着替え、先ほどの死合いについて考えている時、クラウが話しかけてきた。

クラウディオ「今回はあなたも酷くやられましたね？」

ヒューム「奴ならば当然だ。この俺が認めているんだからな」

クラウドディオ「これから彼が旅に出ると聞いたたら、彼女達が寂しがりますね」

ヒューム「奴らだけでなく、揚羽様もかもしれんが……まあ大丈夫だろう。他は俺達  
が手助けすれ ばいいだろう」

クラウドディオ「そうですね。では、私はこれで」（シユーン！）

クラウドディオは音も無くその場から消え、広場にはヒュームが一人残った。

広場を見ると端の方に2〜3mほどのクレーターが十箇所以上できていた。龍一が放った気弾でできたのである。ヒュームは「これで5割りか」と呟き、これからあいつが世界中を旅して何を思い、何を得、戻って来た時どう成長しているのか？弟子の顔を思い出しニヤリと笑った後、業者に広場の整備を依頼しその場を去った。



S i d e o u t

S i d e 黄眞 龍一

俺は学校から帰って来たみんなを迎えに行き、夕食を食べ義経の部屋に集まり、くつろいでいるところに「話がある」と切り出し注目を集める。

清楚 「どんな話かな？ 龍君」

龍一 「実はしばらくの間、世界中を旅しようと思ってるんだ」

清楚・義経・弁慶・与一 「「「ええッ!?!」「」」

弁慶 「そんな！ 龍は私達を捨てて他に女をつくる気なんだな！ そんなに私達に魅力がないか!?!」

龍一「全ツツツ然違う！弁慶涙目になるな！清楚も！義！「ウワアアアアン!? 龍兄行っちゃ ヤダア〜!!」ってこっちは手遅れだった!？」

清楚「うゝ、どういふことかちゃんと言してくれろ？」

俺は三人をなだめた後、旅に出る目的を話した。世界中の国の考え方、人材発掘、おまけだがまだ見ぬ強者との出会い。

龍一「俺と清楚は中学三年の年、お前らも中学二年にあたる。これからは自分で考えて行動してか なきゃならない。要は自立だな」

弁慶「それは解るけど……やっぱり龍と離れたくない！」

義経「ひつく、よ、義経も一緒に行く」

清楚 「私も……一緒にいたいな……」

龍一 「ありがとう三人とも。こんな美少女達に想ってもらえて嬉しいよ」

弁慶 「なっ!?気づいてたのか?」

龍一 「あつたりまえだろ! 10年も一緒にいるんだ。気づかん方がおかしい。抱きついてきたり、手をつないだり、アピールがみんな露骨すぎ。な? 与一」

与一 「まあ、あんだけ見ればなく」

清楚・義経・弁慶 「      /      /      /      /      /      /      /      」

龍一 「俺もお前達のこと大好きだ。だからそんな顔すんな。『武士道プラン』が実行される時は帰ってくるから」

義経「それでも龍兄がいなくなるのはヤダ〜」

龍一「ありがとう、義経。しかし困ったな……そうだ！俺が帰って来たたらお詫び代わりに、一つお　願いを聞いてやろう！」

清楚「なんでもいいの？」

龍一「俺のできる範囲でなら」

そう言うと女三人はなにやら相談を始める。そして……

清楚「決まったよ！」

龍一「別に今決めなくても……ま、いいや。それで？」

弁慶「三人で話し合ったんだけど、龍が帰って来たら私達の……『初めて』をもらってほしいん  
だ／＼／＼／＼」

俺様フリーズ……え？ハジメテって言った？三人とも顔が赤い。あゝ、つまりこれは  
そーゆーことですね。

龍一「……俺でいいんだな？」

清楚・義経・弁慶「ココ／＼／＼」

龍一「…わかった。その時にありがたく頂こう。で、与一は？」

与一「俺は別にいいよ。普通にお菓子とかその国の土産でいい。警戒はするがな（ボ  
ソツ）」

龍一「そっか。わかった（なにを警戒するんだ？）」

弁慶「いつ出発するんだ？」

龍一「準備もあるし三日後にしようと思ってる」

義経「最初はどこに行くんだ龍兄？」

龍一「まずは国内だな。それからアジア、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカ大陸かな」

弁慶「そっか。帰って来たら驚くなよ龍。私達すつごい、いい女になってるからね」

清楚「そうだよ龍君。あんまり待たせるとすぐに蝶は飛んでつちやうんだからね。じゃあ、この話はここでお終い。次はなにしようか？」

清楚が話を打ち切り、後はいつも通りに遊んだり、くつちやべったりして過ごした。

そして荷造りに、仕事の引継ぎ等をしていたら、あつというまに三日が過ぎ俺は義経達に見送られながら旅にでた。

S i d e o u t

S i d e 葉桜 清楚

私達は想い人の旅立ちを見送った。彼を思うだけで胸が締め付けられる。いつの間にか私の中にいた愛しい人。彼にしばらくの間会えなくなるのは寂しいけど、でも約束もしたし必ず私達のところに帰って来てくれるよね。

清楚「じゃ、戻つか。義経ちゃん、弁慶ちゃんすつごく綺麗になつて龍君を驚かしちゃおう！」

義経「そうだな。義経は頑張るぞ弁慶、与一」

弁慶「主も龍にゾツコンだね。こればかりは主でも負けないよ」

義経「そうだな。こればかりはフェアにいこう」

清楚「ふふ、私だって負けないよ。一番最初は私がもらうね」

義経・弁慶「「いいや！義経・私だ！」」

清楚「むう、私だよ」

誰が一番だと言い争い始めたのを見て与一は

与一「こんなの俺に押し付けていくなよ。ハア、恨むぜ兄貴」



言い争っている女達を見ながらまた「ハア」とため息をついた。

S i d e o u t

S i d e 黄眞 龍一

俺が旅に出てから3ヶ月がたった。あれから東北、北陸と周り、俺は今関西にいる。太陽は真上に上がり、セミの鳴く音が響き夏真つ盛りである。

関西某所のメインストリートを歩いていると、甘味処があったので店に入った。餡団子とカキ氷（いちご練乳シロップ）とウーロン茶を頼み満員ぼかつたので外の席にいい席に着いた。この甘味処は外にも席がありちよつとした出店になっているのだ。注文した団子とカキ氷を食べていると「納豆く、松永納豆はいらんかね」と聞こえてきた。

声のする方に顔を向けると、おなじ年齢くらいの女の子が声を上げて納豆を売ろうとしていた。目は大きく、顔立ちもいい。髪は黒く背中の中ほどまである。うん、普通にかわいい。気になったのでウーロン茶のおかわりついでに店員さんに聞いてみることにした。

龍一「すみません。ちよつといいですか？」

女店員「はい、なんででしょう？」

龍一「あそこで納豆を売ってる女の子ですけど、いつもあんなことを？」

女店員「お客さん地元の人じゃないんですね。彼女は西では有名ですから」

龍一「はい。俺は東から来たので。しかしなぜ有名なんです？」

女店員「彼女の名前は『松永 燕』ちゃんって言うてね、自家生産している納豆を広

めるために、  
納豆ソングを歌ってCDを作って売り出したりポスターなんかも  
あったね。西じゃ『納豆  
小町』って言われてるよ」

龍一「へくそうなんですか。ありがとうございます。あ、ウーロン茶のおかわりくだ  
さい」

「畏まりました」と言つて店員さんは店の中に入っていった。彼女の方に目を向けると  
一人の男が彼女に近づいていく。何度か話した後二人は一定の距離を取り、向かい合つ  
た。どうやら男が勝負を挑んだようだ。どういふことか店員さんに聞いてみると、彼女  
は武道にも通じているらしく、たまに勝負を挑まれるらしい。周りはちよつとしたギヤ  
ラリーに包まれている。

燕「せいや！」

男「グツ!?このお！」

燕「ふふん♪あたらないよん、ちよいさ！」

男「グヌツ!?ハア!!」

俺は勝負を見物し考察しながらカキ氷を口に運んでいく。

龍一「へへ、結構やるな。全然実力だしてないし、揚羽と同じくらいか？それに動きに迷いが無い。い。拳が来たらこう、蹴りが来たらこうと事前に知ってる感じだ。こりやあ相手のこと完璧に調べつくしたね」

カキ氷を食べ終わり最後の餡団子を食べようとしたら、俺の方に彼女が吹き飛ばしたのか、男が飛んで来た。俺は気配で察知し、座ったまま右足を高々と上げ、俺に当たる直前に振り下ろし男を地面に叩きつけた。周囲も俺に当たると思っていたようで、口を

開けポカンとしている。

龍一「あむ、んまんま。ゴクリ。まったく人の至福の時間を邪魔した罪は重いぞコノヤロー」

そう言つて踏みつけている男と彼女を見た。

S i d e o u t

S i d e 松永 燕

燕「納豆！松永納豆はいかがですか！」

ん、今日も売れ行き順調順調。おとんの借金もまだあるけどこれなら十分やっていける。松永が有名になって借金も返したらおかんも帰って来るかもしれない。

納豆を売りながら周りを見ると170cmくらいの筋肉質な男が近づいてくる。

お、来たね。ふくん、彼が今日の相手ね。私は武術をしているので、噂を聞いた人がたまに勝負を挑んでくる。

男「失礼。君が松永 燕かい？」

燕「そだよん。あなたが挑戦者？」

男「そうだ。さっそくお願いしたい。場所はどようする？」

燕「この場でオツケーだよん。いつも会った場所だし」

男「了解した。……では始めよう」

道の中央に移動した後試合を開始した。そんなに多くはないがギヤラリーに包まれている。相手の戦闘スタイル、技に動き方なんかはぼつちり調べ上げた。今までそうやって勝ってきたし、やるからには負けたくないしね。それにしても情報通り。この人は対戦相手のことを調べたりしないのかな?……ま、いつか。楽ちんだし。

ふふん♪そんなの当たってあげないよ。

燕 「せいや!」

男 「グツ!?このお!」

燕 「ふふん♪あたらないよん、ちよいさ!」

男 「グヌツ!?ハア!!」

戦いは私が圧倒していた。顔の来た右ストレートを左側に傾けてかわし、相手の後頭部に左足の上段蹴りを当てふらついたところに腹に拳を入れる。しかし相手はガードし、左足で上段蹴りを放ってきたが、しゃがんで回避し、相手の左足を払いバランスを崩し、胸に前蹴りを入れた。そのおかげで少し距離が開いた。

燕「（最後は突進からの飛び蹴りで来るはず……!!来た!?)」

男「うおおおおお!!!」

想像していた通り、突進からの飛び蹴りが来た。……なんかここまで想像通りだとなんか哀れに思えちゃうよ。つといけない。集中しなきゃ。私は飛び蹴りを右に飛び回避し、相手が着地し、振り返ったところに回し蹴りを肋骨あたりに当て、足を振り抜き、吹き飛ばした。



燕「(ふうく、これでおしま……ってやば?!ぶつかる!)」

私飛ばした方向に、甘味処の外の席で男の子が団子を食べようとしているのが見えた。彼はこちらに気づいていないのか、団子を口にしようとしたところで、座ったまま右足を上げ、飛んで来た男が自分に当たる直前に、足を振り下ろし、男を地面に叩きつけた。私や周りの人もポカンとしている。

ロー「??? 「あむ、んまんま。ゴクリ。まったく人の至福の時間を邪魔した罪は重いぞコノヤロー」

そうやって踏んでいる男と私を見た。

Side out

Side 黄眞 龍一

食事の勘定をし、気絶した男を医者任せした後、松永 燕のほうに向かった。

龍一「勝負すんのはいいけど他の人に迷惑かけんなって親に言われなかったのかコノヤロー」

燕「うっ…すいませんでした」

龍一「わかればよろしい。次からはちゃんと場所を選んでやれよ」

燕「ん、了解。それより君すごいじゃん！相手を見ないであんな行動がとれるなんて。君もなんか やってるの？」

龍一「ん？まあ、武術をね。君だってなにかしらやってるんだらう？」

燕「ま、一応ね。これでも今のところ負けなしなんだよ」

龍一「へそりやすごい。ところで松永納豆を試したいんだけどいいかな？ ついでにご飯もあると　いいんだけど」

燕「ありや？もしかしてこの辺りの人じゃないの？」

龍一「ああ。東から来てここには着いたばかりでさ、松永納豆のこともさっきの甘味処で聞いたん　だ」

燕「そつか。うくん、東の方にはまだ知名度が高くないのかな？ 結構有名になったと思っただ　けどなく」

龍一「まあそれも、こうやって俺みたいに旅行者を捕まえたりすれば口こみで広がっ

たりもするか　　もね」

燕「そうだよね。着実にやってかなきゃ」

そんな会話をしながら納豆の置いてある場所に着く。においは納豆。問題は味だが…判断は食ってからだ。

龍一「納豆だけでもいいがやはりご飯がほしいな。白米はあるかい？」

燕「アピールするために納豆に合いそうなのは一通り用意してあるよん」

龍一「さつすが。商魂たくましい」

俺は白米に納豆をかけ食べてみた。

龍一「あむ、もぐもぐ。ゴクリ。：へえ、確かに今まで食べてきた納豆の中じゃ一番だな。なん　　だ？製造中に手間をかけてるとしか思えないが？」

燕「ふふん♪それは企業秘密だよん」

龍一「まあそうだよな。ところで気になったことがあるんだがいいか？」

燕「ん？何かな？今後の参考のために忌憚のない意見をお願いするよ」

龍一「いや、納豆のことじゃないんだ。聞きたいのは君のことさ」

燕「私のこと？ハッ!?これって新手のナンパ？」

龍一「いやちがうから！確かに君がかわいいのは認めざるを得ないけど！」

燕「えっ？そんな…君みたいにカツコイイひとにかわいいなんて言われると照れちゃうよ／＼」

龍一「なんか全然照れてる風にみえないんだけど？話を戻すよ。気になったのは、なぜ君が納豆ソ　　ングのCDを売り出したり、ポスターに乗るほど勢力的に活動してるのかってことさ。『松　　永　　燕』さん」

燕「なくんだ名前知ってたんだ。うくん…君ならいつか。実はね、おとんが株で失敗して大量の　　借金作っちゃってね。おかんも愛想つかして出て行っちゃってさ。それで副業の納豆生産に目　　をつけて盛大にアピール！CDやポスターはそのためって訳。軌道に乗っていい感じだからこ　　こが踏ん張りどころなんだ」

龍一「おふっ…。なかなかへビーだな。ごめん、ずうずうしく聞いて」

燕「いいよいいよ、気にしなくて。もうほとんど自虐ネタだし」

龍一「そっか…、強いんだな松永さんは」

燕「そんなことないよ。最初は私もだめかと思つたもん」

龍一「でも今まで頑張つてきたんだろ？それだつてすごいことだよ。うくん、通信販売とかはして　　ないの？これだけ美味しいならやつてもいいと思うんだけど」

燕「そうしたいけどまだいろいろとコネがね。扱ってくれる企業や、通販だつたら運送会社にもル　　ートを作らないといけないし…」

龍一「あゝ、やつぱその辺が問題になつてくるよなあ。……!! (ピン) 来た！閃いた！これで勝つ　　る！」

とつさに閃いた俺はボールペンとメモ帳を取り出しある企業の電話番号を書き出し松永さんに手渡した。

燕「ん？これはどこの番号？」

龍一「それは掛けてみればわかるよ。その時に俺の紹介だつて言えば……そういうば自己紹介して　なかつた」

燕「あ、そういえばそだね。じゃあ、あらためて私は『松永　燕』またの名を『納豆小町』私のこ　とは燕でいいよん」

龍一「俺の名前は『黄眞　龍一』15才。今は見聞を広めるため各地を旅行中だ。俺のことは好きに　呼んでいい。よろしくな燕」

燕「あ、同い年なんだ。よろしく！龍一君！」

龍一「龍一君……」

燕「あ、いやだったかな？」



龍一「いや、そんな風に呼ばれたのは初めてだからちよつと驚いただけだ。燕の呼びやすい形でいい」

燕「ありがと、龍一君」

龍一「どういたしまして。じゃあ、そろそろ行くわ。ついでといっちゃ何だが、このあたり…いや、西で有名な武道家や人材が集まる場所とか知ってるか？」

燕「ん、もう少し西に行くと『天神館』っていう学校があるよ。武道も盛んで若い世代の人材育成にも積極的だって聞いたことがある」

龍一「『天神館』か…。わかった、ありがと燕。さっき渡したメモ、一つはある企業の番号だけだよ。携帯とアドレスは俺のだからいつでも連絡していいよ。じゃ、またな燕」

燕「うん、わかった。またね、龍一君」

燕に別れをつげその場を後にした。あ、納豆買うの忘れたと思い戻ろうとしたが、そのうちまた会えるかと思ひ直し、町の喧騒にまぎれていった。

これが『納豆小町』松永 燕とのファーストコンタクトであった。

S i d e o u t

## 原作突入

### 第壹話 一帰還一

—— 3月末・香港国際空港

香港国際空港は約15km<sup>2</sup>の空港島で、年間約5000万人が利用し、ターミナルには世界各地の有名ブランド店や、レストランやカフェ、土産店など様々な店がある。

世界でも仁川国際空港、シンガポール・チャンギ国際空港に次ぐ世界3位の空港と評されるほどである。

そしてここに、一人の男性の姿がある。

髪は茶色でセミロング。整った顔立ちで身長は180cmくらい。黒のズボンに白のTシャツにファー付きの黒いジャケットを着て、背には竹刀袋を背負っている。

彼は今日本行きの便に乗るために出発を待っている。

龍一

「(…3年か。…あつという間だったな)」

彼は見聞を広めるための旅に出ている。そしてあるプランが近じか実行されるため日本に帰国するのだ。彼は携帯を取り出し、一見のメールを見る。そこには…

『武士道プランを実行する。至急戻られよ』

とあった。

龍一

「(ついに始まるか…。俺は傍観していればいいとはいえ少し複雑だな)」

彼もその計画の全貌を知る一人だが、彼が受けた命は傍観しろというものだった。これからのことに考え耽っている…

アナウンス

「まもなく日本行きの方が出発します。ご利用のお客様は搭乗ゲートまでお越しください。繰り返します、まもなく…」

という放送が流れてきた。彼は携帯をしまい、座っていた椅子から立ち上がり搭乗口に向かった。

龍一

「(考えていても仕方ない。俺はあいつらを手助けしてやればいい)」

そう考え、彼は日本行き便に乗った。∴向かうは日本。この一年は彼にとって忘れられない一年になる。

S i d e  
九鬼 揚羽

——PM13:25 日本・成田国際空港

成田国際空港は千葉県成田市の南東部三里塚地区にあり、敷地面積940ha、利用者年間役2500万人。飲食店やコンビニ、銀行窓口などがあり、日本で第二位の空港である。

揚羽

「クラウよ。龍一はまだか？」

クサウディオ

「飛行機は到着しておりますゆえ、もうまもなくかと」

揚羽

「であるか」

私は今一人の男を待っている。一度として『武』において勝利することができなかつた男。

そして我の心を奪っていった男を…

ヒューム

「揚羽様、どうやら来たようです」

その声を聞き飛行機の出口を見ると、黒い服に身を包んだ男が大きな目のバックをもつて出てきた。

気づいたのか、こつちに歩いてくる。

まったく、我が目を放した隙に勝手に世界を回りおつて…。

龍一

「ただいいま。揚羽様」

揚羽

「うむ。おかえりだ龍一。それと様付けはよせと言ったであろう」

龍一

「ま、一応最初だけ」

揚羽

「確信犯か」

龍一

「ハハ、元気そうだなによりだ揚羽。それにヒュームやクラウディオ、マープルも久しぶりだな」

ヒューム

「貴様も随分と腕を上げたな。帰ったら久々に相手をしてやろう」

龍一

「相変わらずだなヒューム。楽しみにしてるよ。マープル、義経たちの様子は？」

マープル

「みんな元気にやってるよ。あいつらを脅かすために、あんたが今日帰って来るのはあいつらには伏せてある」



龍一

「お前も人が悪いな」

マーブル

「ありがとうよ」

龍一

「ほめてないぞ」

揚羽

「立ち話もここまでにして移動するか。クラウドよ案内せい」

クラウド  
「クラウド

「畏まりました」

クラウドを先頭にターミナルの方へ向かう。我は龍一に世界のことや武闘家たちのこ

とを聞いたりした。龍一は楽しそうに話してくれた。世界で見たこと。武闘家たちのこと。この遺跡がすごかったとか、この技はこうだったとか。

私の気持ちに気づいていないのか本島に楽しそうに。

覚悟しておけよ龍一。必ず主を我に惚れさせてみせるぞ！

S i d e o u t

S i d e 黄真 龍一

俺は今空港を出て九鬼家の保有するリムジンで極東本部に向かっていて。迎えが来るのは知っていたが揚羽までいるとは……まあ嬉しいが。

揚羽にいろいろと話していたが、本題に入るためマープルに切り出した。

龍一

「マープル、プランの実行はいつだ？」

マープル

「6月の中ごろ。あんたたちは川神学園に転入させるから、それでいうと一学期の中がろさね」

龍一

「川神学園か…。確か武神といわれた川神百代がいたな」

ヒューム

「そうだ。あの赤子との試合の舞台は用意してある。まだ先だが、もし申しこんできたらそういえ」

龍一

「了解した」

マーブル

「ああそれと、あんたのことは義経達のお目付け役としての転入になるからね」

龍一

「俺もクローンだがそれを知るのは帝様と局様のみ。ならば普通の人間としてプランの要である義経達のそばに置いたほうがいい…ということか？」

マーブル

「そういうことさね。理解が早くて助かるよ」

龍一

「仕方がないか。義経たちには俺から説明しよう」

マーブル

「頼むよ。あんたのことは帝様たちしか知らない極秘プランだからね」

龍一

「そんなたいそうな話じゃないさ」

クラウディオ

「皆様、極東本部が見えてまいりました」

運転しているクラウドディオの声を聞き、俺は外の方に顔を向けた。

揚羽

「少しは懐かしいのではないか？ 龍一よ」

龍一

「ああ、何回も来てたからな。帰ってきたんだなつて実感する」

外に顔を向けながら揚羽に答えた。

義経達はどんな顔をするのか楽しみにしながら支部へと向かっていった。

S i d e o u t

S i d e 源 義経

— P M 1 5 : 1 0 九鬼財閥極東本部

義経

「フツ！セイツ！ハアツ！」

弁慶

「主へ、そのあたりにして今日はもう終わりにしよう」

そう言って弁慶はタオルとドリンクを見せてきたので義経は振るっていた刀を腰の鞘に納刀した。これで今日の鍛錬は終了だ。

弁慶からタオルを受け取り汗を拭いたあとドリンクを飲んだ。

義経

「ぶはへ、ありがとう弁慶」

弁慶

「気にしない気にしない。これも部下の務めさ」

言いながら弁慶は川神水の入ったビンとお猪口を取り出し、川神水を飲みだした。

義経

「いい加減飲みすぎだぞ、弁慶」

弁慶

「少しくらいいいじゃないか。人生の楽しみはいい酒「ギロリツ」：もとい、いい川神水  
といいつまみと少しばかりの刺激だよ」

義経

「そう言っつていつも途中で酔いつぶれるじゃないか。いつも部屋に運ぶ義経の身にも  
なっつてくれ」

弁慶

「あはは、だから感謝してるよあるじ〜」

義経

「まったくしょうがないな」

少しあきれた顔で弁慶を見た。楽しそうに川神水を飲んでい  
る。飲んでい  
る途中弁慶が

弁慶

「そういえば今日重要人物が来るとか言ってなかったっけ？」

義経

「え!? そうなのか!? 義経達も挨拶するのか!？」

弁慶

「ん、九鬼にとってだから大丈夫じゃない? すれ違ったりしたらしないといけない  
と思うけど」

義経

「そうなのか? でも挨拶するときを考えると緊張するな。弁慶、義経はちゃんとできる



だろうか？」

弁慶

「大丈夫だよ主。主ならできるとて」

義経

「そうか、ありがとう弁慶」

会話を交わした後二人は汗を流すため訓練室を出た。

部屋に向かう途中で清楚と合流し、一緒に義経の部屋に行くことになった。そして部屋の方から一人の男性が歩いてきた。

3年前に旅立ち夢にまで見た、義経の好きな人…

義経・弁慶・清楚

「「龍兄・龍・龍君!!」」

龍一

「ただいま。みんな」

S i d e o u t

S i d e 黄真 龍一

龍一

「ただいま。みんな」

いい終わった後三人がものすごい勢いで抱きついてきた。義経と清楚は少し涙ぐんで、弁慶は川神水を飲んでいたのか顔が赤い。

義経

「ウワアアン!!おかえり龍兄く!!」

龍一

「ああ、ただいま義経。元気にしてたか？」

義経

「ああ！義経も弁慶も与一も清楚先輩もみんな元気だ！」

龍一

「そうか。弁慶も今まで義経達の支えになってくれたんだな」

弁慶

「部下として当然さ。それより今日は付き合ってよ？」

そういつて弁慶は川神水を取り出す。

龍一

「相変わらずだな。いいだろう今日はとことんまで付き合っつてやる」

弁慶

「さっすがは龍。わかってる」

龍一

「ま、今日くらいはな。清楚も久しぶり」

清楚

「うん、おかえり龍君。病気とかにはなったりしてない？」

龍一

「健康そのものだ。お土産があるから部屋にもっていこう。義経の部屋でいいか？」

義経

「わかった。与一も呼んでおく」

龍一

「助かる。じゃ、またあとでな」

踵を返し部屋に向かう途中、まだあいさつをしていない人物を思い出しその人物の部

屋に向かう。

龍一

「(この時間なら大丈夫なはず)」

部屋の前に着き「コンコン」とドアをノックする。

???

「だれだ？」

龍一

「龍一です。紋様帰還のご挨拶に参りました」

紋白

「何！帰ったのか！」

ドアの向こうから「ダダダッ」と聞こえた後ドアが開き中に案内され紋白はベッドに、

俺は椅子に腰掛けた。

『九鬼 紋白』

彼女は九鬼家の三人目の子で、長女の揚羽、長男の英雄、そして次女の紋白となる。

正妻の局様の子ではなく妾との子である。

九鬼家に引き取られるさいに、認められるため自分で額に傷を入れた。

局様との中はあまり良好とはいえないが、母に認められるため頑張っている。

揚羽や英雄にはとても可愛がられていて、「目に入れても痛くもなんともないわ!」とは英雄の言葉である。

俺にとっても可愛い妹分だ。

龍一

「黄眞龍一ただいま戻りました。紋様」

紋白

「おお、ようやく帰ってきたか龍。我はとても会いたかったぞ」

龍一

「私のわがママを聞いていただいてありがとうございます」

紋白

「そう畏まらずともよい。昔のように紋と呼んでかまわないぞ」

龍一

「わかりまし…いや、わかったよ紋」

紋白

「うむ、それでよい。義経達には会ったのか？」

龍一

「ああ、さつきな。与一はまだだが。これから義経の部屋に行ってお土産を渡すんだが紋も一緒にどうだ？もちろん紋のものもあるぞ」

紋白

「それは真か!?なら私も参加させてもらおう。土産のほう期待しているぞ」

龍一

「そういわれると恐いな。まあ紋に納得してもらえるものだとは思う」

紋白

「フハハ！であるか。楽しみにさせてもらおう」

龍一

「じゃあそろそろ部屋に取りに行かないと。一緒に行くか？紋」

紋白

「うむ」

紋の部屋を出て俺の部屋にお土産を取りにいき義経の部屋に向かった。義経の部屋にはさっきの三人に加え与一がいた。



龍一

「久しぶりだな、与一」

与一

「ああ、おかえり兄貴」

龍一

「何だ？妙にそっけないな。なんかあったのか？」

与一

「一つの心理に気づいただけさ」

龍一

「一つの心理？」

与一

「ああ、人生なんて死ぬまでの暇つぶしにしかないってことさ」

俺は弁慶に目を向けた。

龍一

「(どうしてこうなった?)」

弁慶

「(ここで働いてる奴の心無い言葉でね)」

龍一

「(∴後で詳しく話せ)」

弁慶

「(了解)」

弁慶との目での会話の後、両手に持っていた紙袋を広げた。

龍一

「食い物系のお土産はみんなと食べようと思つてな。今は食うなよ、夕食が食べれなくなるからな。それでこれが個人的な土産…というよりプレゼントだな」

紙袋からプレゼント用に包装された三つの正方形の箱を取り出す。

龍一

「これは清楚・義経・弁慶のだな」

清楚

「開けてもいい?」

龍一

「ああ」

三人が包装紙を外し青い箱を開けると…

弁慶

「これは…」

義経

「ブレスレット…」

清楚

「きれい…それに内側に字が彫られてる」

箱の中身は小さなダイヤがはめ込まれた銀色のブレスレットでそれぞれ

『S. hazakura & R. oma』『Y. minamoto & R. oma』『B. m  
usashibo & R. oma』

と彫られている。

龍一

「気に入ってもらえたか？」

清楚

「ありがとう龍君!!大事にするね」

義経

「わあくホントにきれいだ!!ありがとう、義経は着けたらはずさないぞ」

弁慶

「字を彫るなんてにくい演出するじゃないか。…でも、ありがとう」

龍一

「気に入ってもらえたようだなにより。与一はこれだ」

細長い箱を与一に渡す。

与一

「こいつは…」

龍一

「どうだ？」

与一

「ああ、気に入ったぜ!!」

与一に渡したのは髑髏と十字架をあつらえた銀色のネックレス。

厨二くさかった与一に対して選んだのだが、酷くなっているとは思わなかったのだから、いいチョイスだと思う。

龍一

「最後は紋だな」

小さめの正方形の箱を渡す。

紋白

「どれ…中身は時計か」

龍一

「ああ。紋も忙しいと思うし、ヒュームやクラウがいるとはいえこういうのも持つててもいいと思ってな」

紋白

「我のためを思ってくれているのだな。感謝するぞ龍」

龍一

「これでみんなに行き渡ったかな。夕食まで時間があるし久々にみんなでゲームでもするか」

弁慶

「んじやあ龍の旅の話でも聞きながらしますか」

龍一

「ああいいぞ。最初に行ったのは……」

その後ゲームをしながら旅の話をして夕食の時間までひさびさに楽しく過ごしていた。

夕食の後弁慶が川神水を持って俺の部屋で一緒に飲んだ。

肴をいろいろ用意していたので弁慶は俺の膝の上ですぐに酔いつぶれそのまま眠ってしまっ、しばらく一人で飲んだ後、そと弁慶の頭をどかし毛布を弁慶にかけ寝顔を見ながら眠った。

こうして帰ってきてからの一日は過ぎていった。

S i d e o u t



## 第弐話 一武士道プラン

— 4月中旬・AM10:35 九鬼財閥極東本部

訓練施設では龍一と義経が刀を手に取り打ち合っている。

一般の人の目では視認することはできず、武道をするものでさえ見る事ができるのは極僅かだろう。

しかし見る事ができたのならば、その二人の美しさに目を奪われることになるだろう。

二人の『容姿』ではなくそのあまりに素晴らしく、苛烈で、流麗なその『動き』にだ。龍一が上段から刀を振り下ろせば、義経は体を左に半分反らしてかわし、刀を横一閃に振るう。

その一閃に刀をあて、上に弾き、隙だらけになった体めがけて拳を突き出す。

迫ってくる拳に右足の裏で防ぎ、そのまま後方に跳び距離をとり、着地した直後に踏み切り龍一に向かっていく。

一合

二合―

三合―

八合―

十五合―

二十四合―

三十八合―

六十四号―

百七十合―

いつまでも続くと思われた二人の闘いの舞はお互いが距離を離れたところで終了した。

S i d e    黄真    龍一

龍一

「このあたりで終わりにしよう。義経」

義経

「そうだな。はあく、それにしてもすごいな龍兄は。帰ってきてからも一太刀も当てられないなんて」

龍一

「まだまだ。俺だつて修行中の身だ。義経がそう思うなら義経も強くなれるさ」

義経

「そうか。龍兄、義経は強くなる。そして龍兄の隣に並んでみせるぞ！」

龍一

「ああ、期待している。そろそろ昼食だ。そのまえにシャワーでも浴びよう」

義経

「そうだな。汗をながさないとな」

俺たちはひとしきり話した後、シャワーを浴びるため訓練所を後にした。

同日―PM 21:18 九鬼財閥極東本部 自室

『ここが勝負、勝負の時なのだ』

今日の予定を終え、シャワーを浴び、タオルで頭を拭きながら出ると携帯の着信音が鳴り響いた。

相手は…

『松永 燕』

とあった。

燕

『やつほく。久しぶり元気にしてる〜?』

龍一

「ああ、息災だ。伝えるのを忘れていたが今はもう日本に帰ってきているんだ」

燕 『あり？ そうなんだ。早く教えてくれたらよかったのに』

龍一

「こつちも忙しくてな。そつちはどうなんだ？」

燕

『もうばつちり！ 龍一君が九鬼財閥を紹介してくれたおかげで、もろもろの諸事情がぜんぶん解決！ 納豆の売れ行きも、うなぎ上りさ！』

龍一

「そうか。それはなによりだ」

燕

『あの時はありがとう』

## 龍一

「気にするな」

燕に会ったとき、別れ際に渡したのは俺の携帯のアドレスと番号ともう一つ。九鬼財閥の電話番号。世界的に有名な九鬼財閥は普通に調べてもわかるが、今回渡したのは、ここ『極東支部』の番号。

ここなら揚羽や英雄、紋がいるし俺の名前をだせば必ず上に報告すると思ったからだ。

話を聞くと、俺と別れた後に電話。出てきたのが九鬼財閥で驚いたみたいだ。

最初は取り合ってくれなかったらしいが、俺の名前をだしたら一発だったみたいで、話を聞くと行って燕はプレゼン。納得のいく物だったのかあれよあれよという間に話は進み、通販での販売や松永納豆を市場に卸して全国への販売拡大。

人気なのでCMやポスターも今まででどうりらしい。

おかげで借金も全額返済。父親も技術面に強いこともあって九鬼に就職。今までの苦勞が報われたということだ。

燕

『いくらお礼を言ってもいい足りないよ』

龍一

「気にするな。困っている友人に手助けしたにすぎん」

燕

『友人…かあ』

龍一

「燕？」

燕

『え!?!あはは、ごめんごめんなんでもないよ』

龍一

「そうか、ならいいが…」

燕

『あはは、ちよつと考え事してただけだから。そうそう、もうすぐ君にとってビッグなイベントがあるよん』

龍一

「ビッグイベント？俺個人に？なんだそれは？」

燕

『ぬふふ、それはヒミツ。でもあと二ヶ月くらいかな』

龍一

「(二ヶ月？プランと重なるな。燕は知っているのか？…考えても仕方ないな) 気にはなるがそれは後のお楽しみにしよう」

燕

『そうそう。でもきつと喜ぶよ』



龍一

「それは楽しみだ」

その後、しばらく話したあと電話を切り、ベッドに入った。

プランまで二ヶ月か……。あ、あいつらに俺はプランの一人としては参加しないって説明しないとな。そんな考えごとをしながら瞼を閉じた。

S i d e o u t

◇

S i d e 直江 大和

— 6月7日 川神市工場地帯

夜。もうまもなく日付も変わろうという時間。

俺たち川神学園二年生たちは西にある学校『天神館』と交流試合をしている。きつかけは、数日前に川神学園学園長、川神鉄心が全校集会での発言だった。

——回想

鉄心

「西にある天神館が週末に修学旅行で川神に来るらしいのお。天神館の館長とは知り合  
いでの、学校ぐるみの決闘を申し込まれたので引き受けてぞい」

と、とんでもないことを言い出した。ざわつく生徒たちを置いて学園長は続ける。

鉄心

「これを東西交流戦と名づける。激しい戦になりそうじゃわい」

周りの生徒を置いて一人思考に耽る。

大和

「天神館といえど西では有名なバリバリの武闘派の学校……学園長の知り合いらしいしこうなるのも時間の問題か……」

「昨今、学生の強さは東高西低と言われていたらしく、それがどうにも西の武闘派たち、特に好戦的な連中は気に入らないらしく、今回旅行のついでに決闘を申し込んだ。……とのことだ。」

鉄心

「夜に川神の工場地帯で、各学年200人を出し合い大規模な集団戦となる。総大将を決め、その総大将を倒せば勝利、ルール無用の実践形式3本勝負じゃ」

「うちの連中も好戦的な奴らが多いうえに、祭り好きなので、そのイベントには大半がノリノリだった。」

「うちの身内たちも興奮を抑えられないようだ。」

キャップ

「いいねいいねー、最高に燃えるじゃねーか！」

テンションあげてはしゃいでるのは『風間 翔一』。通称キャップ。

風間ファミリーのリーダーで凄まじい豪運の持ち主。常にバンダナを頭に巻いている。

ワン子

「私も私もーうーん、腕がなるわ！」

同じくはしゃいでるのは『川神 一子』。通称ワン子。

川神にあるお寺『川神院』の娘で、赤い髪にポニーテール、性格は明るく風間ファミリーの一員だ。『川神院』は武道の総本山として有名で、ワン子も武芸者だ。

クリス

「調子に乗ってすぐやられたりするなよ、犬」

一子

「そつちこそ無様にやられたりしないでよね、クリ」

ワン子に話かけたのは『クリステイアーネ・フリードリヒ』。通称クリス、クリ。

川崎市と姉妹都市であるドイツのリューベック市から来た留学生で、金髪にストレートヘア、容姿端麗で性格も明るい。フェンシングを嗜んでおり、学園でも屈指の実力者だ。同じく風間ファミリーの一人。

京

「なんか大げさになってきたね…。そして大和愛してる」

大和

「いつものことさ。そしてお友達で」

京

「チッ、おいしい」

モロ

「あはは、いくらなんでも脈絡がなさすぎるよ」

俺にいきなり告白してきたのは『椎名 京』。通称京。

青髪のショートヘアで、性格はおとなしい…というか根暗。

小学校の時に、いじめから助けたのがきっかけでファミリーの一員になった。

椎名流弓術を習得しており『天下五弓』の一人。

京に突っ込んだのは『師岡 卓也』。通称モロ、モロロ。

色白で線が細く性格もおとなしいが、その知識量はファミリー随一で、こと情報戦では非常に頼れる存在だ。

ガクト

「ふっふっふ、ここで活躍すれば俺様にも彼女が！」

京

「ないね」

大和

「ないな」

モロ

「ないね」

ワン子

「無理じゃない？」

クリス

「無理だな」

キャップ

「頑張ればできるさ！」

ガクト

「なんだこいつら全然容赦がないぞ…」

ほぼ全員から否定されて落ち込んでいるのは『島津 岳人』。通称ガクト。

身長は190cm近くあり、体格もよく、顔もそこまで悪くないが先のような発言を普通にするので同学年の女子からは気味悪がられている。しかし面倒見はいいので後輩の女子からは避けられてはいない。何か武道をしている訳ではないが、ファミリー内は武闘派の人物が多いので回避力は高く、喧嘩も強い。

忠勝

「はあ、忙しくなりそうだな」

大和

「ゲンさんはバイト？」

忠勝

「チツ！聞いてやがったか…まあそうだ」

小さく呟いたのは『源 忠勝』通称ゲンさん、ゲン。



肌は浅黒く目つきも鋭いため不良として見られがちだが、生活は健康的。川神学園の所有する『島津寮』に住んでいる。

最後に俺『直江 大和』。通称大和。

ファミリー内では軍師と呼ばれていて、ガクトと同じ理由で回避力は高い。戦闘力は可もなく不可もなくといったところ。

あと二人いるがそれはまた後ほど。

というかさつきから誰に向かって説明してるんだ？…まあいいや。

キャツプ

「くー、ワクワクするなー！作戦は頼むぜ！軍師大和！」

大和

「ああ、まかせとけ」

——回想終了

こうして東西交流戦は開始された。

現在の戦績は1勝1敗。

初戦、まゆつちのいる一年の部は総大将をI—S『武蔵 小杉』とし、戦闘開始。総大将自ら戦陣に立つものの、相手の方が自力が上なのかすぐに囲まれて終了。初戦は天神館の勝利となった。

まゆつち本名『黛 由紀江』

ファミリー内唯一の一年生で携帯ストラップの『松風』を持つている。

本人曰く「九十九神がやどった」とのこと。

『剣聖』の娘で本人も剣術を納めており、その実力はトップクラス。

しかし内気な性格が災いしてか、友だちが少ないのが悩み。

二戦目、川神 百代率いる三年の部。

『川神 百代』通称モモ先輩、姉さん、お姉様。

川神鉄心の孫娘で、武において天賦の才を持つており、幼少の頃より武を鍛えてきた。公式戦いまだ無敗で『武神』とも呼ばれている。

ちなみに俺はあの人の舎弟で姉さんと呼んでいる。風間ファミリーの一人。

閑話休題。

三年の部では天神館側が合体技『天神合体』をくりだし巨大化するも、姉さんの川神流『星殺し』で爆散。弱っているところを三年で掃討し、二戦目は川神学園の勝利となった。

そして最終戦二年の部。

英雄

「二年の敗北をみなも見たであろう！バラバラに戦っては天神館に勝利することはできん！学び舎の名を高めるか！辱めるか！選べ、お前たち！」

九鬼英雄の演説が、生徒の心をうつ。

心

「ふむ…F組と手を組むのは甚だいかんじやが勝つには仕方がないの」

冬馬

「私たちは力と体を合わせて、西と戦いましょう」

大和

「体は合わせないからな！」

冬馬

「つれないですね」

準

「ま、昨日の敵は今日の友と言うしな」

小雪

「お祭りのはじまりだ〜！」

準

「ここらこら、スカートのまま飛び跳ねるんじゃないやありません」

小雪

「スパッツだから平気だよ〜ん（ピラツ）」

準

「そういう慎みのないことしちゃいけません」

騒いでいるのは2—Sの生徒。

『不死川 心』

名家御三家のうちの一つ『不死川家』の娘。

プライドが高く家柄で人を見下すため、周りからの評判はとても悪い。  
しかし弄ると面白い。

『葵 冬馬』

葵紋病院の跡取りで、成績優秀、容姿端麗で性格も温和。

だが、自称両刀使いである。

『井上 準』

同じく葵紋病院の跡取り（冬馬の父が院長で準の父が副院長）。

S組に所属しているだけあり成績は良い。S組は総じてプライドが高いが、付き合いやすい人物だ。

スキンヘッドで、幼女が好きだが本人曰く「手折るもんじゃねえ、愛でるもんだ」とのこと。

『榊原 小雪』

冬馬や井上と一緒にいる女の子。

フラフラしており井上を困らせているようだ。紙芝居が趣味で好物はマシユマロ。

閑話休題。

二年の主力はF組とS組。

英雄は鼓舞し終わると一子のほうに向かった。

俺と冬馬は部隊の配置や部隊の編成案を詰めるため話し合う。  
満月が見下ろす工場地帯。

戦の火蓋は今まさにきつて落とされようとしていた。

戦闘が始まって幾ばくかの時間が過ぎた。

俺と冬馬は見晴らしのいい場所から戦況を眺めている。

大和

「どうにも旗色が悪いな。自力は向こうが上か」

冬馬

「西方十勇士を各個撃破し、士気の低下を狙っていくしかありませんね」

大和

「そういう位置に配置したけどな。十勇士さえ抑えれば後はゴリ押しでいける」

冬馬

「大和君にも動いてもらいますよ?」

大和

「ああ、そういう役割だからな」

戦況を見ながらどちらともなく口を閉じた。

S i d e o u t

S i d e 川神 一子

大友

「軟弱な東の連中め! 西国武士の気骨を見よ!」

『大友 焰』の改造大筒が川神学園の生徒に狙いをつける。



大友

「大友家秘伝国崩しいいいいいい!!!」(ドゴオオオオオン!!!)

数多の弾丸が放たれ焼夷弾が夜空を紅に染め上げる。

一子

「うわあつと! すつごい広範囲! どんだけやられたんだろ? というかやりすぎじゃない」

大友

「東西交流戦とはいえあくまで戦。その程度で喚くな。体を動かさず部屋に閉じこもっていたのであろう? 軟弱者め!」

一子

「ぐぬぬ、豪快すぎる。だけど倒してみせる」

薙刀を構え大友に駆け寄る。

大友

「させるか!! 国崩しいいいい!!」

近寄せまいと大筒を放つ。

一子

「あつぶないー!」

持ち前の瞬発力で回避し、爆風に吞まれながらもダメージを最小限ですませる。  
そして大友の背後に一子を狙う男が一人：

大友

「ハッ！逃げるしか能がないのか！腰抜けめ！」

一子

「(回避して弾切れを狙うしか今のところ手がないよ)」

毛利 元親

「東の凡夫共、美しい毛利の三連矢で仕留めてやろう」

大友

「せりゃあああ!!」

毛利

「今だ!!」

一子に向かって、回避不可の矢が放たれる。

一子

「!!」

しかし、その矢は一子に当たることなく別の矢に弾かれる。

一子の遙か後方で京が矢を狙ったのだ。  
そのまま弓を引き毛利に狙いを定める。  
毛利は死角に入りやり過ごそうとするが…

京

「無駄だよ」

そのまま爆薬つきの矢を放った。

矢は毛利の横1mほどの壁に着弾、爆発。

毛利は爆風で飛ばされリタイア。

京

「椎名流弓術【爆矢】こつちも遠慮は無しで」

一子

「弓ではこちらの方が上みたいね」

大友

「勝敗は戦の常だ…しかしそれで事態が好転する訳じゃない！」

一子に向けて大筒を放つ。

大友

「二つ言っておくが私に弾切れは無い」

一子

「ガッン」

大友

「補給線を確保しておくのは戦の基本よ！」

マルギツテ

「そしてそれを潰すのも戦の基本と知りなさい。現在お嬢様が後方をかく乱中です」

大友

「しかしそれでも弾切れは無い!!こんなこともあろうかと各地に弾薬は保管済み」

マルギツテ

「しかしそれもあなたを倒してしまえば必要なくなる」

直後に大友に向かってマルギツテが疾走。

マルギツテ

「トンファーシュート!!」

大友の大筒の発射口目がけてトンファーを投擲。

大友

「なっ!!」

直後、爆発。

一子

「まだよ!!マル!!」

一子の声と共にマルギツテのいた場所が爆発する。

大友

「国…崩し…」

マルギツテ

「その状態での攻撃…そして気迫見事です」

そしてマルギツテはトンファアを構え大友に疾走。

大友が撃った大筒を避け、トンファアで腹、顔、腕など連撃をくらわせていく。

マルギツテ

「トンファーストライク!!」

大友

「ぐあああ!!」

連撃を受け大友撃沈。

一子

「いやーいいところ全部もっていかれちゃったわ」

マルギツテ

「火力の高い敵を足止めしただけでも十分です。誇りに思いなさい。私はお嬢様のもとに行きます。お前も前線に行きなさい」

一子

「望むところ!!」

二人は前線へと駆けていった。



S i d e o u t

S i d e 井上 準

俺達は敵の最前線にいる。ここで力を発揮しているのはクリスだ。

井上

「さすがクリス！軍人の娘だけあってすげー指揮だなーおい」

クリス

「お前もなかなかやるではないか」

二人で会話しているところらにに向かってくる集団がある。

尼子 晴

「尼子隊参上!!」

クリス

「くっ！もうすぐ本隊だというのに」

井上

「クリス！ここは先に行け！」

クリス

「お前……」

井上

「少しはカツコつけさせろよ」

クリス

「……分かった。借りておくぞ」

クリスを先に行かせ尼子隊と対峙する。

尼子

「なんだ？やるきか？」

井上

「一見シヨタっぽいけど俺にはわかる。ホントは女の子なんだろ」

尼子

「おれは男だー！！」

井上

「いいねーお約束だねー可愛いよ。マジ天使…それなのにこんな戦いに巻き込まれるなんて…あああんまりだあああー！！」

尼子兵

「え？なにこいつキミチワル！」

井上

「てめえらはお呼びじゃねえんだよ!! 苺竜——拳!!」

尼子兵

「理不尽だああ——!!」

井上

「幼女の絡んだ戦闘では俺の戦闘能力は3倍になる」

尼子

「じ…自慢の兵が…」

井上

「もう戦わなくていい」

いいながら近づく。

尼子

「近づくな！切り刻むぞ」

俺に向かってクローが飛んでくるが回避。

井上

「お兄たまと呼ぶがいい。さあお風呂で汚れを落とそう」

そして尼子を抱きしめる…しかし…

尼子

「うわああーきもちわるいよーー!!」

井上

「!!…この余計な感触は！お前男だったのか!!」

尼子

「さつきからそういつてるだろー!!」

井上

「お前にはがっかりだよ」

そして尼子の首筋に手刀を食らわせる。

尼子

「がっ!!」

井上

「俺はシヨタじゃねえ…そんな特殊な性癖は持たねえ!!」

尼子隊撃沈

S i d e o u t

S i d e 忍足 あずみ

あたいは九鬼家従者部隊序列1位で英雄様の従者だ。  
今、英雄様は負傷兵たちを鼓舞している。

英雄

「聞け!!負傷兵たちよ!!同胞の活躍で敵将の半分以上を討ち取り戦線は膠着している!!  
今こそ背恥辱を晴らすとき!!西にやられたままでもいいのか!!立てるものは行き、武勲を  
あげよ!!」

生徒A

「俺は行くぜ!」

生徒B

「あたしもまだ行けるわ!」

さすがは英雄様。息を吹き返した。ん?こつちに近づいて来る気配…上か!

あずみ

「鉢屋か！一人で奇襲とは西は頭がイカレてんのか？」

あたいは小太刀二刀を構え急降下してきた影を蹴り飛ばす。

鉢屋

「風魔か！騙まし討ちこそ忍びの基本。一人のほうに奇襲に向く。人数がほしければこのとうり」

鉢屋が5人に分身する。

英雄

「あずみ、さつさと片付けろよ」

あずみ

「畏まりました！英雄様!!」



あたいは鉢屋に駆け寄り一瞬で5つの影を切り伏せる…しかし…

あずみ

「手ごたえが無い。全部残像？」

鉢屋

「本体は後ろよ！もらったぞ！」

鉢屋はあずみをガツチリ掴み上空へ跳躍。

あずみ

「チツ！飯綱か！」

鉢屋

「源流を同じくする風魔と鉢屋。この技の恐ろしさは知っというよう！」

『飯綱落とし』

相手の四肢を固定し同時に跳躍。そのまま上空から叩き落とす技である。

あずみ

「不様なところは見せられないんでね!!」

あたいは歯を合わせ奥歯に仕込んだ自爆スイッチを押す。瞬間に爆発。

鉢屋

「自爆だと!しかし火力が足りないようだな!」

あずみ

「抜ける時間さえあればいいんだよ!」

鉢屋

「なに!」

あずみ

「逝つちまいなー!!」

今度はあずみが鉢屋の後ろを取りそのまま掴み地面に叩き落とす。

鉢屋

「ぬぐあ!!」

あずみ

「あの程度で離すようじゃな…詰めがあまいぜ。お騒がせしました英雄様」

英雄

「うむ、大儀であつた。その水着なかなか似合っているぞ」

あずみ

「きやるーん!あずみは幸せでございます!英雄様ー!!」

鉢屋 壱介 撃沈

S i d e o u t

S i d e 不死川 心

此方は今本陣で優雅に戦場を見ておる。そしてここに向かってくる山猿の集団がある。

宇喜多 秀美

「敵本陣に一番乗りやー!!これで報奨金アップやー!!」

英雄

「フハハ!!我の前に突撃してくるとはな」

宇喜多

「大将に一騎打ち申し込んだるわ!」

英雄

「たわけが！誰が貴様の相手なんぞするか！」

宇喜多

「だったら全員ぶちのめしたるわ！」

不死川

「ほっほ、退屈しておったところじゃ。此方が遊んでやろう」

英雄

「不死川か。好きにするがいい」

不死川

「しかしでかい的じゃのお」

宇喜多

「あんたは小さいなりやなあ。うちのハンマーでぺちゃんこや。行くでー!!」

不死川

「ほっほ、体格差があるほど有利という考えを此方が修正してやろう」

突っ込んできた宇喜多のハンマー回避し、襟を掴み体を滑り込ませ一本背負い。

宇喜多

「だあ!!」

そのまま宇喜多は気絶した。

不死川

「柔よく剛を制す。柔術の基本じゃ。敵将不死川が討ち取ったー!!」

英雄

「ああいった手合いは投げに弱い…相性がよかったな」

あずみ

「運も実力のうちですね」

不死川

「素直に褒めることができんのかおぬしらはー!!」

宇喜多 秀美 撃沈

S i d e o u t

S i d e 葵 冬馬

私と大和君は見晴らしのいい場所で戦場を見下ろしている。  
そして背後に誰かが現れた。

冬馬

「…まさかいきなり後ろからは」

長宗我部

「ぬははは！海を泳いで回り込んでやったわ！」

冬馬

「備えをしていてよかったです」

長宗我部

「ほお、思ったより敵が多いな。オイルレスリングを見せてやる」

長宗我部はオイルの入った壺を取り出しオイルを浴びる。

冬馬

「オイルレスラーがいるという情報は間違っていないませんでしたね。これも役にたちそうです」



私はライターに火をつけ相手に投げる。火が当たり勢いよく燃え上がる。

長宗我部

「ぬぐああああ!!ノリ悪すぎだろ!!」

しかし燃えながらもこちらに向かってくる。

冬馬

「さすがにしぶといですね」

小雪

「人間て燃えると綺麗だねー」

冬馬

「ユキ海側に落としてくださいね」

小雪

「はいはい。いっくよー！」

ユキは長宗我部に向かって走り出す。相手が掴もうとしたのを回避し、真上に蹴り上げる。ユキも跳躍し顔面を蹴り海に叩き落とす。

小雪

「たっだいまー！」

冬馬

「ありがとうユキ（なでなで）」

小雪

「わっはーいもつとー♪」

大和

「容赦ないな燃やすなんて」

冬馬

「オイルまみれで絡む男二人…見たいですか？」

大和

「ごめんなさい」

そのとき大和君の携帯が鳴った。

大和

「電話?もしもし?」

クリス

『大和か?敵の本陣なんだが大将がいないんだ』

大和

「状況不利と見て隠れたかな。了解そのあたりで暴れてて」

クリス

『了解した(プツ)』

大和

「さて、そろそろ俺も動くかな。今回あんまり役に立ててないし」

冬馬

「そこまで気負うことはないですよ」

大和

「みんな頑張ってるんだ。俺も頑張らないと。じゃあ行って来る」

そう言って大和君は走り去っていった。

やはり彼はいい。いつか肌を重ねたいものです。

このとき大和にゾワツとした悪寒がはしたとかなんとか。

S i d e o u t

S i d e 直江 大和

なんだったんださっきの悪寒は？

そんな考えは思考の隅に追いやり、おそらく敵の大将が隠れているだろう場所に向かつている。本陣の位置から考えてたぶん…いた！犬笛を吹きつつ走り寄る。

石田 三郎

「この場所が分かるのは、ずるく保身に長けているやつだろう。俺はほかにもいろいろ備えてはいるが」

大和

「ずるく保身に長けているね…耳が痛いね。けどま、おかげで見つけられたし結果オーライかな」

島 右近

「なこー！」

石田

「ほう、ここがわかるとはな。名をなんという？」

大和

「直江 大和。下見に来たときに隠れるならここかなって」

石田

「そうか、しかし一人で来るとはな。阿呆だな」

島

「それがしは十勇士が一人島 右近！覚悟！」

大和

「おいOBじゃないのか！」

島

「それがしは同い年だ」

大和

「それは失礼した」

そのとき一人の乱入者が現れた。

一子

「おーっと！あんたの相手はあたしよ！」

ワン子だ！ワン子は犬笛で呼ぶと吹いた人のもとに駆けつけるのだ。

島

「ぬっ！援軍か！」

大和

「さあ大将一対一だ！」

俺は拳を構える。

石田

「その構えは……つてド素人じゃないか!!」

大和

「やっぱばれるか」

石田

「まあいい、西方十勇士が大将！石田 三郎！参る！」

石田は刀を構え走りだそうとしたところに一本の矢があたる。

石田

「ぬぐー！弓兵だと！」



京

「愛しの大和は私が守る」

大和

「ごめん人数間違えちゃった」

いいながら石田を蹴る。

石田

「がっ！……ここまで虚仮にされるとはな……見せてやる【光龍覚醒】!!」

石田が光をまといあたりが照らされる。光が収束すると、金髪になりすさまじい威圧を放っていた。

大和

「なにそれ！どこのスーパーサ○ヤ人!!」

石田

「俺に奥義を出させるとはな…寿命が短くなるデメリットはあるがこの状態で俺に勝てるのは川神百代くらいだ!!」

刹那京の矢が石田に向かう。

石田

「同じ手を食らうか!!」

その矢をなんなく刀で弾く。

京

「まずいすごく強くなってる!」

大和

「(くそ!計算外だ!避けれるか!)」

——刹那何かがこちらに近づいて来る。

その人物は工場の壁を垂直に駆け下りていた。

石田

「!?なにやつ!!」

義経

「源 義経! 推参!」

義経と名乗った少女は勢いそのままに、すさまじい速さで石田に接近し一刀のもとに切り伏せた。

石田

「ぐっ!...がは!...その名前。俺や島のように武士の血を引くものか!」

義経

「ちがう。義経は武士道プランにより生まれたもの...受け継ぐのではなくそのものだ」

石田

「…？しかし理不尽なまでの強さ…」

言つて石田は気絶した。

大和

「(さうとう強かつたはずだ…それを瞬殺かよ)」

義経

「怪我はないか？」

大和

「ああ…大丈夫だ」

義経

「そうか。よかった。義経は同じ学び舎の友として助太刀した」

大和

「そうか、ありがとう。でも君の事知らないんだけど？」

義経

「無理もない義経は「そこまで」：龍兄！」

龍一

「まったく今日は見学だけだって話だっただろ？」

義経

「うっ…倒されると思ったらつい…義経は反省する」

龍一

「いいさ。怒っているわけではないが釘は刺しとかないな。弁慶には謝っておけよ」

義経

「うん、分かった。龍兄はどうしてここに？」

龍一

「…義経、ここからどうやって帰るんだ？」

義経

「それは…」

龍一

「それは？」

義経

「……わ」

龍一

「わ？」

義経

「……わからない」

龍一

「…だろうな。だからお目付け役の俺が迎えに来たんだ」

義経

「そうだったのか…ごめん龍兄、迷惑かけて」

龍一

「気にするな。可愛い妹分を守るのは兄の役目だからな」

義経

「カワツ／＼／＼」

後から来た男がこちらに顔を向ける。

龍一

「すまないな会話の邪魔をしてしまった」

大和

「いえ、かまいませんけどあなたたちは？」

龍一

「すまないが詳しいことは今は言えないんだ。…そうだな、明日の朝テレビを見れば分かる。とだけ言っておこう」

大和

「テレビ…ですか？」

龍一

「ああ。じゃあそろそろ行くよ。そっちの彼女も終わりそうだしな」

大和



「え？」

ワン子のほうを見ると川神流の技で島を倒すところだった。

一子

「川神流【水穿ち】!!」

島

「ぬ!!ぶはああ!!」

ワン子の技が決まり島は気絶した。

大和

「やったなワン子!!」

一子

「そつちも総大将を倒したし大和勝ち鬨をあげましょ」

大和

「そうだな…あなた達もどうです?」

しかし、後ろを見ても誰もいなかった。

一子

「?!どうしたの?」

大和

「いや、なんでもない。それより勝ち鬨だ!!」

一子

「ええ!!敵将全て討ち取った!!」

大和

「勝ち鬨をあげろーーー!!」

川神学園二年生

「「えいえいおーーー!!! えいえいおーーー!!!」」

大和

「なあ九鬼英雄？男女の二人組みが乱入してきたんだが…武士道プランとかいつてたっけ、なんか知らないか？」

英雄

「ほう、随分早い投入だな」

大和

「だから武士道プランて何だよ？」

英雄

「明日のテレビをみるのがてっとり早いしばし待て」

大和

「…しかたないか」

——こうして東西交流戦は川神学園の勝利で終わった。

s i d e o u t

# 第参話 一編入一

— 6月8日 AM 7:30 島津寮

S i d e 直江 大和

東西交流戦も終わり昨日の疲れを残しながらも、ニュースを見ながらみんなで朝食をとっていた。

大和

「しかし武士道プランね〜」

忠勝

「新聞も一面だ」

由紀江

「どこの局でもその話題で持ちきりですよ」

キャップ

「随分と熱いプランだよなー。退屈しないにもほどがあるぜ！」  
大和

「川神学園に来るらしいからね」

クリス

「それでは共に学べるな」

京

「みんなそろそろ時間」

大和

「んじゃ行くか」

俺たちは寮を出て学園に向かった。

—登校中

寮のみんなと登校。

途中合流したガクトとモロと姉さんもいる。

由紀江

「ガクトさん、なにをしているんですか？」

ガクト

「モテル香水をつけてんだ。なんでも異性をクラクラにさせるらしい」

京

「相変わらずぶれないね、ガクトは」

クリス

「…だが正直好きではない匂いだ」

百代

「〜♪」

大和

「姉さんは機嫌いいね」

百代

「まあな！」

モロ

「格好のバトル相手が来たからね」

百代

「ああ！今から楽しみだ！」

大和

「はあ…どうなることやら」

—川神学園

朝のSHRは全校集会となった。

鉄心

「みなも今朝の騒ぎで知っているじゃろう、武士道プラン。この学園に7人転入生が入ることになったぞい」

ザワツ

小笠原 千花

「プランって3人じゃなかった？」

鉄心

「武士道プランについては新聞などの説明を見ることが。重要なのは友人が増えること。仲良くな。競い相手としても最高じゃ、何せ英雄じゃからのう」

マルギツテ



「確かに先人から学ぶとあつては究極のもの…それは自身のレベルアップになる」

鉄心

「プランの申し子は4人、3名は関係者じや。まずは3—Sに2人入るぞい」

百代

「なんだSクラスか、私たちのクラスには来ないのか」

京極 彦一

「ほう、私のクラスか」

鉄心

「それでは葉桜 清楚挨拶せい」

鉄心の声とともに、一人の女性が前に出た。そしてゆっくりと壇上に上がっていく。その立ち振る舞いはとても綺麗で見ているものを魅了した。

清楚

「こんにちは。はじめまして。葉桜 清楚です。みなさんとお会いするのを楽しみにしていました、これからよろしくお願いします」

挨拶が終わると歓声が沸き起こった。…特に男子から。

ガクト

「やっべー、名前からして清楚すぎるんですけどー！」

モロ

「文学少女って感じだね。いい感じ！」

ヨンパチ

スーパレア

「宴にグッズ出したら間違いなくSR」

百代

「なんだよかわいいのにSクラスとか…Fに来てくれー」

ヨンパチ

「質問があるんですけど！」

鉄心

「なんじゃ、全校生徒の前で…言うてみい」

大和

「(学長はプランの申し子は4人と言った…おそらく彼女が4人目…誰のクローンなん

だ?)」

ヨンパチ

「ぜひ3サイズと彼氏の有無を!!」

小島 梅

「この俗物が!みんな私の教え子がすまん」

そういつて梅先生は鞭を構え:

梅

「粛清!!」

ヨンパチ

「アオウウウ!」

鉄心

「アホかい:まあ、3サイズは気になるが」

清楚

「えっ? / / /」

百代

「おいジジイ死ね」

清楚

「…コホン、みなさんのご想像にお任せします」

百代

「可愛いー!!」

冬馬

「ああいう恥じらいは素敵ですね」

井上

「やれやれ、若もはしゃいでいることで…」

小雪

「テンション低いねー」

井上

「三年つてさ、言うたら女として腐ってるじゃん。女は小学生までだよ、変な意味じゃなく。それ以上はなんていうか…ささようならだよね」

小雪

「腐ってるのは準の頭だよー♪この不毛地帯」

井上

「ひどいわ!」

ルー・イー

「総代、真面目にやってください」

鉄心

「おお、すまんすまん。ついこのう。葉桜 清楚という英雄の名を聞いたことが無いじゃろう」

大和

「確かに聞いたことが無いな」

一子

「あつ、いないのね。正直ビクビクだったわ」

大和

「実はいます…常識だぞ。知らないのかワン子」

一子

「ひいっ」

京

「サドい冗談だよ」

一子

「よかったあ、お仕置きされるかと思っただわ」

清楚

「これについては私から説明します。実は私は他の三人とは違って誰のクローンか知れられていないんです。葉桜清楚という名前はイメージから付けた名です」

キャップ

「そうなのか。自分が誰だかわからねーのか」

清楚

「25歳になったら教えてもらえるそうです。それまでは学問に打ち込みなさいと言われてます」

冬馬

「それで英雄、誰のクローンなんです？」

英雄

「我が友冬馬よ、清楚に関しては我も知らされてはおらんのだ」

井上

「お？人類の宝である九鬼英雄が知らなくていいのか？」

英雄

「フハハ、知らずとも葉桜清楚は葉桜清楚。それだけで十分よ」

井上

「そいつあごもつとも」

クリス

「しかし存在感のある人物だな、この人数のなかでもよく声が通る」

大和

「正体が謎だから報道されなかったのか……」

鉄心

「みなテンションが上がってきたようじゃな、続いて同じく3—Sに入る黄眞 龍一  
じゃ。挨拶せい」

また一人壇上が上がっていく。その人物の立ち振る舞いはただ歩いているだけなのに優雅で、どこか気品を漂わせるものだった。

龍一

「ご紹介に預かりました、黄眞 龍一です。私はここにいる清楚、そして後に紹介されるプランのメンバーをサポートするため九鬼財閥より派遣され、この学園に編入しました。みなさんと共にこの学園で学べることを誇りに思います。どうぞよろしくお願

します」

そう言つて彼は一礼した。すると…

川神学園生徒

「キャアアアアアア!!」

歓声。それはもう、ものすごい女子からの。

一年生A

「カッコイイ!!」

二年生B

「この学校に来てよかった!!」

三年C

「Sクラスでよかった!!」

冬馬

「おやおや、ものすごい歓声ですね」



井上

「だなあ……しかし龍さんサプライズってこのことだったのか」

小雪

「あつ龍兄だく♪やったね、トーマ、準」

冬馬

「ええ。私もうれしいですよユキ」

英雄

「む？なんだ冬馬よ、知っていたのか？」

冬馬

「ええ、子供の頃ユキのことでお世話になりました。それから今まで連絡を取っていたのですよ」

英雄

「そうであつたか。これからもよろしく頼むぞ」

冬馬

「もちろんです」

大和

「すごい歓声だな」

ガクト

「イケメンは死ね!!」

モロ

「ガクト目から血涙流すのはよしなよ。みんな引いてるから」

大和

「まあ確かにかっこいいな。ん？どうしたんだ京？」

京

「…大和、彼恐らくだけでもものすごく強いよ」

クリス

「…ああ、正直勝てるイメージがまったく湧かない」

一子

「…そうね、お姉様クラスでようやくまともな勝負になるレベルね」

大和

「なっ!!マジか!!…姉さんクラスってどんだけだよ」

百代

「……………」

矢場 弓子

「……よ……もよ……百代！」

百代

「っ！」

弓子

「百代、どうしたで候？」

百代

「……いやなんでもない（……隠してはいるがあいつは強い。歩き方に加え体の芯がまったくぶれていない。……恐らく私と同等）」

鉄心

「（モモのやつ気づきおったか……わしでもギリギリ察知できるかどうかというもの。恐らくモモの戦闘の勘が察知しおったか……）それでは二年に入る3人を紹介じゃ、全員が2―Sとなる。まず、源 義経 武蔵坊 弁慶両方女性じゃ」

ガクト

「うげえ、マジで弁慶女バージョンかよ」

ヨンパチ

「誰が得すんだよ。ノーサンキューもいいところだろ」

鉄心

「では両者登場」

一人は交流戦で見た顔。もう一人は…

弁慶

「どうも、弁慶らしいです。…よろしく」

ガクト

「結婚してくれー！！」

ヨンパチ

「死に様を知ったときから愛してましたー！！」

大和

「おいおい」

千花

「あんたらサイテー」

羽黒

「しっかし清楚に続き今度はお色気、マジ死にてえ系」

千花

「ホントにね、自信なくしちゃうよ」

義経

「…コホン」

龍一

「義経落ち着いて行け」

清楚

「心配しなくても大丈夫だよ」

弁慶

「ん、主はやればできる」

義経

「よし！義経は源 義経だ。性別は気にしないでくれ。武士道プランに携わるものとして恥じることのない振る舞いをしていこうと思う。よろしく頼む」

男子生徒

「うおおおー！！こちらこそよろしくだぜ！！」

男子の怒号が大地を揺らした。

義経

「挨拶できたぞ龍兄！」

龍一

「…義経、まだマイク入ってる」

義経

「はわっ！」

龍一

「そんなに緊張するな」

義経

「うっ、反省する」

鉄心

「女子諸君次は武士道プラン唯一の男子じゃ。那須 与一でませい」

大和

「与一といえ、京おそらく弓使いだぞ」

京

「女性じゃないならキャラ被りもあり」

しかし待てども一向に現れない。

忠勝

「ああん？来ねえじゃねえか」

甘粕 真与

「与一さーん怖がらなくていいんですよー」

井上

「優しいんだよな、委員長」

あずみ

「いちいち反応すんなや」

義経

「あわわ…与一は何をしているんだ」

龍一

「失礼。申し訳ありませんが与一を連れてまいりますので少々お待ちいただけますか？」

宇佐美 巨人

「しょうがないな。学長こう言ってますし行かせては？」

鉄心

「んむ。許可する」

龍一

「ありがとうございます（シユン）」

壇上にいた龍一はその場から消えた。

大和

「（っ!!消えた!!京が言ってたのは嘘じゃなさそうだな）」

S i d e o u t

S i d e 黄真 龍一

学園長に許可を貰い俺はすぐさま屋上に跳んだ。与一の気配は掴んでいたからだ。



与一

「ハッ！くだらねえ。人間は死ぬまで一人なんだよ」

龍一

「なにをしている」

与一の背後から話しかける。

与一

「っ!!…兄貴」

龍一

「なにをしていると聞いている」

与一

「…こんなの無駄だろ。卒業するまでの馴れ合いなんて俺はごめんだね」

龍一

「…その馴れ合いの中にこそ大切なものがあると俺は思う」

与一

「なんだよそれは？」

龍一

「その前に確認だ。…与一俺とお前の付き合いは馴れ合いか？」

与一

「そんなんじやねえ!!」

龍一

「…そうだな。俺もお前のことは大切に思ってる。大事な弟分だ。…与一お前のことは弁慶から聞いた」

与一

「!!」

龍一

「心無い言葉でお前が傷ついた。…そのときに傍にいてやれなくてすまなかつたな」

与一

「兄貴のせいじゃねえよ!あれはあいつらが…」

龍一

「そうだな。だがそのせいでお前は怯えてる」

与一

「…俺が怯えてる?」

龍一

「そう。…怖いんだろ？自分が確かにここにいるのに『自分がいていいのか』『否定されるんじゃないか』といったような」

与一

「……………」

龍一

「そして自分を精神的に守るためにニヒルを気取り他者を拒絶する。…与一そんな有象無象は捨て置け。お前を否定するやつらは俺が…俺達が潰してやる。悲しいときは一緒に泣いてやる。嬉しい時は一緒に喜んでやる」

与一

「…兄貴」

龍一

「お前の後ろには常に俺達がいる。だが、一步踏み出すかはお前しだいだ。踏み出したなら全力で支えてやる…だから安心しろ」

与一

「…兄貴言つてて恥ずかしくないか？」

龍一

「お前の…お前達のためなら喜んでクサイ台詞を言うさ。で、どうする？」  
与一

「…行くよ」

龍一

「分かった。安心しろ俺がいる」

与一

「ああ！」

俺は与一を連れ壇上に跳んだ。

龍一

「お待たせしました。ほら与一挨拶」

与一

「…ああ。那須 与一だ。よろしく」

まだぎこちなさがあるが今はこれでいいだろう。これから硬さを抜いていけばいい。一人感慨にふけっていると弁慶が視線を送ってきた。

弁慶

「(どうやって連れ出したの?)」

龍一

「(与一がああの件以来他者を拒絶しニヒルに振舞ってきたのは自分を守るためだ)」

弁慶

「……………」

龍一

「(だから少し安心させてやったのさ。お前には俺が…俺達がいるってさ)」

弁慶

「(…言ってて恥ずかしくない?)」

龍一

「(それで与一が昔みたいになるなら安いものさ)」

弁慶

「(…ありがと)」

龍一

「(いや、与一も含めお前達には笑顔でいてほしいからな。ただの自己満足さ)」

弁慶

「それでもさ、ありがと」

「俺は苦笑しながら視線を外した。弁慶も安心したのか川神水を飲み始めた。つておい。

弁慶

「はー、問題が解決した後の川神水は格別だね」

義経

「こころ弁慶！」

クリス

「ひょうたんは気になっていたが弁慶が酒飲んでるぞー！」

龍一

「まったく、我慢できないのか？」

弁慶

「申し訳ない。でも一回見せれば回りも納得するでしょ？」

龍一

「ま、確かに。あー勘違いしないでほしい。これは酒ではなく川神水だ」

クリス

「なんだそうか。つてそれで飲んでいいわけじゃないぞー!」

弁慶

「いやー、私はとある病気で飲んでいないと手が震えるんです」

クリス

「なんだそれなら仕方ないな」

モロ

「ちよつと!それつてアルむぐ!」

ガクト

「空気よめモロ!いいんだよ美人は飲んでても」

武蔵 小杉

「でも特別待遇過ぎます」

鉄心

「それについては成績が4位以下なら退学でかまわんと念書を貰つておる。4位以下ならサヨナラじゃ」

不死川

「3位以内じゃと？Sクラスで随分となめたことしてくれるのう」

マルギツテ

「まったくです。引きずり落としてあげます」

井上

「確かに弁慶に勝ったって響きはカッコイイよな」

宇佐美

「(おつ、さつそく競争に火がついたか。後は仲良くしてくれば万々歳だ。頼むからおじさんの仕事増やささないでくれよ…)」

義経

「不快感を与えたかもしれないが義経は仲良くやっていきたい。よろしく頼む」

義経は深々と頭を下げ、弁慶はシユタツと手を上げ、与一は適当にお辞儀した。

鉄心

「さて次はプランの関係者じゃ。両名とも1—Sクラスじゃ」

さて紋の登場か。俺も準備しますか。さりげなく氣を高め、あるモノを召喚する。そ



れを紋のもとへ向かわせる。もちろん周りには見えないように。

確認のため川神鉄心と川神百代をちらりと見るが気づいたのは学園長だけで百代は気づいていない。学園長は俺を見て目を見開いている。

龍一

「さすがは武神。あれに気づくか…しかしその孫娘のほうは気づかなかった。これは期待するほどではなさそうだ」

鉄心

「(あやつとんでもないモノを呼び出しおった!!…モモは気づいておらぬ。こやつ何者じゃ?)」

学園長が何か考え始めたが恐らく俺が何者かということだろう。正体を教える気はないがここは少し安心させてあげよう。

龍一

「大丈夫ですよ。ただのパフォーマンスです」

と、学園長だけに聞こえるように話しかけた。

鉄心

「!…:本当じゃろうな?」

龍一

「もちろんです。ここであなたやあなたの孫娘さんと闘うつもりはありません。それに孫娘さんの方は九鬼がきちんとした場を提供するそうです」

鉄心

「そうか…:しかしのう、おぬし何者じゃ?」

龍一

「フフ…:私は4人のサポート役ですよ」

鉄心

「…:はあ、まったく大騒ぎになるぞい」

龍一

「大丈夫ですよ。九鬼のすることです。『ああ、またか』みたいな感じになりますよ」

鉄心

「そうだといいがのう」

龍一

「言い訳も考えてあります。あんまり悩むと早死にしますよ?」

鉄心

「おおきなお世話じゃい」

龍一

「それはそれは」

学園長から視線を外しそろそろやってくる人物を思い浮かべる。

由紀江

「!お友達をゲットするチャンスですな松風!」

松風

「おっしやー!寂しい心をハンティングするぜー!」

小杉

「私のクラスね。使えそうなら部下にしようつと」

キャップ

「ん?なんか礼儀正しそうなのがでてきたぞ」

冬馬

「あれは…有名なウィー〇交響楽団。なぜここに？」

彼らは準備ができると演奏を始めた。

京

「これって登場BGM？」

一子

「ううっ…なんだか嫌な予感がするわ」

そして一人の生徒が上空を見て叫ぶ。

生徒D

「おい！空からなんか来るぞ！」

そして校庭にいる人全員が上空を見上げる。そこには…

百代

「なっ！…龍だと！」

そう…そこには空を滑空する一匹の龍の姿があつた。

全長は5 mはあり、鱗は黄金に輝き、目は赤く鋭い爪に牙。まさに想像上の龍の姿がそこにはあつた。全員が固まる中誰かが気づいた。

生徒E

「おい！あれ人が乗ってるぞ！」

龍の頭の上には男女二組の姿があつた。龍はこちらにゆっくりと近づき校庭に降りてきた。そして龍に乗っていた二人の人物が壇上に下りた。龍は二人を下ろすと俺に念話で話しかけてきた。

黄龍

「(役目は果たした。我は戻るぞ)」

龍一

「ああ。ありがとう、美麗」

美麗

「(なに、主の頼みだ。無下にはせんよ)」

そういうと美麗は上空に舞い、ひときは強い光を放つとその場から消え去った。

そして壇上では…

紋白

「我、顕現である！」

英雄

「フハハ、何を隠そう私の妹である！」

不死川

「わかつとるわー！それ以外になにがあると云うんじや！というか龍はスルーか！」

マルギツテ

「九鬼が二人…カオスすぎる」

井上

「見た瞬間に心が震えた！…圧倒的カリスマ！」

不死川

「まあお主はそうじゃろうな」

井上

「自分が恋に落ちる瞬間を認識してしまった」

不死川

「とういか龍はスルーなのか？」

井上

「まあ九鬼のすることだし？ 気にしても仕方なくね？」

そんな彼らの疑問をよそに壇上の人物は自己紹介を始めた。

紋白

「私の名は九鬼 紋白。紋様と呼ぶがいい。我は飛び級することになった。武士道プ  
ランの受け皿である川神学園を進学先に選んだのだ。そのほうが護衛も分散せんし  
な。つと先の龍の説明をせねばな。細かい説明は省くがあれは単なる映像だ。我は退  
屈を良しとせぬ。共にこの学び舎で楽しく過ごそうではないか！フハハハー！！」

大和田 伊予

「すっごい強烈な人が来たね」

由紀江

「寂しいという概念が存在するのでしょうか？」

松風

「というか会話が成立するのか怪しいんだぜ」

百代

「おいジジイもう一人はどこだ？」

鉄心

「さっきから紋ちゃんの隣にいるじやろう」

百代

「やっぱりそんなオチか」

紋白

「そうだな。ヒュームよ挨拶せい」

ヒューム

「新しくI—S組に入るヒューム・ヘルシングです。みなさんよろしく」

百代

「そんなふけた学生はいない」



鉄心

「ヒュームは特別枠じゃ。紋ちゃんの護衛じゃな」

百代

「あの人がヒューム・ヘルシングか…」

弓子

「強いで候？」

百代

「強いなんてもんじゃないぞ。九鬼家従者部隊零番だ。だが想像しているよりは強くは…お年かな」

そのときその会話を聞いていたヒュームは百代の後ろを取るため移動した。速すぎるため壇上から消えたように見えただろう。

龍一

「(お？ヒュームが百代のところに行った。俺も少し挨拶に行くか)」

そう考えた俺はヒュームの後ろを取った。ヒュームのところでは、ヒュームが百代に話

しかけていた。

ヒューム

ストライカー

「ふむ、打撃屋としての筋力が足りないぞ…川神百代」

百代

「なっ!?!いつの間に後ろに!?!」

ヒューム

「ふん、大体わかった。お前もまだまだ赤子よ」

龍一

「そういつてやるなヒューム」

ヒューム

「…ふん、お前か」

百代

「(私が気づかなかつただと!?!しかもヒュームさんの後ろまでとつて!?!)」

おお、なにやら驚いているな。しかし彼女が川神百代か…近くで見ても正直思ってい

るほどではなさそうだ。

ヒューム

「なにやら驚いているがこいつは俺より強いぞ」

百代

「なに!?!」

龍一

「よせヒューム。まだその時じゃない」

ヒューム

「…そうだったな。戻るぞ」

龍一

「ああ」

俺達はすぐに壇上に戻った。

弓子

「…消えた?」

百代

「何者なんだあいつは：フフ、ゾクゾクするじゃないか」

壇上にはクラウドディオがいた。

クラウドディオ

「私は九鬼家従者部隊序列3番、クラウドディオ・ネエロと申します。少し補足させていただけます。私ども九鬼家従者部隊は紋様の護衛と武士道プラン成功のためちよくちよく学園に立ち寄りますがどうか仲良くしていただきたい」

英雄

「さすが紋。堂々としたものではないか」

クラウドディオの補足説明が終わりこの場は解散となった。

これからいつもとは違う一日が始まる。

さてこれからどうなるやら。

S i d e o u t

第肆話 —編入初日—

— 3 — S

S i d e 黄眞 龍一

3—Sの教室では拍手喝采が起こっていた。  
原因はもちろん俺達……というか、清楚を見るクラスの男達のものだ。  
女子の方は何やらこちらを見て呆けている。

龍一

「(……ここまで個性が強い学園はそうないだろう)」

と、素直な感想を胸中で呟いた。  
隣では清楚が改めて挨拶をしている。

清楚

「改めまして、葉桜 清楚です。短い間ですがよろしくお願いします」

ぺこりと一礼して微笑む。その様にクラスは…

3—S生徒A

「いやあ、受験で身も心もボロボロなときに清涼剤だ」

3—S生徒B

「この学園の子は我が強いのが多いから清楚な君は大歓迎だよ」

3—S生徒C

「文学少女バンザイ！」

周りが騒がしくなる中、着物に身を包んだ一人の男が声をかける。

京極

「京極 彦一だ。君の生い立ちが朝礼で聞いた。正体は誰であろうと君は君…私達は気にしない。気にしすぎて自意識過剰にならないことだ」

清楚

「はい。そこは理解しています」

京極

「そうか。これからよろしく頼む」

清楚

「(イ)ち(イ)そ」

清楚は無事に自己紹介を終えクラスも歓迎しているようだ。この分なら案外早くに馴染んでいくだろう。

さて、次は俺の番か。

龍一

「こちららも改めて、黄眞 龍一だ。話し方が変わっているがこちらら素だ。よろしく頼む」

ぺこりと一礼。

3—S 女生徒 A

「かつこいいなあ」

3—S 女生徒 B

「新たなイケメン…これって逆ハーレム!？」

3—S 女生徒 C

「今度一緒に写真撮ってもらおう！」

俺の方も受け入れて貰えた様だ。

当面の問題は『武神』川神百代に対しての対応だな。朝礼の時ヒュームの後ろを取ったせいか、かろうじて氣は抑えていたが好戦的な目をこちらに向けていた。

龍一

「(まあ九鬼が機会を用意すると言っているしそれをあてにさせてもらうか)」

そこで思考を中断し、担任に言われた窓側の一番後ろの席へと向かう。

清楚は右隣だ。

担任の連絡事項を聞きながらHRは過ぎていった。





——放課後

本日の授業も終わり俺は清楚に声をかけた。

龍一

「清楚、俺は義経たちの様子を見てくるがどうする?」

清楚

「あ、私も行くよ。その後でみんなで帰ろう」

龍一

「そうするか。と、その前に一年のクラスに寄りたいたんだが構わないか?」

清楚

「うん、いいよ」

龍一

「じゃあ行くか」

俺と清楚は席を立ち、教室を後にした。

なぜ一年のクラスに行くかというところ、朝礼のときに見知った顔を見かけたからだ。

龍一

「(会うのは二年ぶりか……)」

考え事をしながら歩いていると、周りからの視線がこちらに集中していた。

「何で一年の階に？」とか「かつこいい」とか「清楚先輩可愛い」などだ。

まあ、このくらいはある程度予想していたので聞き流す。

しかし清楚は若干機嫌悪く俺に話しかけてきた。

清楚

「モテるね？ 龍君」

龍一

「……なんだ？ 妬きもちか？」

清楚

「そんなんじゃないよ……」

やれやれ。清楚は案外独占欲が強いからな。今はモノ珍しいのとミーハーなものが半々、といったところだろう。

しかしこのままでも不味いのでフォローしておくか。

龍一

「安心しろ清楚」

清楚

「え？」

龍一

「お前達のほうが、俺はいい」

清楚

／／／

清楚は頬を赤くした。これで一先ず大丈夫だろう。フォローというより誤魔化した感じが強い気がするが……

そうこうしているうちにI—Cへと着いた。俺は生徒の一人に声をかけ、目的の人物

を呼び出してもらう。

龍一

「ちよつといいか？」

1—C 女生徒

「え？」

龍一

「ここに黛 由紀江という人はいるか？いたら呼んでほしいんだが」

1—C 女生徒

「は、はい／＼／＼」

女生徒は顔を赤くしながら由紀江を呼びにいった。

向かう先を見ると由紀江がこちらに気づいた。

俺は「よう」と手を上げながら声をかけ、由紀江は小走りで駆け寄って来た。

龍一

「久しぶりだな、由紀江」

由紀江

「は、はい！お久しぶりです！龍一さん！」

龍一

「……その様子だとあれから変わりにないみたいだな。いろんな意味で」

由紀江

「あうう」

松風

「元気を出すんだまゆっち！まゆっちにはオラがついてるぜ！」

龍一

「松風も相変わらずだな」

松風

「オツス龍さん！まゆっちあるところにオラありだぜ」

龍一

「そうだったな」

俺は松風の言葉にクスリと笑う。二年ぶりに会う彼女は、以前会ったときのようにオドオドしていた。しかし硬さはとれていて、自然な感じだ。これを自然と言っているの

かは微妙なところだが……

清楚

「龍君そろそろ紹介してくれない？」

龍一

「ん？ああ、そうだな。由紀江、知っているとは思いますが彼女は葉桜 清楚だ。そして清楚、彼女は黛 由紀江。俺が旅をしていたときに出会った子だ。最後に喋ってる携帯ストリップが松風。由紀江曰く九十九神が宿ったらしい」

清楚

「葉桜 清楚です。よろしくね、由紀江ちゃん、松風」

由紀江

「は、はい！よろしくお願いします！」

そういつて由紀江は笑った。……いや、本人は笑ってるつもりなんだろう。しかしその顔はクワツといった効果音が似合いそうな迫力のあるもので、初見の人は十分引くレベルだ。

清楚

「ひっ！」

龍一

「……由紀江。その癖まだ直ってなかったのか？」

由紀江

「うう……やっぱり怖いですか？」

龍一

「ああ。まだまだ練習が必要だな」

松風

「おうふ……オラをちゃんと認識してくれるなんて……オラ今目から変な汗が出てきた」

龍一

「はあ……清楚、彼女は少し内気だな。松風というイレギュラーがいるが根は優しい子だ」

清楚

「あはは、ちよつとびつくりしたけどもう大丈夫だよ」

由紀江

「すみません、お見苦しいところを……」

清楚

「ふふ、大丈夫って言ったでしょ？仲良くしようね」

松風

「よっしゃー！まゆつちここで友達宣言だ！」

由紀江

「こら松風図々しいですよ」

清楚

「友達？それならもう私達は友達でしょ？」

由紀江

「へ？」

清楚

「違うの？」

由紀江

「いえいえいえいえ！すつごく嬉しいです！」

松風

「いえーい！まゆつち、友達ゲットだぜ！」

由紀江

「はい松風！今夜は宴ですね！」



由紀江は今にも飛び出しそうな勢いで喜んでゐる。やっぱり清楚を連れて来て正解だったな。こういう相手の本質を見る清楚なら、由紀江の友人になつてくれるのでは？と思つたからだ。こういうのは自分で何とかするものだが、まあ今回くらいはいいだろう。

由紀江

「そういえば龍一さん達はどうしてこちらに？」

龍一

「義経達の様子を見に行くんだがその前に由紀江に会つておこうと思つてな。友人にくらい会つてもいいだろう？」

由紀江

「そうでしたか」

龍一

「せっかくだし由紀江もどうだ？」

由紀江

「え？ いいんですか？」

龍一

「ああ。というか元々誘うつもりだったしな」

由紀江

「……では失礼ながら」

龍一

「じゃあ行くか」

俺達は1—Cを後にし、2—Sへと向かう。俺の後ろでは清楚と由紀江が話している。

「龍君はそつちにいた時はどうだった？」とか「葉桜先輩はどんな本を読みますか？」とか話題が尽きることはなさそうだ。

しかし清楚……なぜ俺のことばかり聞く？ いや、気にしたら負けだろう。俺はそれを頭の隅に追いやった。そして2—Sに到着。

2—Sの前は過去の偉人を一目見ようと、人でごった返していた。

龍一

「すごい人だな」

清楚

「私のことは分からないからね。義経ちゃん達は有名だし」

龍一

「それはそうだが…仕方ない、行くか」

俺は清楚と由紀江の手を引き前へと進む。教室の入り口にはマルギツテがいた。

龍一

「久しいな『獵犬』」

マルギツテ

「そうですね『霸王』」

龍一

「清楚、由紀江先に行っててくれ。俺は少し彼女と話してから行く。問題ないな？マルギツテ」

マルギツテ

「ふむ、彼女達なら問題ないでしょう。通行を許可します」

マルギツテは体で塞いでいた教室の入り口から移動し、道を譲る。

清楚

「…じゃあ先に行くね？」

由紀江

「お先に失礼します」

龍一

「ああ、すぐに行く」

先に二人に教室に入らせ、俺はマルギツテのほうを向く。

龍一

「相変わらず元気そうだな」

マルギツテ

「体調管理は万全です。体が資本ですから」

龍一

「そうだな、お前はそういう奴だったな」

ここで少し俺とマルギツテのことを話そう。

マルギツテと出会ったのは去年の夏。国内を回り終え、海外に出て十二カ国目のイスラエルでの紛争地帯での出会いだった。

マルギツテはドイツ軍に所属しており、イスラエルでのテロ組織の鎮圧に派遣された狩猟部隊の隊長だった。

なぜ俺がイスラエルにいたかという、これは完全に偶然で紛争地帯にいたのも理由はあるが偶然だ。

現地の人に近づかないほうがいいと言われたが、俺は人の殺し合いというのを知る——言い方は悪いが——いい機会だと思ひ紛争遅滞に足を運んだ。

そこではイスラエルの政府軍とテロ組織が戦っており、銃声の響く中荒れた大地の上にはすでに事切れている人。片足のないもの。片腕のないもの。爆死したのか、肉片や大量の血がそこらじゅうに広がっていた。

その日の戦闘はいったん両軍が引き終了した。俺は胸糞悪さを感じながら街の宿にもどろうと気持ちの整理をしていると何やら路地が騒がしいので、気になったので向かうと、数人の男が女性に暴行しようとしているのを発見し、それを助けたところに騒ぎを聞きつけたドイツ軍が駆けつけ、事情説明として軍に連れて行かれた。

ここで初めてマルギツテに会うことになる。事情聴取が終わった後にマルギツテとの戦闘や俺のことについてなど、いろいろあったが、その後半年近く行動を共にしたという訳だ。

閑話休題。

龍一

「中将はどうだ？相変わらずの親馬鹿か？」

マルギツテ

「そういう言い方はやめなさい。それにお嬢様はドイツの至宝。それに我が子を可愛がるのは当然です」

龍一

「まったく、甘やかしすぎだろう……それそうとマルギツテ、お前いい奴は見つけたのか？」

マルギツテ

「話が一気に離れましたね……答えはNOです」

龍一

「まあ、お前の目に適うのは相当な男だろう。惚れられる男は得だな」

マルギツテ

「今のところあなた以上の男はいません……いや、今後現れるとは思いません／＼」

龍一

「頬を染めるな。けどまあ……ありがとう」

マルギツテと共に行動していたとき、なにやら惚れられていたみたいだった。それに気づいたのはドイツを出るときにマルギツテにキスされたときだ。……おかしい。いつフラグを立てた？

龍一

「ま、積もる話もあるが今はこれぐらいにしよう。入っても？」

マルギツテ

「……ええ、あなたの役割は朝礼で聞きました」

そう言うのとマルギツテは道を譲り、俺はマルギツテの横を通り過ぎようとしたが、ふとイタズラ心が芽生え小声でマルギツテに言う。

龍一

「(今度デートでもしよう)」

マルギツテ

「なっ!?! / / /」

驚愕するマルギツテをよそに教室に入る。

そこには義経達を囲み英雄や冬馬達、そして由紀江の姿があつた。

英雄

「む? 来たか龍一よ」

龍一

「ああ。どうだ義経達は?」

あずみ

「はい。最初は緊張していましたが今ではすっかり慣れたようです」

龍一

「そうか。それは何よりだ。ありがとう、あずみさん」



あずみ

「いえいえ、英雄様の従者として当然です」

英雄

「フハハ！あずみよ褒めて使わす」

あずみ

「ありがとうございます！！英雄様ー！！」

英雄達と話していると義経達がこちらに気づいた。

義経

「あつ！龍兄！」

弁慶

「お、清楚先輩から聞いてたけどちよつと遅いんじゃない？」

与一

「はあ、しんどい」

弁慶がぶつくさ言っているが、それを無視して近づく。

龍一

「様子を見に来たんだが無用な心配だったみたいだな」

義経

「ああ。義経達のこと受け入れてくれたし義経は嬉しい」

そう言った義経は満面の笑顔だ。

俺は義経の頭をゆっくりと撫でた。

義経

「あ／／／」

龍一

「ん。まだまだこれからだ。あんまり気を張りすぎるなよ」

義経

「……ん。わかった／／／」

龍一

「弁慶はどうだ？」

弁慶

「ん、特に問題なくし（ゴクゴク）」

弁慶は川神水を飲みながら答えた。

龍一

「学園の許可も貰ってるし、飲むなどは言わないが授業中は飲むなよ」

弁慶

「その辺は心得てるよ」

龍一

「はあ……まったく」

ため息をついて、俺は与一の方へ顔を向ける。

龍一

「与一は大丈夫か？」

与一

「まあ、なんとかな。しかし視線がウザイ。客寄せパンダになった気分だ」  
龍一

「なにせ偉人のクローンだからな。そんなに心配しなくてもそのうち収まるさ」  
与一  
「それまでこの状況かよ……だりい」

心底嫌そうに与一は肩を落とした。

小雪

「やつほー！僕のヒーローー！」

いいながら突っ込んできたのはユキだ。それを受け止めユキは顔をあげる。

龍一

「こらユキ、そんな勢いで突っ込んだら危ないだろ？」

小雪

「大丈夫だよ♪ちやくんとリユウ兄が受け止めてくれると思っただしく♪」

龍一  
「やれやれ」

邪気のない笑顔に苦笑をこぼす。

冬馬

「お久しぶりですな龍一さん」

龍一

「冬馬か。元気だったか？」

冬馬

「医者の子供が病気になつては笑いものですからね」

龍一

「そんなことはないと思うが……まあ元気そうだなによりだ」

さて、冬馬がいるということは準の奴もいると思うがどこだ？

井上

「龍さん久しぶりだな」

龍一

「……………冬馬、誰だこいつは？」

冬馬

「準ですよ？」

井上

「若？なんで疑問系？」

龍一

「やっぱりか……………準、どうしたんだその頭？その年で毛根が全滅したか？」

井上

「ちつがーう!!これはユキにやられたんスよ」

龍一

「まさか…ユキに手を出そうと…」

井上

「ちがうって。唐突に俺の頭を剃りだしたんだよ。ま、それ以来さっぱりして気に入ってんだけど」

龍一

「それなら仕方ないな。俺にもユキの行動は読めんからな」

小雪

「ん？？何の話？？」

龍一

「ん？なにユキは可愛いなって話だよ」

俺はユキの頭を撫でた。ユキは気持ちよさそうに目を細めている。

小雪

「ん？？」

冬馬

「ユキはべつたりですね」

井上

「仕方ないんじゃないやね？龍さんに久しぶりに会ったっていうのもあるし、よく懐いてたしな」

そこに教室の入り口からこちらに向かってくる集団があった。

S i d e o u t

S i d e 直江 大和

俺達は2―Sに向かっていった。メンバーは俺、キャップ、ワン子、ガクト、モロ、京、クリスだ。なにせ偉人のクローン。おちかづきになっておいて損はないからな。少し打算的な考えをしながら歩いていった。

一子

「義経たちはいるかしら？」

マルギツテ

「検問だ。ここは通れないと知りなさい」

ガクト

「揉める気はないぜ。挨拶して仲良くなりてーんだ」

マルギツテ

「お前達のような野次馬が多くて煩わしい事この上ない早々に立ち去りなさい」



大和

「なるほど、マルギツテさんは番犬代わりか」

クリス

「マルさん、ガクトの言う通り挨拶に来ただけなんだ」

マルギツテ

「お嬢様も来ていらつしやいましたか」

クリス

「マルさん、通してくれ」

マルギツテ

「……（彼なら何が起こつても対処できるだろう）わかりました。お通りください」

大和

「お役目ご苦労さまです」

俺達は2—Sに入った。

ワン子

「あ、いたわ」

クリス

「ああ、隙がないな」

ワン子

「ええ、間近でみるとすごく強いわ」

ワン子とクリスは武芸者としての力量が気になるんだろう。

キャツプ

「お？まゆつちもいるじゃないか」

モロ

「珍しいね。まゆつちがいるなんて」

確かに。今頃は大和田さんと一緒に帰ってると思っただが……  
すると義経達が気づいたようだ。

義経

「あっ」

大和

「やあ源さん。交流戦ではどうも」

義経はこちらに駆け寄って来る。

義経

「わざわざ挨拶に来てくれたのか、ありがとう。龍兄、清楚先輩、弁慶、与一達も来てくれ」

龍一

「ああ」

清楚

「いいよ」

弁慶

「は〜い」

与一

「かつたりいからヤダ」

弁慶

「主の命に背くな」

与一

「いだだだだだ!!姉御耳を引つ張るな!!」

与一は弁慶に引きずられて来た。

義経

「源 義経だ。改めて、よろしくお願いする」

クリス

「クリステイアーネ・フリードリヒだ。クリスでいい。よろしく頼む」

あつちは握手していた。学友として、また強敵（とも）として。

大和

「直江 大和。よろしく弁慶さん」

京

「大和の妻椎名 京」

モロ

「おおっと、京が積極的！」

京

「すくすく成長してるの。身も心も（弁慶は大和と話が合いそう…要注意なんだ！）」

龍一

「黄眞 龍一だ。交流戦以来だな大和、と言うより君の事は前から知っていたんだが」

大和

「え？なんでですか？」

龍一

「君の両親とロンドンで知り合ってたね。景清さん達がテロに巻き込まれたのを助けてから、しばらく護衛として雇われていたんだ」

大和

「そうなんですか!?!…親父の奴そんなこと一言も言っただけなのに」

龍一

「子供を心配させるような連絡をあの二人がするはずないだろう」

大和

「そう言われればそうですね」

龍一

「しかし君は咲さん似だな。考え方は景清さん譲りみたいだが」

大和

「親を知っている人にはよく言われます」

龍一

「ふむ、気分を悪くしたならすまなかつたな」

大和

「いえ、気にしてませんよ」

龍一先輩は「助かる」と言って苦笑した。うわっ、なんだかその仕草だけで無駄にかっこいいな、と思ってしまう俺は悪くない。

他の面々も自己紹介は終わったようだ。与一だけは終始だるそうにしていたが：

その時――

百代

「よーしつねーちゃん。たったかおー♪」

と、姉さんが入ってきた。

一子

「あ、お姉様」

百代

「お、妹に愉快的な仲間達も一緒か」

龍一・弁慶

「はあ……やっぱり来たか」

二人は盛大にため息をついた。心底面倒だと言わんばかりに。

クラウディオ

「この場は私にお任せください」

どこからともなく執事が現れた。

弁慶

「…クラウ爺いつの間後ろに」

龍一

「なんだ気づいてなかったのか？」

弁慶

「…龍教えてくれてもいいんじゃないか？」

龍一

「気づいてるんだと思っていたんだがな……まあ、クラウなら仕方あるまい」

二人の会話の横ではクラウディオさんが姉さんの説得を行っている。

クラウディオ

「武神は義経様達に勝負を挑みたいとお見受けしました」

百代

「もうワクワクしすぎて先生に注意されたくらいですよ」

クラウディオ

「しかし今はお断りします」

百代

「そうですか…って引つ込むような性分じゃないんですよ。戦わせてくださいよ。ウズ



ウズしてゐるんです」

クラウディオ

「もちろん戦いから逃げている訳ではございません。悩みがありまして、学園外からの挑戦者達です。なにせ相手はあの源義経。外部からの挑戦者もかなりの数になるでしょう」

百代

「人気者ですからね。外の人間にまで気を回しては、キリがないのはわかりますが……」

クラウディオ

「そこでこういうシステムをとります。義経様達と戦いたいものは武神と一戦し、武神に認められた者のみが、義経様達と勝負することができます。お力を貸していただけますか?」

百代

「それはいい、OKです! 戦いに不自由なさそうだ。でも義経ちゃん達ともきちんとたたかいたいなー」

クラウディオ

「もちろんでございます。きちんと舞台は用意しますゆえ、ご安心ください」

一子

「えーっと、つまり学園の人たちは勝負を挑んでいいのね？」

百代

「おーなんだワン子やるきか？」

一子

「うん！またとない機会だしね」

クリス

「それでは自分もぜひお願いしたいな！」

弁慶

「すでに申し込んでる人がいるので順番待ちだけどね」

一子

「あはは…みんな考えることは一緒ね。待つわ待つわ」

クリス

「それまでは腕を磨いておくか」

百代

「さて、義経ちゃん達はだめですけど、そのサポート役の彼ならいいですよね？」

姉さんの視線は龍一先輩を捕らえていた。

自然と俺達の間もそちらに向く。

先輩はため息をついていた。予想が的中した。そんな感じのため息だった。

S i d e o u t

S i d e 黄真 龍一

はあ……やっぱりこうなったか。予想していた事とはいえ、正直これからのことを考えると頭を抱えたくなる。

しかしどうするか……

龍一

「(ヒューム達には断れと言われているが、百代の目を見るに目の前に極上の獲物がある……みたいな感じだ。ここは一つさらに甘味を与えモチベーションを上げて次までの繋ぎにしておこう。我慢できるかは微妙だが……)」

龍一

「ああ、いいだろう」

クラウディオ

「龍一様！」

百代

「おお！そうか！戦ってくれるか！「ただし」……？」

龍一

「今回は手合わせだ。俺の本来の役割は彼女達のサポートだ。仕事に支障が出ては困る。真剣勝負をするつもりはないからその辺りは理解してくれ」

百代

「ん〜まあ仕方ないか。いいぞそれで」

あきらかに肩を落とす百代に俺は…

龍一

「ああ、安心しろ。真剣勝負の舞台は義経達と同様九鬼家が用意するそうだ」

すると、一目で分かるほど機嫌がよくなる。

百代

「そうかそうか！では早速グラウンドに行こう！」

龍一

「クラウ、学園長に連絡は？」

クラウディオ

「すでに手配済みです」

龍一

「さすがだな——それとすまないなクラウ。お前達に断れと言われていたのに」

クラウディオ

「構いませんよ。龍一様もお考えがあつてのことでしょう。ならば私共はそれを支えるだけでございます」

龍一

「そうか。すまな……いや、ありがとうクラウ」

クラウディオ

「では、参りましょうか」

龍一

「ああ」

俺達はグラウンドに移動を始めた。  
さて、武神はどれほどやら——

S i d e o u t

t o b e c o n t i n u e d

次回 「手合わせ」

## 第五話 一手合わせー

——グラウンド

S i d e 黄眞 龍一

俺達はグラウンドに移動した。ここにいるメンバーは、俺・義経・弁慶・与一・清楚・英雄・あずみ・冬馬・準・小雪・百代・大和・翔一・一子・ガクト・モロ・京・クリス・由紀江・マルギツテ・鉄心・ルー先生・クラウディオに、どこから聞きつけたのかヒューム・紋そして見物人の外野達といった感じだ。

紋はヒュームを連れこちらに向かって来た。ヒュームはじつと俺を睨みつけている。

紋白

「フハハ！龍よ、編入初日に武神と手合わせとはなかなかやるではないか！」

龍一

「あのままだとしつこく言われそうだったからな。早々に手合わせという形に持ってい

けば……まあ、この後もしつこく誘われるだろうが『適度に手合わせする』という落としどころまで持っていけるからな」

紋白

「なるほどのう。龍もいろいろ大変だな」

龍一

「ありがとう紋。ほら、俺のことはいいから英雄のここに行きな」

紋白

「うむ、ではそうさせてもらおうとしよう」

紋白は足早に英雄のところに向かっていった。残ったのはヒューム・ヘルシング。護衛はクラウに任せるようだ。

ヒューム

「……どういふつもりだ？」

龍一

「理由は二つある。——俺の役目は義経達のサポート。ここで百代と戦って義経達に集まっている注目を学園内だけでも俺に向けようと思ったまでだ。編入初日にもかかわ



「ならず、勝負を挑まれてるからな」

ヒューム

「二つ目だろうか？お前の目的は」

龍一

「そう、これはただの情報収集だ」

ヒューム

「ならば俺は何も言わん。格の違いを見せてやれ」

龍一

「これはただの手合わせだヒューム」

ヒュームの発言にツツコミを入れながら、俺はグラウンドの中央へと進んだ。

S i d e o u t

S i d e 川神 百代

私は今最高に機嫌がいい。話題になっている武士道プランの義経達とは戦えなかつ

だが、代わりにそのすぐ傍にいる人物と戦える。名前を黄眞 龍一。朝礼で私の後ろを取ったヒュームさんのさらに後ろを取った男だ。

ヒュームさんの言葉が頭をよぎる――

ヒューム

「こいつは俺より強いぞ」

あのヒュームさんをして言わせる人物。体が早く早くと攻め立てる。

大和

「姉さん大丈夫？体が震えてるけど」

百代

「なくにただの武者奮いさ。気にするな」

大和

「それならいいけど」

一子

「大和、これは手合わせなんだからそんなに心配しなくても大丈夫よ。いざとなったら

お爺ちゃんやルー師範代が止めてくれるし」

大和

「まあ、そうなんだけどね」

キャツプ

「でもよくだれぐらい強いんだろうな？ 龍先輩は」

京

「普通にモモ先輩とやりあえると思うよ」

クリス

「マルさんは何かしらないか？」

マルギツテ

「……龍一は一時期私の隊の狩猟部隊と共に行動していた時期があります」

クリス

「なっ?! 初耳だぞそれは」

マルギツテ

「なにぶん民間人の協力者という形でしたから。もちろん中将には包み隠さず報告していますか」

百代

「それで？お前が認める奴なんだ。自分でも勝負してみたんだろ？」  
マルギツテ

「確かに勝負はしましたが……」

クリス

「マルさん？」

マルギツテ

「いえ……なんでもありません。結果から言うと、私の負けでした」

クリス

「そうか。マルさんでもだめだったのか」

百代

「ふふふ……そうかそうか。俄然やる気が出てきた！」

モロ

「うわあ……もうこれ絶対途中で止まらないよね」

大和

「大丈夫だろう………たぶん」

モロ

「間が長いよ！全然安心できない！」

大和

「そういえば、まゆっちは前から知ってたんだよな？龍一先輩のこと」

由紀江

「は、はい。国内を回っている最中に北陸に足を運ばれてその時にお友達になりました」

松風

「まゆっちのファーストフレンドだぜ！」

キャップ

「くうく羨ましいぜ、俺も早く旅に出たいぜ！」

ガクト

「キャップは気づいたらいなくなってるだろうが」

由紀江

「そ、それですね、龍一さんは自分の鍛錬が終わった後は街に出たり私の家にある書物を呼んでいたりしていました」

一子

「なんかホントに『これぞ旅！』って感じね」

由紀江

「私も一緒に街に遊びに行ったり、模擬戦したりといろいろお世話になりましたから」

百代

「まゆまゆ手合わせしたのか。その時はどうだったんだ？」

由紀江

「私も負けました。当時は今よりも弱かったとはいえ圧倒的でした。……それから二年、龍一さんがどれくらい強くなっているのか正直想像もつきません」

百代

「くくく……ああ、早く戦りたいな」

モロ

「ヤバイよ……なんか火に油どころかガソリンと二ト口放り込んだよ」

大和

「混ぜるな！危険！」

キャップ

「いや……もう手遅れだな」

ああ、早く早く。私の渴きを満たしてくれ！

黄真 龍一!!

S i d e o u t

S i d e 葵 冬馬

私達は英雄とその妹である紋白さんといいます。準はなにやら震えていますね。それはそうと英雄に話を聞いてみますか。

冬馬

「英雄あなたはこの手合わせどう見ます?」

英雄

「ふむ、これは勝負ではない。手合わせだ。ゆえに龍一もそこそこのところでやめるであらうな」

冬馬

「では、仮に真剣勝負だった場合勝つのはどちらだと思えますか?」

英雄

「フハハ!それこそ愚問よ!勝つのは龍一だ!なにせあやつは姉上が現役を引退するま

で一度も勝てなかった相手だからな！」

紋白

「うむ。私も龍が負けるところなど想像できん」

井上

「紋様の意見に同意!!」

小雪

「龍兄が負けるわけないよ☆だって僕のヒーローだもん！」

冬馬

「ふふ、そうですね。私達のヒーローですからね」

グラウンドには龍一さんとモモ先輩の二人が立っていた。

S i d e o u t

S i d e 葉桜 清楚

龍君も大変だよ。私達のサポートに百代ちゃんの相手までしないとイケないんだ



し。

百代ちゃんのことは聞いていた。私達が学園に行けば、十中八九勝負を吹っかけてくることは用意に想像できた。

義経

「なあ弁慶、龍兄は大丈夫だろうか？」

弁慶

「ん〜大丈夫だと思うよ。手合わせなんだし、ほどほどのところでやめると思う」

与一

「兄貴もたいへんだよなあ、初日にこんなことになるなんて」

清楚

「仕方ないよ。私達はいやでも注目されるし」

弁慶

「けど主はよく見ていた方がいいと思うよ？いずれモモ先輩と戦うことになるんだし」

義経

「そうだな、龍兄なら大丈夫だよな。そうと決まれば百代先輩の動きをよく見ておかないとな」

そう言うと義経ちゃんは集中し、これから始まる戦いを見逃さないようにしている。弁慶ちゃんも変わらなずに川神水を飲んでるし、与一君は適当な感じでグラウンドを見ている。

一人を除き、緊張感のなさに思わず苦笑した。

S i d e o u t

S i d e 川神 鉄心

モモの奴めさつそくこれかい。ただでさえ義経ちゃん達のことでもピリピリしとるとこのに…

しかしまあ今回は多めにみてやるかのう。

黄眞 龍一

こやつは得たいが知れんからのう。全校集会の龍といい、ちようどいい機会じゃわ

い。

鉄心

「ルーよ、どう見る？」

ルー

「今は氣を抑えているので一般人程度ですが、恐らく百代と同等ぐらいし力……」

鉄心

「ふむ、ルーよわしの意見はちと違う」

ルー

「では？」

鉄心

「恐らくわしと同等か……それ以上じゃ」

ルー

「まさか!?!」

鉄心

「わしでもあやつの底は把握しきれとらん。何しろ氣の遮断が絶妙すぎるからのう」

ルー

「では、彼は何のためニ？」

鉄心

「ただの情報収集じゃろう。聞くで見るとでは全然違うからのう」

グラウンドを見ればモモと龍一が立っていた。

では始めるとするか。

鉄心

「両者ともに準備はよいか？」

百代

「ああ！」

龍一

「こちらも構わない」

鉄心

「うむ、では時間は15分。それでは…はじめい！」

S i d e o u t

S i d e 黄真 龍一

鉄心

「はづめいー！」

学園長の声に反応し、百代は【縮地】でこちらに突っ込んでくる。

【縮地】

故事や伝記で、仙人や道士が使用したとされる特殊能力の一つで、短時間で長い距離を移動する術である。現在における縮地とは、瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角に入り込む、武術における移動技術の一つである。名前は故事に由来する。

百代がこちらに向かって来るなか俺は棒立ちのままだった。

龍一

「（まずは一撃もらって威力の確認だな……しかし遅いな）」

百代は【縮地】でこちらに向かっているのだが、いかんせん遅く感じる。周りからすればものすごい速さで、消えたように見えるだろうが……そんなことを考えていると、百代が腕を振りかぶっていた。

龍一

「（ようやくやくか……やはり拳の速さも力も思っていた程ではないな）」

実際はコンクリートが碎けるほどの速さと力なわけだが、彼が最後に全力を出した——と言っても5割ほどだが——のは旅に出る前のヒュームとの一戦であり、それからの三年で自分がどれだけ強くなったのかは比べる対象がないので本人は分かかっておらず「前よりは多少強くなっただろう」程度の感覚しかない。

閑話休題。

俺は百代の拳を顔面に受け勢いよく吹っ飛んだ。

龍一

「やはりこの程度の威力……正直期待はずれだ。これなら上海で出会った『霞 拳一郎』の方が強い」

そのまま校舎の壁に激突した。

S i d e o u t

S i d e 川神 百代

私は正直がっかりした。回避どころか防御もせず……と言うか反応すらできずに私の拳をくらい校舎に激突した。

あれをくらってはもう立つこともできないだろう。吹っ飛んだとき地面で何回かバウンドしたため土煙が舞い、本人の確認はできないがその必要もないだろう。

百代

「(ああ……またダメだったか)」

そう内心呟いて、みんなのところに行こうと背を向け、歩き出したところに後ろから声が届いた。

龍一

「どこへ行く？まだ始まったばかりだぞ？」

振り向けばそこにはさつきと同じ場所に傷一つ、服の汚れすらなく立っている龍一の姿があった。

百代

「ははは！なんだ随分と期待を持たせてくれるじゃないか！」

龍一

「そうか……では期待に応えるでしょう」

そういつて奴は人差し指をクイッククイツと手招きのように折り曲げた。

その行動にカチンときた。なめられている。それを直感で感じた。



瞬間、私の体からは氣があふれ出る。それでも奴は表情を変えない。

百代

「上等だ!!」

私は全力の【縮地】で駆け寄り、拳を突き出した。さっきまでの速さについて来れなかつた龍一だ。今回も決まると思った。

しかし……………

百代

「なん…だと?」

私の拳は止められていた。

たつた一本の左手の人差し指で――

S i d e  
o u t

## Side 黄真 龍一

驚く暇があつたらすぐに連続で攻撃するなり、距離をとるなりすることがあるだろう。なぜいつまでもぼけつとしている？一瞬の判断の遅れが自分の身に降りかかるといふのに……………待て？もしや……………

龍一

「百代、回復系の氣功——そうだな、例えば内養功や瞬間回復といったものは習得しているか？」

百代

「……………答えると思うか？」

龍一

「いや、今ので確認は取れた。答えてもらわなくて結構だ」

百代

「その余裕の表情を崩してやる!!」

言うやいなや百代は拳を突き出した。  
しかしそれはまたも指一本で止められた。

百代

「チッ!!」

龍一

「これではさっきのリプレイだ」

百代

「ならば重い一撃を与えるまでだ!!その指へし折ってやる川神流【無双正拳突き】!!」

俺はまたしても指一本で止めた。

龍一

「どうした?俺の指をへし折るんじゃないやなかったのか?」

百代

「まさか【無双正拳突き】まで止められるとは……」

龍一

「……………来ないのならばこちらから行くぞ」

瞬間、百代が後方に跳ぶ……しかしあまいな百代。そんな距離のとり方じゃ中途半端すぎる。もっと距離をとるべきだったな。

龍一

「行くぞ」

百代

「くっ!!」

【縮地】で駆け寄り、百代の腹を左手で打ち抜き、後方に飛ばす。

百代

「がはっ!! (なんて重たい攻撃だ!!)」

龍一

「考え事をしている余裕があるのか？」

百代

「っ!!」

すぐさま百代の着地点に先回りし、後ろから殴りかかる。

今度は反応できたのか、それとも戦闘の勘かとつきに左腕を上げる。

だがな百代………

龍一

「防御の上からダメージを与えることもできるんだぞ?」

拳の形を、左手の人差し指だけ出す形にする。

そのまま百代の左手首に狙いを定める。

百代

「ぐううう!! (なんだ今のは!? 指で突かれたただけで手首の間接が外れた!! いや、狙ったのか!!)」

龍一

「拳の形にもいろいろある。常識に囚われないことだな」

話しながらも攻撃の手は緩めない。

龍一

「脇があまい」

百代の右のわき腹を左手で突く。

百代

「がっ!!」

龍一

「視野が狭い」

百代の後頭部を右足で蹴り抜く。

百代

「ぐあっ!!」

龍一

「注意力が散漫。氣のコントロールが悪い」

吹き飛んだ百代の前に先回りし、かかと落としで叩き落とす。

……俺は少し離れて様子を見る。

龍一

「(さて……瞬間回復がある以上この攻防はあまり意味がない。まあ、今回は百代に満足してもらうことが目的である以上15分相手をすれば、後は周りが止めるだろう)」

百代に目をやると、ゆっくりと立ち上がってきた。回復したのだろう、痣どころか傷一つなかった。

龍一

「期待に応えたが満足できそうか？」

百代

「……ああ！最高だ！お前は最高だよ！龍一！」

龍一

「……忘れていないとは思いますがこれは手合わせだからな？」

百代

「ああ、分かってるって」

俺達は再び激突し、二戦目の幕が上がった。

S i d e o u t

S i d e 直江 大和

大和

「姉さんが押されてる？」

自分で言ってる信じられないくらいだ。姉さんは圧倒的な武を持ち、今までその力に助けられたことは両手の指じゃ足りないくらいだ。



その姉さんが押されている。その光景は少なからず動揺を与えた。

京

「うん。私も全部見えるわけじゃないけど、押されてるのは間違いない」

キャップ

「モモ先輩の拳を指一本で止めたところまでは分かったけど、その後はどうなったんだ？」

モロ

「そうだね、気がついたらモモ先輩が倒れてたんだぐらいの感覚だよね」

京

「モモ先輩が防御に精一杯だって事くらいしか見えなかった。クリスとワン子はどうか？」

ワン子

「ごめん、何にもわからなかったわ」

クリス

「自分もだ…マルさんは？」

マルギツテ

「全部ではありませんが大体は」

クリス

「さすがマルさん！」

大和

「それで？大まかでもいいから説明してくれないか？」

マルギツテ

「（―説明中―）——と言う訳です」

ガクト

「マジかよ……」

俺達はその内容に驚愕した。それって……

大和

「話を聞く限りじゃ防御もさせてもらってないじゃないか……」

マルギツテ

「それに龍一は右手と左足を攻撃の際使用していません」

京

「なんていうか、あきらかに手加減してるよね」

一子

「お姉様に手加減だなんて……」

マルギツテ

「私の時も指一本しか使わなかったな」

由紀江

「私の時もです」

キャップ

「ひゃく、どんだけだよ龍先輩」

グラウンドを見れば二人は距離を離して対峙していた。そろそろ15分。次が最後の攻撃だろう。

俺達は固唾を飲んで見ていた。

S i d e o u t

S i d e 川神 鉄心

鉄心

「まさかこれほどはのう」

わしは驚愕を隠しきれんかった。

最初に一撃もらったのにも驚いたが、その後の方がより驚愕した。なにせ百代が何もさせてもらえんのじゃからのう。

鉄心

「ヒュームの奴め、どこで見つけてきたんじやい」

ルー

「パワー、スピード、そのどちらもガ、百代を超えているル」

鉄心

「それだけではないぞ。あやつは攻撃の際、左手と右足しか使っておらんからのう」

ルー

「では手加減しているト？」

鉄心

「今回は手合わせじゃ。あやつも情報収集が目的な以上、それで十分と判断したんじや

ろう」

ルー

「あの年でこれほどまでの実力……百代にも驚きましたが、今回はそれ以上デス」

鉄心

「わしもじやよ。ホントに世界は広いのう」

そこに一人の来訪者がいた。

ヒューム

「どうだ？ 奴の実力は？」

鉄心

「ヒュームか……おぬし、あやつをどこで見つけてきたんじや？」

ヒューム

「その様子を見るに驚いているようだな。まあ無理もあるまい、なにせあいつはこの俺に15で勝った男だからな」

鉄心

「なんじやと!!」

それが本当なら今の百代では勝てん……

技術的なことに加え、精神・氣の操作で劣っているし、特に精神面では致命的じゃ。自他共に認める戦闘狂じやしのう。

それゆえ熱くなりやすい。

鉄心

「む？そろそろ15分じゃな」

ヒューム

「次の一撃で最後だろう」

二人は距離を離して対峙していた。

わしは、恐らく駄々をこねるモモを止める準備をするのだった。

S i d e o u t

S i d e 黄真 龍一

龍一

「破ッ!!」

百代

「ぐうっ!!」

百代の防御の上から致命傷の一撃を与える。本来なら腕の骨は粉々になっているだろう。すぐに回復するが百代は衝撃で飛ばされ、地面には百代が足で耐えたであろう二本の線が残っていた。

龍一

「さて百代、そろそろ15分だ。次で終わりにしよう」

百代

「なんたくもう終わりか」

龍一

「楽しい時間とはすぐに過ぎるものだ」

百代

「違うない。ところで一ついいか？」

龍一

「なんだ？」

百代

「なんで呼び捨て？」

龍一

「ああ、そういえば。なに、同じ年だしお前の名前を聞いてからずっとそう呼んできたからな。しかし失礼だったな……すまなかった」

百代

「まあ気に入らん奴だったら問答無用で殴っていたがお前ならいいだろう。これからいろいろ楽しめそうだしな♪」

龍一

「……お手柔らかに頼む。では!!」

掛け声と同時に氣を高める。今から出す技はコントロールがシビアだからな。

百代



「はは!!ホントに最後まで楽しませてくれる!!」

百代も氣を高め、お互いに構える。

互いに腰を落とし

百代は両手を右の腰あたりに

俺は右手を引き、左手を前に

百代

「川神流奥義!!」

龍一

「黒龍氣功奥義!!」

百代の氣が手の平に

龍一の氣が右手に集まる

百代

「かわかみ波」  
「!!!」

龍一

「【炎獄黒龍波】!!!」

百代の両手からは、さしずめ極太のレーザーが俺の右手からは黒い龍が相手に向かっていく  
そしてお互いの技が衝突した

百代

「ははははは!!なんだその技は!!」

龍一

「知りたければ真剣勝負で勝つことだ」

会話をしながら頭では別のことを考える。

龍一

「(肉弾戦は力に頼る傾向があるが氣功系の技は基本に忠実だ。これからの鍛錬しだいでは良くも悪くもなる。肉弾戦は基礎からやり直しだな)」

俺は思考をまとめて結論付け、攻撃に集中する。

百代

「ぐううっ!!」

百代も押されているのが分かるのだろう。俺はさらに力を込め黒龍が、かわかみ波を飲み込んでいく。

龍一

「破ッ!!」

百代

「うわっ!!」

黒龍が、完全にかわかみ波を飲み込み百代に当たる寸前に軌道を変更。空中に向かい、四散した。

鉄心

「そこまで!!」

学園長の声に戦闘態勢を解いた。

龍一

「ふう……これで今回は手打ちにしといてくれ」

百代

「いや〜やっぱり強かったな!なあ、これから川神院で試合しよう!!うん、そうしよう!!」

龍一

「人の話を聞け!!」

内心ため息をこぼしながらみんなの下に戻る。

英雄

「うむ、ご苦労であった」

紋白

「さすがは龍!!あの武神と互角とはな!!我も鼻が高いぞ!!」

龍一

「ありがとう、紋」

義経

「ホントにすごかった。やっぱり龍兄はすごいなあ」

龍一

「義経には俺の動きが見えていたんだろ?」

義経

「うん。モモ先輩も凄かったけど龍兄よりも遅く感じたな」

龍一

「それだけ義経も強くなっている証拠だ」

義経

「そうか。うん!義経はまだまだ頑張るぞ!!龍兄の隣で一緒に歩くんだ!!」

義経の決意に嬉しくなり頭を撫でた。

龍一

「頑張れよ、義経」

義経

「うう／＼／＼」

弁慶

「あゝあ、主つてば赤くなっちゃつて」

義経

「うう、弁慶!!」

弁慶がちやちやを入れ和やかな雰囲気になる。

龍一

「なんだ？弁慶も撫でてほしいのか？」

有無を言わさず弁慶の頭を撫でる。

弁慶

「ん、気持ちいい／＼／」

少し赤くなりながらも気持ちよさそうに目を細める。

それを羨ましそうに見つめる清楚がいた。

俺は清楚に近づき頭を撫でた。

清楚

「あう／＼／」

龍一

「捨てられた子犬みたいな目だったぞ」

清楚

「そんなんじゃないもん」

龍一

「そうか」

撫でていた手を頭から離す。

清楚

「あつ」

少し寂しそうだったがこれ以上はまずいので自制した。

冬馬

「お疲れ様です」

龍一

「まったくだ」

井上

「しっかしすつげー強ええな」

小雪

「当然だよ☆なんたって僕のヒーローだもん」

龍一

「まあ無事に終わってなにより、だな」

小雪に抱きつかれながら冬馬達と話していると学園長とルー先生が歩いてきた。



鉄心

「ほっほ、お疲れ様じゃ」

龍一

「いえ、なかなかどうして楽しめましたよ」

鉄心

「どうじゃおぬしの目から見てモモは」

スウツと学園長の目が細くなり、鋭く光る。

それを感じながら、臆することなく言った。

龍一

「武神を名乗っている以上実力は申し分ありません。しかしこれより、上を目指すのであれば足りないものが多すぎます」

鉄心

「ふむ。してそれは？」

龍一

「まずは肉体系。接近戦で力に重きを置いているのに体ができていない……これはヒュームも同意見だろうか？」

ヒューム

「ふん、朝本人に言ったのを聞いていただろう」

龍一

「だそそうです」

鉄心

「ふむ、他には？」

龍一

「技術面では問題ないでしょう。ただ、やはり力に頼っている分大振りになりがちです。基礎をおろそかにしているわけではないでしょうが大技に頼る傾向が見えます」

鉄心

「耳が痛いとう。それでいてよく見ておる」

龍一

「ありがとうございます。そして氣のコントロールですが、こちらも問題はありません。瞬間回復を身に着けているので氣の量も多いと思います。これから効率のいいやり方を身に着ければさらに武術家として大成するでしょう。しかし問題は………」

鉄心

「やはり精神面かのう?」

龍一

「学園長も気づいていましたか……そう、問題はそれらを行う本人です。今はまだ仲間や友人といることでその精神はなんとか安定されていますが、今まで自分と対等な人物がいなかったせい、常に強者の孤独に苛まれてきたんでしょう。それが現在の戦闘狂の要因の一つです」

鉄心

「もう一つとは?」

龍一

「これは恐らくですが……本人の性格です。この問題は学園長の方が正確に理解していると思いますが?」

鉄心

「確かにのう。しかしおぬし、たった15分でよくそこまでわかるのう」

龍一

「武術に関しては手合わせすれば大体は。内面に関しては聞いていた情報と実際に会って話し、見聞きしたものを統合し判断しただけですよ」

そういつて苦笑してみせる。学園長は鋭い眼光を抑え、普段の飄々とした雰囲気に戻った。そこに百代達がやってきた。

百代

「さあ龍一!!川神院に行つて勝負するぞ!!」

龍一

「は?」

まさか本気か?……いや本気なんだろう。呆然とした俺は悪くない。

龍一

「はあ、今日はここまでだとさつきも言っただろう」

百代

「いいじゃないか、勝負しよう勝負!!」

鉄心

「こらモモ!!まったくお前という奴は……すまんのう」

龍一

「いえ、ようやく自分と戦える者がいるんです。無理もないでしょう」

鉄心

「そういつてもらえると助かるわい」

しかしこのままでは埒がいかんな。予定の落としどころで我慢してもらおう。

龍一

「百代、さつきも言ったが俺の役割は義経達のサポートだ。そこは理解しているな？」

百代

「ああ」

龍一

「そこで、だ。休日は手合わせという形で川神院で模擬戦を行うというのはどうだ？毎週時間が取れるわけではないがな。これなら適度にガス抜きもできるだろう」

百代

「ん〜まあ仕方ないか。いいぞそれで。あ〜早く週末にならないかな〜♪」

鉄心

「……………ホントにすまんのう」

龍一

「いえ、こうでもしないと収まりませんから。正式な試合は九鬼が用意するとのことです。その時はご連絡します。それではまた明日」

そう挨拶をして俺達は下校した。いつの間にかクラウが呼んだリズムジンが校門にいたのには驚いたが、なんとか編入初日を終わることができた。

百代との手合わせは予想内ではあったが、正直めんどくさいことになったと内心眩く。

そういえば燕がサプライズがどうこうと言っていた時期だな。

まさかとは思うが……………

思考を中断し窓の外を見れば極東本部が見えてきた。

本人の予想が的中することになるとは、この時は知るよしもなかった。

S i d e o u t

t o b e c o n t i n u e d

次回 「納豆小町再び」





「(バシヤツ！バシヤツ！) ふく、よし！」

眠気を覚まし、ジャージに着替え軽くストレッチをした後ランニングに出るため外へ向かう。外に出たところで義経と合流した。

義経

「おはよう、龍兄」

龍一

「おはよう、義経。行こうか」

そのまま二人でランニングに出る。この朝の鍛錬には清楚、弁慶、与一は参加しておらず自主的なものとなっている。

最初は一人で行っていたが、義経が知ると「義経も参加する！」と言い出しそれ以来一緒に鍛錬している。

ランニングは極東本部を5周。距離にして約10km。その後は基本的な筋トレに各々武術の型に10分間の模擬戦を行う。

朝の鍛錬では義経は刀ではなく無手で行う。刀が使用できない場合の時のために教



龍一

「ふう、時間だ義経」

義経

「むく、また一撃も当てられなかった」

龍一

「まだまだ負けてやらんさ。シャワーを浴びて朝食にしよう」

義経

「うん！」

朝食を済まして自室へ戻り登校の準備をしていると不意に大きな氣の衝突を感じた。

龍一

「ツ!!この氣は……ヒュームさんか」

なにがあつたのは分からないが、ヒュームさんの氣が無くなつていないのでたいしたことはないのだと思い、学園に登校した。

s i d e o u t



川神学園 放課後 第二茶道室

s i d e 直江 大和

俺は今宇佐美先生と将棋を打っている。予備の部室を私物化しているヒゲ先生に親しみがもてた。予備部室なので迷惑はかからないはず。

宇佐美 巨人

「あゝ、小島先生と結婚してえ、新婚旅行で湯河原温泉行きて〜（パチツ）」

大和

「願望丸出しですね、全然進展してないのに（パチツ）武士道プランで疲れてるんじゃないな

いんですか?」

宇佐美

「二人のときは敬語いって……思ったほど疲れないな。義経は優等生だしよ、逆に気をつかってもらってるわ（パチツ）」

大和

「彼女は決闘希望者が後を絶たなさそうだよね（パチツ）」

宇佐美

「今も第一グラウンドでやってるぜ、相手生徒会長（パチツ）」

大和

「ギャラリーはそっち行ってるだろうね（パチツ）」

宇佐美

「だからこそまったりできるわけだ（パチツ）」

大和

「弁慶と与一は?（パチツ）」

宇佐美

「んー、あー弁慶は飄々としてるからな、川神水は飲むが大人しい子だよ。与一は終始ダルそうにしてるがやることやってるし問題はなさそうだな。直江は結構弁慶とか

好きそうなタイプだな（パチツ）」

大和

「性格的に合いそう。仲良くしたいね（パチツ）」

宇佐美

「わかるわかる、お前と近そう（パチツ）」

そんな話をしていると廊下からスタスタと足音が近づいてくる。

大和

「誰か来るよヒゲ先生」

宇佐美

「通りすぎんじゃねー、こんな空き教室誰も来ないだろ」

龍一

「（ガラツ）ん？ここはなんの部屋なんだ？」

扉を開けたのは龍一先輩だった。ちょうどよかった、連絡先を聞こうと思ってたんだ。先輩は俺たちに近寄り、腰を下ろし将棋盤を見る。

龍一

「将棋ですか?……これは大和が優勢だな」

大和

「先輩はどうしてここに?」

龍一

「ん?ああ、校内探索と放課後の暇つぶしだな。九鬼に所属してるといつても義経達のことを考慮してその辺ゆるいからな」

大和

「そうだったんですか。それでここに行き着いたと」

龍一

「そういうことだ。いつも二人でここに?」

宇佐美

「オジサンは暇なときはな」

大和

「ヒゲ先生、俺が見つけて来るようになった後居なかったことないですよね」

宇佐美

「そりやあれだ、仕事全部終わらせてるからな」

大和

「嘘くさ」

龍一

「なるほど、ここはだらける部室か」

宇佐美

「ま、そういうこと。お前は真面目そうだからな、入部拒否だ」

龍一

「ひどいですね宇佐美先生。俺だって人並みに手を抜きたい時くらいありますよ」

宇佐美

「んじや質問。休日に雪山に行きました。さて、何をする？」

龍一

「帰って寝る」

宇佐美

「山すら登らないとは……こいつの素質は最高だな」

龍一

「これからここに来てもいいんですかね？」



宇佐美

「ああ、オジサン歓迎するよ」

大和

「俺も」

龍一

「どうも」

三人で談笑しながら将棋をしているとまた廊下から足音が近づいてくる。

大和

「また誰か来たみたいだよ」

龍一

「この氣は弁慶だな」

宇佐美

「お前も人間やめてるよな」

龍一

「失礼ですね」

ガラツと扉を開いたのは先輩の言う通り弁慶だった。

弁慶

「あれ？龍」

龍一

「よ、どうしたんだ？」

弁慶

「んー、私決闘とかかったるいから逃げてきた」

大和

「それでここに行き着いた、と」

弁慶

「そ。龍がいるし、いてもいいよね」

宇佐美

「ここは三人の聖域だからな」

大和

「なんて薄汚いサンクチュアリなんだ」

宇佐美

「まー冗談だって、好きにしろや弁慶」

龍一

「弁慶、川神水くれ」

弁慶

「はいよ」

大和

「なんでこの二人初日でこんなに堂々としてんの？」

弁慶

「んっんっぶは、直江気にしたら負けだよ」

大和

「なんの負けだよ」

宇佐美

「とりあえず入部テストだ。友達と温泉旅行に行きました。さてどうする？」

弁慶

「温泉に入って川神水を飲んでぼくとして温泉に入って食事をして川神水を飲んで寝る。翌日は午後一時に起きる」

宇佐美

「こいつもまた素質は最高だな。なかなかのだらけっぷりだ」

弁慶

「これからよろしく。(い)く(い)く)」

大和

「仲間の作法その1。連絡先は教えあいましょう」

弁慶の方に携帯を向ける。弁慶はチラッと先輩の方に目を向けた。

弁慶

「ん、悪いけどそのうちね」

大和

「そっか。やっぱそういうの厳しいんだ」

弁慶

「まあ事情が事情だしね。禁止ではないから」

大和

「仕方ないか、んじゃ先輩」

龍一

「ん?」

大和

「連絡先。交換しましょう」

龍一

「まあいいか(ピツ)」

大和

「先輩はいいんですね」

龍一

「俺はただの護衛だからな。だからといってなんでもかんでも頼るなよ」

大和

「了解です」

先輩に釘を刺された後は、川神水に合うおつまみやらの話になり談笑して放課後の時間は過ぎていき、気づけば日が落ちてしまった。

大和

「じゃあ全員大扇島の九鬼財閥のビルに住んでるんだ」

弁慶

「楽しくやってるよ。門限もゆるめだし」

龍一

「二回諸事情あつて遅れたことがあつたがそのときはヒュームさんと乱闘になりかかつたな」

大和

「そ、そうですか」

弁慶

「おっ？下駄箱に手紙が入つてたなう」

大和

「ラブレターか決闘状か、どっちもありそうだよね」

弁慶

「ラブのほうだ。三年生から……私彼氏いるから意味ないんだよねー」

大和

「え？弁慶彼氏いたの!？」

龍一

「どうした？」

弁慶

「あ、龍。ラブレター貰っちゃったよ」

龍一

「俺も入ってた。ラブレター3つに決闘状2つ」

弁慶

「む」

龍一

「なんだ弁慶妬いてるのか？」

弁慶

「まあ一応ね」

龍一

「素直でよろしい」

そういつて先輩は弁慶の頭をなでた。なんか弁慶頬染めてるし……つてちよつと!!

大和

「龍一先輩弁慶の彼氏ってまさか……」

龍一

「俺だが？」

大和

「マジか……」

まさか弁慶の彼氏が龍一先輩だなんて……弁慶とはこれからどうなるか分からないし、もしかしたら俺でもと思ってたけど……先輩はSクラスだから頭もいいんだろう。それに姉さんくらいに強いイケメンだし。

大和

「（——どう考えても勝ち目がないな）」

龍一

「そんなにシヨックだったか？」

大和

「まあそれなりには」

弁慶



「ついでに清楚先輩と義経とも付き合ってるよ龍は」

大和

「は？ごめん、もう一回言つて。耳が遠くなつたかな？」

弁慶

「清楚先輩と義経とも付き合ってるんだよ龍は」

大和

「はあああああああ!!!」

龍一

「はあ」

え？なに三股!?

大和

「えーと弁慶たちはそれでいいわけ？」

弁慶

「まあね。3年前から龍は私らの共有財産だから」

龍一

「まあそういうことだ」

大和

「これが知れたら全男子生徒の敵ですよ」

龍一

「なにお前が黙っていればいいだけさ」

そういつて先輩はグラウンドの方に足を向ける。はあ、とんでもないこと聞いちやつたよ。ガクトには言えないな。

s i d e o u t

s i d e 黄眞 龍一

グラウンドではギャラリーの大歓声が起きていた。見ればまだ義経が決闘しているところだった。

大和

「まだ決闘やってたのか」

龍一

「あれは確か川神 一子だったか」

「キンキンキン！キンキンキン！」

刃を潰した刀と薙刀が甲高い音を立てて打ち合っている。義経は迫り来る薙刀をその刀で打ち払う。袈裟懸けに刀を合わせ切り払い、返す刀で振り下ろす。一子はそれをバックステップで回避する。

一子は義経の残心を見て薙刀を構え突進し横切りに振るう。義経はしやがんで回避し、空いた体にしたから切り上げるが、一子は後ろに跳びながら身を捻って何とか避ける。

義経

「なんとという激しさだ！義経は驚愕した！」

ワン子

「この一撃はガードできないわよ！」

一子の一撃を義経は体を左に半身で避け瞬時に接近し刀を振るった。

ワン子

「うあっ！」

隙を突かれた一子に義経の一撃が直撃し一子は倒れた。

京

「頑張ったけど、最後焦っちゃったねワン子」

クリス

「義経は身軽だなあ。飛燕のごとく、というわけだな」

——30分後ギャラリーは解散し、ポツリポツリと人が残る程度になった。

龍一

「お疲れ義経。どうだった川神さんは」

義経

「すごくいい試合だった。義経も得るものもあつた」

龍一

「そうか」

俺は義経の頭をなでた。義経は頬を染め気持ちよさそうにしている。

クリス

「ん、義経と犬の手合わせは凄かったな」

大和

「こんなに早く決闘できるとは知らなかった」

クリス

「義経がどんどん挑戦者を片付けるから予定が繰り上がつてな」

ワン子

「いやあく負けちゃったわ。でもでも得るものも多かつたわ。悔しいけどまだまだ強く

なれる！」

京

「挑戦者の中では一番粘ってたよ。生徒会長なんて骨法出す前に終わっちゃったし」

義経

「実にいい汗を流せた。また戦おう一子さん」

ワン子

「今度は負けないわよ。覚悟してよね」

龍一

「クリスは戦わないのか？」

クリス

「連戦で疲れてる義経と元気な自分とではフェアではないからな。この波が落ち着くまで待つつもりだ」

ワン子

「確かに義経疲れてたかも」

クリス

「ん？ああ、別に犬を責めているわけじゃないぞ」

義経

「できるだけ多くの人と手合わせするのが義経の役目だ。気を使わなくていい」  
クリス

「これは自分のこだわりみたいなものだ」

義経

「義経は理解した。いずれ戦おうクリスさん」

クリス

「ああ」

今日はそので解散となり各々が帰路についた。

護衛といわれても特にする事がないと気づいた一日だった。

6月10日 水曜日 登校時間 多馬大橋

龍一

「今日も朝から元気だな、百代は」

橋の上から百代が吹っ飛ばした相手を見ながら、こつちに歩いてくる百代達に声をかけた。

百代

「なんだ龍一じゃないか」

龍一

「なんだとは失礼だな」

百代

「まあ気にするな。それよりもどうだ？こころで一つ？」

そういうと百代は氣を俺に向けて放つ。

龍一

「やるわけないだろう。早くその氣を抑えろ」

百代



「ちえ、ストレス発散できると思ったのに」

龍一

「都合のいい。そういうのは義弟の大和にでもしておけ」

大和

「ちよっ!?!人柱にしないでくださいよ!」

龍一

「素晴らしいながら、百代の胸の感触とか楽しんでるんだろ?ムツツリめ」

大和

「へ?なんで知って:ちよっ!やめて姉さん!ニヤニヤしながら当てないで!」

目の前で百代が大和に抱きつきながワザとらしくこれでもかと密着する。

ガクト

「くそくうらやましいぜ畜生!松風、言ってやれ」

松風

「年上って響きはいいけど、早く年食ちちまうんだぜ」

百代

「よし！今日はまゆまゆの部屋に泊まろうつと」

由紀江

「ええええ！私の部屋ですか！」

百代

「寝技の乱取りで上下関係を再確認しないとな」

モロ

「あゝ、言い過ぎたんだねこれ」

龍一

「師岡、いたのか」

モロ

「いましたよ！さりげなくひどいこと言わないでくださいよ！」

龍一

「すまんすまん。冗談だよ」

雑談しながら橋を渡っていると、後ろから清楚が自転車に乗って来た。

清楚

「リンリンリリーン、リリーン♪」

ガクト

「おお見ろよモロ！葉桜先輩だぞ清楚だなあ」

モロ

「ホントだ。見てよ、自転車から降りる姿も絵になるなあ」

清楚

「龍君、モモちゃんおはよう」

龍一

「よ、清楚」

百代

「おはよう清楚ちゃん。おっ〇い揉んでいいかな？」

清楚

「ええ／＼／」

大和

「いつの間に仲良くなったんだ？」

百代

「ワタシ美少女にメガナイ、スグニ教室イッテ、口説イタ」

大和

「オーイエス……龍一先輩はいいんですか？」

龍一

「なにがだ？」

大和

「いや、ほら姉さんが口説いて」

龍一

「別に本気じゃないだろ。せいぜいがスキンシップ程度、何も心配いらんさ」

大和

「そうですか」

集団のほうでは岳人が百代に詰め寄っていた。

ガクト

「葉桜先輩を紹介してくれよモモ先輩！ハアハア！」

百代

「えー」

ガクト

「紹・介・し・て・く・れ・よ!!」

百代

「分かった、分かったから! 血涙なんか流すな!」

清楚

「楽しそうなお友達だね、モモちゃん」

清楚、あれを見て楽しそうな友達で済ますお前の胆力に驚きだ。

ガクト

「島津岳人です。ベンチプレスで190kg上げます。俺様と結婚を前提に付き合っ

下さいー!」

清楚

「ごめんね島津君。私もう付き合ってる人がいるんだ」

その瞬間、周囲の空気が凍った。

ガクト

「………ちなみにその人は？」

清楚

「えっと／＼／＼（チラッ）」

清楚が俺の方に視線を向けた。清楚よ、そこは誤魔化すところだろ。

ガクトなんか血涙流しながら「ギギギッ」つとこつちに視線向けてるし。周りの視線も俺に集中してるし……どう収集しよう。

ガクト

「………先輩………本当に？」

龍一

「……ああ」

ガクト

「………清楚先輩の彼氏？」

龍一

「………そうだ」

ガクト

「……………おおおおおーーーーー!!イケメンは死ぬーーーーー!!」

ガクトは怒りに任せ拳を繰り出してくる。

それを上半身をそらして避けると、右から拳が飛んできたので、誰かと思うと百代だった。その百代の拳を右手で受け止めた。

龍一

「ガクトはともかく何で百代まで出てくるんだ？」

百代

「いや、なんかムカついたから」

龍一

「なんだそれは? まあ、ドンマイだガクト」

ガクト

「チクシヨーーーーー!!」

ガクト強く生きろ。

大和

「葉桜先輩は自転車通学なんですね」

清楚

「うん、九鬼財閥が開発した電動自転車でね、坂道なんかもスイスイ進むからスイスイ号って言うの」

スイスイ号

「みなさん、おはようございます」

クリス

「おお、喋ったぞ!!これも腹話術か?」

由紀江

「人工知能のようですね。松風は九十九神ですが」

ワンス子

「メイドイン九鬼なら喋っても不思議じゃないわ」

大和

「人工知能はクッキーで証明済みだからな」

スイスイ号



「はい、クッキーさんは私の先輩にあたります」

モロ

「この自転車トランスフォームしたりするのかな？」

スイスイ号

「師岡様、残念ながらそのような機能はありません。私はただの自転車ですので」

モロ

「ただの自転車は喋らないと思うけど」

キャップ

「しかしすつげえ自転車だな。乗ってみてもいいか？」

スイスイ号

「すみません、拒否いたします。私に乗れるのは主のみ」

京

「おお、忠誠心が「もしくは美人な方なら歓迎します」と思ったらただのスケベだった」

スイスイ号

「ジョークですよジョーク」

キャップ

「じゃあ乗ってもいいんだな」

スイスイ号

「断固拒否します」

キャップ

「いーじゃん、いくぞ！」

スイスイ号

「汚ねえケツを乗つけるんじゃないやねえ!!」

キャップ

「うわああああ、大和こいつ怖いぞう!!」

大和

「無理矢理乗ろうとするからでしょ。それにしても…」

クリス

「なんで九鬼の人工知能はすぐキレルんだ？」

京

「まさしくクツキーの後輩の感じがするね」

龍一

「一応威嚇機能がついてるんだよ。盗難防止や、清楚のために」

スイスイ号

「行きましょう清楚、余裕を持った登校を」

清楚

「はーい、じゃまた後でね龍君」

龍一

「ああ」

清楚は自転車に乗り颯爽と駆けていった。

その後、義経たちが合流した。

雑談しながら登校していると後ろからバイクが迫ってきた。

ひったくり

「いっただきいいいいっ!!」

義経

「ああっ!!」

ひったくりは義経の鞆を奪って逃走した。

由紀江

「!?手加減したとはいえ刀をはじくなんて」

龍一

「そこそこ腕に覚えがあるみたいだが無意味だな……与一…撃て」

与一

「了解……」

大和

「ここから狙うのか?…京お前ならできるか?」

京

「さすがに遠いと思う……あ、大和がエネルギーくれるならいけるよ」

与一

「奥義……【金剛矢】!!」

放たれた矢は一直線にひったくり犯の乗るバイクに向かい……

ひったくり

「へ?」

ドガアアアアアアアアン  
!!!!

見事に命中し、飛んだ鞆を空中でキャッチして着地。

龍一

「ほら義経」

義経

「ありがとう龍兄、与一」

与一

「はいよ」

龍一

「とりあえず一件落着だ、行くか」

朝からとんだ災難だったな。さすが多馬大橋。通称『変態の橋』といわれるだけあるな。



川神学園 昼休み 屋上

多馬大橋で清楚が俺と付き合っているとの発言で、学園中の男子から敵意の視線で見られるため早々に退避してきた。

視線で人が殺せるなら俺はとっくに死んでいるだろう。

屋上の貯水タンクの上で食事をし、まどろんでいるところに大和がやってきた。

大和

「先輩も昼寝ですか」

龍一

「ここに来たのはたまたまだが、中々居心地がいいなここは」

大和

「なにかあつたんですか」

龍一

「ほら、朝の清楚の発言でな。視線が目障りだから逃げてきた」

大和

「あ、なるほど」

龍一

「昼寝に来たんだろ？後で起こしてやるから寝てろ」

大和

「じゃ、お言葉に甘えまして」

そういうと大和は隣にゴロンと転がりくつろぎ始めた。

俺は持参した本を読み、時間を潰していると、不意にどこかで感じた氣を思い出した。

龍一

「（この氣は……なるほど、サプライズとはこういうことか）」

???

「や！久しぶりだね、龍一君」

龍一

「ああ、会うのは久しぶりだな燕」

燕

「およ？結構不意を突いたと思ったんだけどなあ」

龍一

「不意を突くには気配の消し方が甘いな。今度教えてやるよ」

燕

「おお、ありがとねん♪」

龍一

「ああ後、パンツは見えないようにな」

燕

「／／／……見た？」

龍一

「さあ？大和も寝た振りして薄目開けても意味ないからな」

大和



「気づいてたなら声かけてくださいよ」

龍一

「いや〜どこまでそのムツツリを出すのかなと」

大和

「ムツツリって言わないで下さい！」

龍一

「ははは!!悪かったって。それで?その制服着てるってことは転入ってことでいいんだよな?」

燕

「そだよん。今日は下見だね」

大和

「つていうか龍一先輩知り合いなんですか?」

龍一

「ああ、武者修行中に出会ってな。それからはメールのやり取りくらいだ」

燕

「そうそう。そのときに色々助けて貰っちゃってね」

大和

「なにかあつたんですか？」

燕

「ま、そのうちね。んじゃまたね龍一君。とうっ!!」

そういつて燕は屋上から跳んでいった。そのすぐ後に風が吹いた。

大和

「……なんだよ風吹くの遅すぎだろ」

龍一

「……( ; ? | ? ) ジー」

大和

「はっ！待って今の無し！」

龍一

「これは京に報告だな」

大和

「ごめんなさい！それだけは！」

龍一

「やっぱり大和はムツツリか」

大和

「グハアツ！」

なにやら心を抉ってしまったみたいだ。

しかし、燕が来るとまた騒がしくなるな。

どうしたもんかなと、これからのことを考えるのであった。

s i d e o u t

6月11日 木曜日 朝のHR

s i d e 川神 百代

カラカル・ゲイツ

「サテ、今日ハイキナリ転入生ヲ紹介スルヨ」

いきなりのことに、クラスがざわついた。

弓子

「この時期に？クローンで候？」

ゲイツ

「クローンジヤナイネ、普通ノ人ダヨ」

百代

「どうせムサイ男とかだろ。ソースは私の感」

弓子

「なるほど、ありえるで候」

ゲイツ

「百代。直感ハ頼リニナルガ、決メ付ケハ駄目ダヨ。ソレジヤ転入生軽ヤカニドウゾ」

百代

「まさかの美少女来たー！ー！ー！！！」

燕

「はじめましてー！！」

男子連中から歓声が上がった。

3—F男子

「可憐だ…やったぞ皆の衆…ついに、ついに我らは美少女を手に入れた！悲願達成、大願成就！」

百代

「おいおい美少女なら私やユミがいるだろチミ」

男子

「ひいつ、川神さんはそれよりも恐怖が勝って」

百代

「失礼な。まあそんなことより目の前にいる一輪の花だ」

私は転入生に近づいていく。

百代

「私は川神百代！よろしくな！」

燕

「武神だね。西でもその名は聞いてるよ」

百代

「ん？」

燕

「私は松永燕。よろしくね」

燕が手を出してきたので握手をした。

その瞬間私は感じ取った。

彼女は強いと。

百代

「松永と言ったか？あの松永か？」

燕

「うん、一応武士娘として決闘とかもやってるよ」

弓子

「聞いたことがあるで候。西に武具を使いこなす兵がいると…それが松永」

百代

「何故川神に？」

燕

「おとんの仕事の都合。これが関東へ来た理由。川神学園を選んだ理由は、賑やかで楽しそうだから…そしたらいきなり源義経だよ。いいよねえ、破天荒で」

百代

「なるほど、分かりやすいな燕。では、川神の流儀でお前を歓迎してやろう。決闘だ」

燕

「うくん、記録に残るような試合は許可が必要なんだ」

弓子

「西は家名を重んじると聞いたことがあるで候」

百代

「あー、家がうるさい系なのか」

燕

「ごめんね。でも稽古つてことならいいよ」

百代

「——ははは!!よし、歓迎稽古だ!!」

私たちはグラウンドに移動した。

龍一といい、燕といいこうも続けて楽しめるとは。

百代

「さあいくぞ!!川神流【無双正拳突き】!!」

s i d e o u t

s i d e 黄真 龍一



窓から外を見れば百代と燕が戦ってるのが見えた。

龍一

「あいつの転入今日なのか」

近いうちには思っていたが、昨日の今日とは……

清楚

「ねえ、あいつって？」

呟いたのが聞こえてたのか、清楚が話しかけてくる。

俺は外を指差し、誰かを示した。

龍一

「百代と戦ってるのが松永燕。京都でちよつと知り合ってたな」

清楚

「そうなんだ。すごいね、モモちゃんと戦ってる」

見ればたくさん武器を使い百代と戦っている。

しかし器用貧乏。決定打にかけろ。たくさん武器が使えるのは強みだが、一つ一つの練度が足りなさ過ぎる。

今回の戦闘に何の意味が……………

龍一

「燕は相手を調べてから戦う……………今の燕じゃ百代に勝てない……………今回決闘の放送は無かった。となればこれは手合わせ?……………なるほど、今回は手合わせと称して目的は百代の分析。そうなれば、武器の多さにも納得がいく」

一応の考えをまとめた頃には戦闘も終わっていた。  
何かルー先生と話した後、マイクを持った。

燕

『皆さん、暖かいご声援、ありがとうございます。京都から来た、松永燕ですっ！これからよろしくっ！何故私が、川神さん相手に粘れたかといいますと!!』

カップ型の松永納豆（試供品）を取り出す。

燕

『バーン！秘訣はこれです松永納豆ツツツ!!!もちろんこれ食べれば強くなれるわけではありません。しかーし！ここぞという時に粘りが出ます！皆さんも、栄養満点の納豆を食べて、エンジヨイ青春！試食したい人は、私がついていまーす!!皆さんも一日一食、納豆、トウツ!!以上、松永燕でした！ご静聴感謝します!』

燕……相変わらず商魂逞しいことで。

でもあの納豆は確かに美味しいんだよな。

s i d e o u t

side 松永 燕

マイクでの納豆営業が終わってたくさんの歓声の中で、漸く目当ての人物を見つけたので、大きく手を振れば、向こうも振り返してくれた。

百代

「燕は龍一とは知り合いなのか？」

燕

「うん。昔、いろいろ世話してもらったんだ」

百代

「ふーん」

燕

「?どうしたの？」

百代

「いや、なんかこうムカムカというかモヤモヤというか……よく分からん」

燕

「???

百代

「まあいいや、戻ろうか」

燕

「そだねん」

百代ちゃんに勝ったらこの想いを龍一君に言おう。

隣にいた女の子がすごい睨んでたけど。

そんなことを考えながら教室へと足を進めた。

s  
i  
d  
e  
o  
u  
t

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

次回「―歓迎会―」

# 第漆話 — 歡迎会 —

川神学園 昼休み 屋上

side 黄眞 龍一

朝の騒動から時間は過ぎて昼休み。

俺は自身に向けられる嫉妬の視線に疲れながら屋上へと足を進めた。

燕が来てから多少は減ったものの、それでも数は多い。

食事も終わり、屋上の給水タンクの上でどうしたものかと考えていると大和の氣が屋上に向かって進んでいるのに氣がついた。

龍一

「あいつはこのままサボリかね」

そう考えていると、屋上のドアが開き、給水タンクの上まで大和が登ってきた。

大和

「あ、先輩どもです」

龍一

「おう、このままサボリか？」

大和

「あゝ次麻呂の授業なんで」

龍一

「ふくん、そっか」

なんでもその教師は平安時代が至高と言っており、授業では平安時代しかやらないくせに、テストでは別の時代も出すというなんとも迷惑な教師らしい。横になってしばらく談笑していると一つの氣を感じた。

燕

「やつほく、ここにいたんだね」



龍一

「燕か、朝はご苦労だったな」

燕

「いやあくさすがは百代ちゃんだね。強かったよ」

大和

「松永先輩こんにちわ」

燕

「うん、こんにちわ」

龍一

「燕も風に当たりにきたのか？」

燕

「うんまあそんなところ」

龍一

「??」

燕はちらりとこちらを向いたあと空を見上げた。

なんとなく顔が赤い気がしたが次に向いたときは元に戻っていた。

その後は三人で談笑し、大和は燕のアドレスを教えてもらったり、二人で大和をいじったりして過ごした。



九鬼財閥極東本部 P M 21:26 自室

夜の鍛錬や入浴なども終え、自室でくつろいでいると携帯が鳴った。

龍一

「もしもし」

彦一

「龍一か？今大丈夫か？」

龍一

「ああ」

彦一

「そうか。では聞くが明日の放課後時間はあるか？」

龍一

「大丈夫だが、どうしたんだ？」

彦一

「実はな……」

話を聞くと、明日が義経たちの誕生日なので、誕生日おめでとうパーティーと歓迎会を同時にやってみようという紋白が言い出し、それに賛同した大和たちが彦一や俺に協力を依頼したという訳だ。

会場や料理など大和が方々駆けずり回っているらしい。

龍一

「なるほど、了解した。そういうことなら俺も手伝おう」

彦一

「助かる。葉桜君にはもう言っている。ではおやすみ」

龍一

「ああ、おやすみ」

電話を切り一人物思いに耽る。

龍一

「転入してから一週間も経っていないのに、つくづくイベントに事欠かないな。まったくもって——面白い」

そう呟いて布団に潜り就寝した。

◇

6月12日 川神学園 放課後 歓迎会会場

清楚

「こんにちはわ」

彦一

「来たぞ、直江」

龍一

「よ」

大和

「どもです」

会場に足を運んでみればもうほとんど準備は終わり、後はテーブルの運搬や料理運びだけらしい。

何でも昨日から準備を始めていたようで、最後の準備と「やるなら三年も巻き込んでしまえ！」ということらしい。

龍一

「俺はテーブル運んでくるから、清楚は料理運んできてくれ」

清楚

「うん」

大和

「京極先輩には字を書いてほしいんであつちに」

彦一

「うむ、わかった」

一子

「おおー京極先輩が字を書いてくれるのね」

モロ

「豪華なメンツでの歓迎会だね」

ガクト

「せっかくだ、最大限のおもてなしをしてやろうぜ」

そんなこんなで1時間後

会場設営は終わり、後は義経達一行を待つばかりとなった。

小杉

「プレミアムに会場設営完了！」

由紀江

「料理もばっちりです」

みんなそれぞれ談笑して過ごしているところに本日の主賓がやってきた。

マルギツテ

「直江大和。2—Sを全員連れてきたぞ」

大和

「ありがとう。皆さんいらっしやい」

井上

「おーいいねいいね、メシもうまそうだし」

冬馬

「よく一日でここまでやりましたねえ」

大和

「みんなのおかげさ。俺指示しただけだし」

2—Sの周りには人が集まって、笑って話している。それを離れて見ていると声がかかった。

清楚

「ありがたいよね。こういうの」

龍一

「そうだな。ここまで大きなものは今までなかったし」

清楚

「うん。……あ、来たみたい」

入り口には義経、弁慶、与一の姿があった。

与一は来ないかとも思ったがちやんと来てくれた。あいつも少しずつ外と関わりを持つとうとしているということだろう。

三人は会場の一段高くなっている即席の舞台に立った。



義経

「今回は、義経達のためにありがとう」

弁慶

「川神水まで用意してもらって：嬉しいね」

与一

「まあ、ありがとな」

井上

「ハイハイ！与一、照れがあるぞ」

与一

「るっせ、後で蜂の巣にしてやる」

井上

「なんでいきなりそんな殺伐とすんの！」

こうして歓迎会は始まった。

みんなは思い思いに楽しんでいる。立食式でひたすら料理をかき込んでいるのもいれば、談笑に花を咲かせてるのもいる。

俺は紋白のところに向かった。なにやら直江と話している。

龍一

「よっ！紋」

紋白

「ぬ、龍一か」

龍一

「ありがたいな紋。あいつらのために」

紋白

「かまわん、なにより我一人ではここまでのことはでなかったからな」

龍一

「ああ、話は聞いている。直江ありがとう。ここまでこぎつけたのはお前のおかげだ」

大和

「いえ、気にしないでください。やりたいようにやっただけですし」

龍一

「そうか。あいつらも他学年と関わりが持てただろうし壁も無くなっていくだろう」

大和

「だといいですね」

龍一

「じゃ俺はこの辺で。お前も紋も楽しめよ」

大和

「はい」

紋白

「うむ、またの」

俺はその場を後にし、義経達のところに向かう。

義経

「あつ龍兄」

龍一

「楽しんでるか？」

弁慶

「もちろん。やっぱりみんなで飲む川神水はおいしい（ングング）」

義経

「あわわ、弁慶ペースが早いぞ」

龍一

「今日くらいは好きに飲ませてあげな」

義経

「うう、龍兄がそう言うなら」

龍一

「今日はお前たちの歓迎会なんだ。そんな顔しないで笑え」

そう言つて義経の頭を撫でる。するとみるみる笑顔になつていく。

義経

「そうだな。今は笑顔だな」

龍一

「そうだぞ義経。さ、みんなのところに行きな」

義経

「うん！」

笑顔になつて弁慶を連れて2—Sのほうに向かつていった。

まったく。周りのことばかりで自分のことは省みないからな。

与一を探して見れば弓道部からの勧誘を受けているようだ。

ここはあいつのコミュ症を治すのにいい機会だと思い、あえて放置した。

まあ帰れば話を聞いてみるか。

立食しながら3—Sの面々と談笑していると百代がやってきた。

百代

「こんな美少女に話しかけないなんて重罪だぞ」

龍一

「冤罪もいいとこだ」

百代

「まあ冗談として、どうだ？楽しんでるか？」

龍一

「ああ。他学年とも関わられたし、料理も美味しい言うことなした」

百代

「そうかそうか。それでな稽古のことなんだが、ジジイと話して基本的に土曜でということなんだがそれでいいか？」

龍一

「ああ、予定があるとき以外ならそれでいい」

百代

「じゃあジジイにそう伝えておくからな。いやあ〜楽しみだな〜」

そういつてスキップしながら離れていった。

そんなに嬉しいものなのか？と視線で回りに振って見るが、みな肩をすくめるだけだった。

そのあともあちこち回りながら談笑し、立食し交流を深めていった。

歓迎会は大成功といえるだろう。

◇

九鬼財閥極東本部 義経の部屋

歓迎会も終わり帰宅した俺は義経達を部屋に集めた。  
もちろん誕生日プレゼントを渡すためだ。

龍一

「さてまずは義経からだ。誕生日おめでとう」

義経

「ありがとう龍兄。開けてもいいか？」

龍一

「ああ」

義経にあげたのはクマのぬいぐるみ。だが普通のぬいぐるみではなく、両手で挟んだ電子表示のプレートがあり、それには時計の機能と時間経過で変わるメッセージ機能がある。例えば朝なら「Good morning」や「Good night」だ。

今は誕生日をあらかじめ入力してあるので「Happy birthday」と表示されている。

義経

「わあくありがとう龍兄!!」

龍一

「どういたしました。後、それには面白い機能があつてな。音声を録音・設定することで目覚ましのおきにその音声流されるんだ」

義経

「へえ〜そうなのか。じゃあ龍兄、音声登録しよう」

龍一

「ん?俺の音声でいいのか?」

義経

「うん龍兄がいい／＼／＼」

龍一

「そうか。じゃあなんて言えばいい?」

義経

「う〜ん『起きろ、朝だ義経』と優しい感じで」

弁慶



「そこは『起きろ、義経。起きないとキスしてあげないぞ』くらい言ってもいいんじゃないかな  
いっ。」

義経

「こら弁慶!! // //」

弁慶

「ああ、怒った主も可愛いな」

与一

「(はあ)」

清楚

「あはは、弁慶ちゃんは揺るがないね」

龍一

「ふむ、それでいくか」

義経

「ちよっ // //」

龍一

「はは冗談だ。後で登録しとくから」

義経

「ほっ」

龍一

「次は弁慶だな。はい、誕生日おめでとう」

弁慶

「ん、ありがとう。こ、これは!!」

弁慶に渡したのは川神水。もちろんこれも普通ではない。

川神水が取れる場所、生産される場所はいくつかあるがその中でも幻の名水『川神水・龍』は20年に1本しか作られない。

川神水は源流を蒸留・加工したものだが、ある生産者が試行錯誤し作ったのがこれだ。『川神水・龍』は味はもちろんだが、なんととっても特徴なのが炭酸飲料に近いのだ。もちろんその成分に炭酸はない。製作過程での変質とみられるが詳しいことは製作者のみ知るところである。

龍一

「弁慶にはこれしかないと思ってな」

弁慶

「いや、ありがとう。まさか出会えるとは思わなかったよ」

龍一

「どういたしまして。次は与一だ。誕生日おめでとう」

与一

「ああ、サンキュ。お、おおー！」

与一に渡したのは与一がはまっていたゲーム、テイーズからそれを模したものを九鬼で魔改造したものをプレゼントした。

基本色の白にところどころ金の装飾が施されたまさに聖弓といっている代物だ。

見た目に反し装飾弓ではなく実用重視のもので、与一に合わせて作られたので本人しか使用できないもので、他人が使うと著しく命中精度が下がる。

龍一

「どうだ？」

与一

「おお最高だぜ!!弦を引いた感じも俺にぴったりだし、握りもフィットするしな!」

龍一

「そりやよかった。…そういうえば弓道部に勧誘受けてたがどうするんだ？」  
与一

「…ああ、せっかくだしやつて見ようと思う。行けないときもあると思うが」  
龍一

「そうか。頑張れよ」

与一  
「おう」

その後清楚がプレゼントを渡し、ケーキを食べたりした。

清楚が渡したプレゼントは、義経・弁慶が清楚とおそろいの腕時計。与一がシルバー  
プレスレットだった。

ケーキを食べた後、そのままゲームをしたり、麻雀したりした。

一度部屋に戻り携帯を確認すると燕からメールが来ていた。

燕

『明日暇なら川神の案内してほしいな』

龍一

『かまわれないが川神院で百代との稽古があるけどそれでもいいか?』

と返信した。すると1分たらずに返信が来た。

燕

『私も少したつたら川神院で合同稽古するから大丈夫だと思う』

と返ってきたので、

龍一

『それなら大丈夫か。なら10:00に川神駅の東口でいいか?』

燕

『いいともー!』

とものすごい早さで返ってきた。

そのあとシャワーを浴びて義経と弁慶のいる部屋で朝まで過ごした。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
d  
e

次回「川神案内」